

# JCAS Collaboration Series

9

## 子どもたちは 多様な地域に 何を学ぶのか

感じ方の育みと総合的理解の視点



飯塚宜子・王柳蘭 編

地域研究コンソーシアム(JCAS)  
京都大学地域研究統合情報センター  
NPO法人平和環境もやいネット

2015年3月

JCAS Collaboration Series 9

# 子どもたちは 多様な地域に 何を学ぶのか

感じ方の育みと総合的理解の視点

飯塚宜子・王柳蘭 編

地域研究コンソーシアム(JCAS)  
京都大学地域研究統合情報センター  
NPO法人平和環境もやいネット

# 目次

## ■ 刊行にあたって

王 柳蘭(京都大学地域研究統合情報センター／京都大学白眉センター特定准教授) …… 3

## ■ 序論

子どもたちが見いだす多様性と普遍性  
— 環境教育としての異なる地域への理解

飯塚 宜子(同志社大学総合政策科学研究科博士後期課程2年／NPO法人平和環境もやいネット事務局長) …… 5

## ■ 第1部 実践者からの報告

トリップ1『大草原！羊と旅する女の子』

ワークショップ『大草原！羊と旅する女の子』の実践を通して

飯塚 宜子(同志社大学総合政策科学研究科博士後期課程2年／NPO法人平和環境もやいネット事務局長) …… 16

シナリオ …… 21

参加者からのフィードバック …… 31

トリップ2『私の家は雲の上』

ワークショップ『私の家は雲の上』の実践を通して

木村 友美(東南アジア研究所 日本学術振興会特別研究員) …… 35

シナリオ …… 39

参加者からのフィードバック …… 46

トリップ3『森でゴリラに会ったらどうする？』

ワークショップ『森でゴリラに会ったらどうする？』の実践を通して

大石 高典(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員) …… 49

シナリオ …… 52

参加者からのフィードバック …… 66

トリップ4『ボクはオオカミ族』

ワークショップ『ボクはオオカミ族』の実践を通して

山口未花子(岐阜大学地域科学部助教) …… 68

シナリオ …… 73

参加者からのフィードバック …… 84

トリップ5『京都の森へ行ってみよう！』

森林・林業体験の受け入れについて

岩井 吉彌(京都・中川文化的景観推進委員会委員長) …… 88

参加者からのフィードバック …… 92

■ ワークショップに参加して感じたこと 三宅 由莉 …… 95

## ■ 第2部 地域理解による次世代教育の可能性

子ども世界の可能性 山田 勇(京都大学名誉教授) …… 100

政策的観点から見た異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育

新川 達郎(同志社大学大学院総合政策科学研究科教授) …… 104

10万年後の人類の姿を考えてみよう——キッズの想像力と創造力

縄田 浩志(秋田大学国際資源学部教授／総合地球環境学研究所客員教授) …… 108

育みとしての地域研究——フィールドの成果を次世代に架ける試みにむけて

王 柳蘭(京都大学地域研究統合情報センター／京都大学白眉センター特定准教授) …… 112

資料 …… 115

© Japan Consortium for Area Studies

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto, 606-8501, Japan

TEL: +81-75-753-9616 FAX: +81-75-753-9602 <http://www.jcas.jp/index.html>

March, 2015

## 刊行にあたって

「異文化の専門家がこんなに身のまわりにいるのに、どうしてこの知識や体験が普段の生活のなかにフィードバックされないのだろうか？」学生時代には思いもしなかった研究への疑問が、子育てをしながら研究を続けているうちにしだいに強まってきた。かたや子どもの保育や初等教育現場では、そこで使われている絵本や教材を見ている限り、おとぎ話は別にして、行ったこともない珍しい世界各地の多様な文化や歴史、自然が本格的にとりあげられている様子はあまりないようだった。私は研究者として海外でさまざまな体験をしつつ、研究を続けてきた。それなのに、子どもたちには私が経験した内容のほんの少しも伝えられていないのではなかろうか。学術用語で論文や本を生産するのが職業上必須であり、その訓練をつみ精進を重ねていくことは承知し、肝に銘じているつもりではある。しかし、自分だけ、あるいは自分たち大人の業界、しかも限られたオーディエンスに対して了解可能な研究成果の発信方法だけでいいのだろうか？ 子どもをもちながら研究を進めるうちにこうした研究成果の発信者と受け手との間の矛盾、コミュニケーション不足をいつしか感じるようになった。とくに、自分の子どもを1歳過ぎのころからフィールドワークに連れていくようになってから、子どもが感じとるフィールドのにおいや動植物、大人である私がとらえるフィールドへの視角とその感性の違いに驚いた。言うまでもなく、子どもの発見は新鮮なのだ。

はたして子どもの感性に働きかけるような研究成果の発信方法はあるのだろうか。そうした思いをひとりあたためていたところ、飯塚宜子さんが子どもをめぐる環境教育について研究していることをじかに私に教えてくれた。また、山田勇先生もたびたび同席してくださり、研究成果を子どもたちに伝えていく必要性について励ましの言葉をかけてくださった。こうした出会いと議論の積み重ねのなかで、本ワークショップの基盤となるJCASの次世代ワークショップ「異文化・環境教育枠」が生み出された。地域研究では、政治や経済を客観的アプローチから理解していく姿勢もあれば、人類学的手法に近い形でフィールドに生きる人々の主観的経験に寄り添う形でアプローチする方法もある。こうしたディシプリンの多様性を反映して、JCASではさまざまな企画が実践され、それを支援するための枠組みがある。しかし、子どもの異文化理解や環境教育の実践とその架け橋となる研究を支援する枠組みは作られていなかった。JCAS次世代ワークショップ「異文化・環境教育枠」のねらいは、異文化を同時代の人間だけ、とくに大人だけで了解可能なものとして片付けてしまわずに、次世代を担う子どもたちに向けて、その知的遺産を分かりやすい形で、そして体を通して、さわったり、歌ったり、みんなで作ったりしながら、異文

化の世界を経験してもらうことにある。また、単なる異文化経験のみならず、ワークショップに参加することによって得られる自文化への気づき、子どもの主体性やコミュニケーション力の育みなど、その効果は未知数であろう。

本報告書は「異文化・環境教育枠」企画の第1弾である。異なる地域と文化から構成された4つのトリップが京都大学の屋内で実施された。また、1つの野外トリップが京都・北山杉の里である中川北山町で地元住民との協力のもとで行われた。これら5つのトリップのうち、環境教育と地域研究との協働作業にもとづくシナリオ作成は本報告書の目玉となっている。研究者側が用意したシナリオに親子が参加する。これらはフィールドワークを素材にした体験型ワークショップであるが、単に参加するのみならず、ワークショップに関連したワークシートに各人取り組む。さらに、実施後、子どもたちの体験を追調査する。異なるテーマ設定にもとづく4つのプログラムであるが、大まかな進行と枠組みは統一されており、子どもの各ワークショップに対する感想や経験を比較できることにもなっている。したがって、読者は好きなトリップから読み進めていただくことも可能である。

いずにせよ本報告書の意図がどこまで伝わっているのかは、読者にゆだねられるが、企画者の一人として得られた興味深い発見は、子どもたちから研究者に投げかけられたフィードバックの数々である。研究者にとって、子どもたちとのコミュニケーションには、ゼミや学会発表からでは得られない貴重な経験と視点が含まれているのではなかろうか。

異文化は自分の身から遠ければ遠いほど、単純化した図式のなかで分かったつもりになってしまいがちである。だからといって、本格的なフィールドワークには専門的な訓練や学術的知識が必要で、子どもたちにはすぐに手が届かないかもしれない。しかし、フィールドを経験してきた研究者が自らの経験をもちよって異文化を伝えるとき、研究者と子どもたちのなかで新しいリアリティが生まれてくる。世界を駆けめぐってきたフィールドワーカーの好奇心と学びの実践過程を少しでも次世代を担う子どもたちにおすそ分けができたなら、どんなに夢が広がるだろうか。子どもたちとの関わりを通して、フィールドワークとは一味ちがった旅を再経験することができれば、研究者自身にとってアウトリーチ活動は、未来を見据えた持続可能な研究への架け橋となりうるだろう。本報告書はそうした試みの第一歩である。

京都大学地域研究統合情報センター／  
京都大学白眉センター

王 柳蘭

# 子どもたちが見いだす多様性と普遍性

## 環境教育としての異なる地域への理解

飯塚 宜子 同志社大学総合政策科学研究科博士後期課程2年 / NPO法人平和環境もやいネット事務局長

### 背景

この実践研究の背景には、母親としての子育て体験がある。子どもたちに最善の教育を、と20数年を過ごした。そして今振り返ると何か大切なものを伝え損なったような気がしてならないのだ。偏差値を上げることや経済的合理性など、必要ではあったが、本当に伝えたいものであったと思えないのである。現代の子どもたちが置かれている状況や環境は、近代化・都市化の中で、個としての暮らし方が機能的に整備されているものである。都市における子育てが培おうとする子どもたちの能力も、そのような暮らし方を前提としている。子どもたちは市場経済の中で生きる経済力、他者と会話や議論ができるコミュニケーション能力、時間を合理的に管理する能力など、市場経済、民主主義、基本的人権など現代文明社会を支える重要な価値観を学び、枠組みを再生産し、円滑に機能させることを期待されている。それらはもちろん重要な能力である。しかし、筆者が子どもたちに伝えたかったことは、何か、都市生活外の人間にも共通するもの、逆に都市生活で見失われがちな、人間の生活の基層にあるものように思われるのである。

今日、豊かさとは何か、幸福とは何かと、しきりに問われている。大量生産や大量消費という「物質的な豊かさ」は人間を本当の豊かさや幸福に導かず、地球環境を損なうのだと広く語られ、現代社会をよりよく変革していくべきことが共有されている。そのためにはこれまで近現代が依拠した価値観や世界観を乗り越えていくことが必要だ、とも主張されている(例えば見田<sup>1)</sup>(2006))。そのような中、環境教育は、「人間としての自分自身の生き方や、総合的な意味での人間と自然との関係、社会全体のありようを問い直す契機とな

る」<sup>2)</sup>(今村、井上)べきものと、そのあり方が問われている<sup>3)</sup>。そのような根幹的な深い学びを触発するための有効な手法やツールはあるだろうか。本研究では地域研究の知見を基盤とした異文化地域理解が、子どもたちの今日的な環境への深い学びにつながってゆく可能性の提示を試みたい。そのような学びが、筆者の「子育てへの違和感」をも乗り越える手がかりになっていくのではないかと考えている。

### 研究の枠組

たった30年前、40年前の日本には、多くの自然と共にある暮らしがあった。しかし今日、都市住民、特に生まれながらに都市に住む子どもたちは、都市という環境のみが視界のすべてになりがちである。自然とふれあおうと山や森に出かけても、夜になれば日常に帰る。つまり、自分の暮らしと自然は別のもので、切り離されたものという認識なのである。そのような子どもたちが今後ますます増えていくだろう。そして、これからの未来社会を創っていくのは彼らである。地球の「未来可能性」は、大人の議論や本の中だけでなく、子どもたちそのものにある。

人間がいかに先端的科学技術、高度な情報化社会への階段を上ろうと、人間は自然の一部であることに何ら変わりはない、と考えることから始めてみよう。私たちは、親から生まれ、他の生きものの命を食べることで自らと次世代への命を繋ぎ、死んでいく、という自然循環の一部である、といえる。どんな文化下においてもそれは基盤として同じである。昔へ帰ろうと言っているのではない。高度な技術社会に歩をすすめるなら、なおのこと、子どもたちが地域に根ざして生きる人間のありようや、自然と人間の関係性を理解するための学びが必要ではないか。

1) 見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』(2006)

2) 今村光章、井上有一「〈環境教育〉から環境教育へ」『環境教育学——社会的公正と存在の豊かさを求めて』(2012)pp.1-8

3) 日本環境教育学会編『環境教育』(2012)では環境教育の方法として「自然観察・自然体験」、「参加型学習と市民教育」、「科学的アプローチ」、「学校と地域の連携」、「多様なステークホルダーとの連携」が示されている pp.107-173

日本の自然と人間の関係性を理解したり、多様な地域を見つめ直すために、多様な地域に根ざす暮らしを体験的に知ることを試みたい。日本の田舎を退屈だと考える子どもにとっても、異なる地域は新しい世界であり、自分の暮らしを相対化するものになり得るだろう。

## 研究の目的

本研究では、多様な地域に根ざす暮らしの特徴的なものを整理し、子どもたちがそれらを体験的に学ぶ場を創出する。この研究の目的は、現代の都市住民や子どもたちが、地域研究の知見に基づく多様な「土地に根ざす暮らし」を知ることにより、あるいは自らの都市生活を相対化することにより、見だし得る新たな視座や知見を明らかにすることである。その新たな視座や知見の中に、今日的環境への学びとして重要なものがあるという仮説に基づき、プロジェクトを実施する。

今日、先住民らの社会においても、都市化、経済効率を優先する考え方、グローバリゼーション下の政治力の影響、開発と環境保全のせめぎ合いがある。地域研究は、そのような地域の変容を捉えつつ、社会、経済、文化、宗教が不可分の生活や生業についての知見を蓄積している。すなわち、風土、風景、空間の履歴<sup>4)</sup>、超自然的なものとの繋がりなど、地域と人間の関係性を科学的記述として言語化している。これらを整理し、フィールドワークの疑似体験のように、子どもたちと学ぶ場を創出していく。

本実践には、もう一つの学びの側面もある。近代の日本では、多くの若者が、より良い仕事、より便利な生活を求めて生まれ育った地域社会を離れ、都市へ向かった。結果、耕作放棄地が増加し、森林が荒廃し、過疎の集落が増えていった。土地に根ざす小規模な生業や生活の中に内在する技術や知恵などの在来知は、世代間で継承されず、生物文化多様性も喪失していく。このような地域課題は、日本だけのものではない。世界の地域それぞれの背景や歴史は異なるが、問題の構図は類似している。日々変化する地域社会は、特に今日、グローバル経済の影響下で、日本と同様劇的に変容している。奥深い土地へも道路が整備され、人はメガ・シティへと移動していく。しかし一方、先住民が自分たちの土地や暮らし方を守ることは、今日の世界の最善の環境保全であるだろう。本実践は、そのような

都市と地域の暮らし方が、今後の世界でどのようにあるべきなのか、という問いを都市住民の子どもたちに投げかけるものにもなり得ると考えている。

## 実践研究の方法

多くの地域研究者の調査・研究の成果は記述を基本としながら展示、映像、図録、語りなどで表現・発信されてきた。本研究では子どもたちや都市住民がより自分に引き寄せ、地域を体験的に理解できるよう、ワークショップ手法での発信を提案する。

ワークショップとは、1つの正解への道筋をなぞったり知識を憶えるのではなく、自分の目で見て、聞き、体験し、身体で受け止めて感じたことを自分の言葉で表現し、体験を共にした他者と共有しあい、能動的に学びを深めていく方法論である。プログラム開発と実施については、現地での暮らしが身体化している若手の文化人類学者、地域研究者の協力を得る。生業や暮らしを物語のように語り、それぞれの生業や生活の写真を軸に、映像、視覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚という五感を働かせるモノに触れる、飲食物を食するなど、多くのワークを実施する。プログラムで見聞きしたこと、考えたことなどは配布したフィールドノートに記録してもらおう。フィールドでの疑問が共有できるようクイズ形式で進行する。参加者が現地へ赴くこと無しに地域の全体性を感じとる——いわば第六感を働かせるように、現場に身を置くようにフィールドワークを疑似的に体験することを設える。

今回は4つの地域の暮らしを知るワークショッププログラムを開発した。それぞれを参加者が体験する旅として、トリップ1(モンゴル遊牧民)、トリップ2(チベット族)、トリップ3(バカ・ピグミー族)、トリップ4(北米先住民)と名づけた。小学2年生から6年生の子どもたち、およびその保護者を対象として、このプログラムへの参加者を募り、ワークシートの記述、様子、発言、感想、またプログラム実施後1ヶ月後のアンケートなどをもとに、得られる知見などの分析を行う。

## プレワークショップ(研究会)

本研究は2011年にモンゴル遊牧民の暮らしを知るプログラムとしてスタートした。2012年の王柳蘭先生(京都大学白眉センター)との話し合いから「異文

4) 桑子敏雄「『空間の履歴』から読みかえる環境思想——『安全神話』の真実」秋道智彌編著『日本の環境思想の基層——人文知からの問い』(2012)岩波書店 p.24-46を参照。

表 プロジェクトの経緯と流れ

| 年    | 月      | 要項   | 枠組                                   | 実施場所                   |
|------|--------|--|--------------------------------------|------------------------|
| 2011 | 8月～    | ●モンゴルでのフィールド調査を基に、遊牧民の暮らしを知るワークショップ開発と実施を始める<br>●北米先住民クリンギット族コミュニティへの訪問を開始   | 愛知県立大学多文化共生研究所との連携など                 | モリコロパークなど              |
| 2012 | 8月     | ●サマースクール「京都で世界を旅しよう 地球たんけんたい」にてモンゴルワークショッププログラム実施                            | 京都府地域力再生助成事業                         | 京都市左京区総合庁舎／京都市左京区広河原など |
|      | 8月     | JCAS次世代WS採択  |                                      |                        |
|      | 9月     | ●プレワークショップ実施   |                                      |                        |
|      | 10～11月 | 3つのプログラム開発ワークショップ  | JCAS次世代ワークショップ／京都府地域力再生助成事業(トリップ5のみ) | 京都大学稲盛財団記念館／京都市北区中川北山町 |
| 2013 | 11～12月 | ●「京都で世界を旅しよう！2013地球たんけんたい②」トリップ1～4 ワorkshopプログラム実施<br>トリップ5 フィールドトリッププログラム実施 |                                      |                        |
|      | 2月     | 最終ワークショップ(研究会)『生物文化多様性に学ぶ環境教育—エコソフィーに学ぶ意義と可能性を考える』実施                         |                                      |                        |

化理解と環境教育」の企画枠組が生まれ、2013年度のJCAS次世代ワークショップとして採択された。2013年9月にプレワークショップを実施し多くの共同研究者にさまざまな意見を頂いた(巻末資料参照)。

### プログラム開発ワークショップ

木村友美氏(京都大学東南アジア研究所)、大石高典氏(総合地球環境学研究所、当時京都大学)、山口未花子氏(岐阜大学、当時北九州市立大学)という3名のフィールドワーカーと協働し「プログラム開発ワークショップ」を実施した。地域でのエピソードや知見を共有し、プログラムのねらい、ストーリー、五感に働きかけるアイテム、使用する写真、導入方法や問いかけなどのシナリオを決めていった。

対象地域については多様な自然と生業をとりあげた。人間を含む生態的な循環が見えやすい遊牧の舞台であるモンゴルの草原、先進的国家の中に北米先住民のコミュニティがあるカナダの北方、カメルーンのバカ・ピグミー族が暮らす熱帯雨林、チベット族が暮らすヒマラヤ高地という4地域である。すべてのプログラムには、それぞれのメインテーマの他に、2つの共通テーマを設定した。1つ目は「それぞれの自然環境に根ざした暮らし方と日本の子どもの暮らし方との比較を、子どもたち自身ができるようにする」ことであり、2つ目は、「それぞれの地域の人びとの心や価値観にふれる」ことである。

### 実践ワークショップ(子どもたちや一般市民が参加)

これらのプログラムは『京都で世界を旅しよう！2013地球たんけんたい2』<sup>5)</sup>として、2013年11月から12月にかけて、京都大学稲盛財団記念館のセミナー室や会議室などを会場として実施した。4つのワークショップを通して、子どもたちを含む一般参加者82名、講師やスタッフ34名の参加を得た。後述するトリップ5『京都の森へ行ってみよう！地球たんけんたい2』には子どもたちと一般参加者36名が参加した<sup>6)</sup>。

### 最終ワークショップ(研究会)

2014年2月6日、一連の実践研究を振り返る研究会『生物文化多様性に学ぶ環境教育—エコソフィーに学ぶ意義と可能性を考える』を京都大学稲盛財団記念館大会議室にて開催した。トリップ担当者が、実践現場で何が起こり、何がうまくいき、何ができなかったか、新たな学びや視点があったか、研究者にとりプログラムはどのようなメリットやデメリットがあったかなどを報告し、関係者や参加者からコメントや意見を寄せて頂いた。その時の発表や議論をもとに本報告書は編まれている。詳細は後述の章に譲るが、簡単に4つのトリップを振り返りたい。

## トリップ1 モンゴルの草原

トリップ1は、先行プログラムである。2011年夏、筆者によるモンゴルでのフィールドワークで得た調

5) 『京都で世界を旅しよう！地球たんけんたい』の第1回目は2012年夏に、①世界の子子どもたちが描いた環境ポスター(総合地球環境学研究所所蔵の「国連子ども環境ポスター」)を活用したワークショップ、②モンゴル遊牧民の暮らしを知るワークショップ、③京都市花脊、広河原、佐々利峠へのフィールドトリップという3回シリーズで実施した。

6) 山田勇京都大学名誉教授の引率により、京都府府民力再生プロジェクト支援事業の助成を得て実施した。

査記録や文献をもとに、文化人類学やワークショップの先生方の監修や意見を頂きながら開発した<sup>7)</sup>。大学での授業やイベントなど、7回の実践をもとに修士論文と研究ノートをまとめ、多様性、価値の相対化、自然と人とのつながりへの気づきなど、モンゴル遊牧民に学ぶ環境教育の可能性を論じた。その後も小学校等での授業、京都市小中学校教員向け研修、児童館での実践などを経て今回の実践は15回目である。このプログラム「大草原！羊と旅する女の子」のメインテーマは「人と土地の関係性」とした。

ある夏の日曜日の昼下がり、ゲルに住まう祖父母と両親のもとに、11歳から18歳の4人の子どもたちが集う。そこに叔父さんと従兄弟が加わり、羊を屠殺し、料理し、共に食し、馬の乳搾りをし、馬乳酒を醸造し、乗馬を楽しむ。それは車両、携帯電話、自家発電といった近代的機器を取り入れながら、子どもたちは都市の小学校や大学に通いつつ、伝統的な暮らしの形態を保持する遊牧民の一家の暮らしである。

この一家の次女、オウンティユちゃんという12才の遊牧民の女の子の目を通した形で、家族経営的な小規模な経済社会活動、継承される生業や文化、宗教的感覚を整理して<sup>8)</sup>描く。それにより社会・経済・文化・宗教的感覚が切り離されず一体となる<sup>9)</sup>モンゴル遊牧民の生活の「場」が浮かび上がるのである。それは前述したように、風土、風景、空間の履歴、超自然的なもの、伝統的生態知などを含む、地域と人間の関係性を浮かび上がらせることにもなる。

フィールドでの調査時には、オウンティユちゃんを始めとして、数人の遊牧民の子どもたちにカメラを手渡し、彼らの「大切なもの」を撮影してもらった(写真1)。遊牧民の子どもたちの世界観、土地や地域への認識がそこに部分的にでも映し出されると思ったからである。トリップ1のプログラムでは、オウンティユちゃんが撮影した3枚の写真も紹介した<sup>10)</sup>。スーテーツァイ(塩入ミルクティー)を試飲、シャガイ(羊のくぶしの骨)や羊毛、フェルト、ハダック(儀礼に使う青い布)、民族衣装<sup>11)</sup>、馬頭琴などのモノに触れる体験



写真1 撮影する遊牧民の子ども



写真2 馬頭琴に触れる参加者

を通して考えることも大切にした(写真2)。

子どもたちや参加者の詳しい感想については次章に譲るが、子どもたちが遊牧の暮らしを自分に引き寄せて受容したことはその感想から伺うことができる。子どもたちは、毎日自分のいのちをつなぐ食が大地から来ることに気づき、都市生活の食のあり方を相対化し、また自分の生活の中には「感謝」が無いと表明した。またこれまでの大人の参加者の中には、自然のコモンズ性に触れる気づきや、二元論ではない自然認識に関わる発言も見られた。

## トリップ2 ヒマラヤの高地

トリップ2は、日本や海外で医学検診をし、健康長寿と食事の関連、心の健康などを研究している木村友美氏(京都大学東南アジア研究所・日本学術振興会特別研究員/当時京都大学東南アジア研究所連携助教)と共にプログラムを開発した。タイトルは「わたしの

7) モンゴルワークショップ開発にあたっては、稲村哲也氏(愛知県立大学多文化共生研究所長(当時))に実施枠組や基本的講義を頂き、小長谷有紀教授(国立民族学博物館)にプログラム内容についての大きな教示を受けた。

8) モンゴルの生活世界に関して以下のような文献を参考にした。小長谷有紀『モンゴル』世界の食文化 石毛直道監修(2005)農山漁村文化協会、梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集Ⅳ モンゴル研究』小長谷有紀編(1990)中央公論社、稲村哲也『草原と砂漠における社会文化と環境問題』『人類学研究—環境問題の文化人類学』pp.141-153 内堀基光、本多俊和編(2010)放送大学教育振興会、小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(1996)朝日新聞社、など。

9) 宗教・文化的リンクと社会・経済的リンクが切り離されない「関わり全体性」について鬼頭秀一の議論を参考にしている。鬼頭秀一『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』筑摩書房、1996年

10) シナリオ1参照

11) 私物以外に、国立民族学博物館の社会教育事業である「みんぱっく」を活用した。

家は雲の上」とした<sup>12)</sup>。

このプログラムのメインテーマは「誰かのことを思う気持ちを思い出す(人と人のつながり)」である。酸素も薄く、木も緑も殆どない5,000mの高地でも人間は生活をしている。そのような極限といえる厳しい環境を、まず子どもたちに、「ヤクの毛」に触れたり、「ツァンパ」を自ら製作して食してもらったりしながら感じとってもらおう。

そのような環境の中で、チベット族の人々が、最も幸福を感じる時間はどんな時間かを、子どもたちに想像してもらった。3位から順に挙げていくのだが、幸せな時の1位は、圧倒的なパーセンテージで「祈る」時である。しかも彼らは決して自分のことを祈らず、他者のため、世界のために、多くの時間を費やして祈るという。木村氏は以下のようなエピソードを紹介した。医療検診のテントの中のハエに軽く殺虫剤を撒いた翌朝、地域の人々がいつもより長い時間をハエのために祈りに費やしていたことや、1つだけ願いを叶えてくれる神さまに、チベットの若者は世界平和を祈り、自分のことを祈った木村氏のことを不思議がったことなどである。また彼らの心の幸福度は日本人よりも高いという木村氏らの研究データも紹介した。参加者は、彼らの祈りのツールであるマニ車や祈祷旗の意味を知り、それらを使いながら、「祈り」を体験した。そして、このプログラムのハイライトは、「カタ」という旅の安全や幸運を祈りながら相手にかける白い布を、家族や知人でお互いにかけてあうワークだった。相手の幸せを祈ること、その想いを受けることで、会場が笑顔に満ちた(写真3)。

「資源の乏しい地域の人々が、最も資源を大切にする」<sup>13)</sup>(山田)と言われる。厳しい環境の中で、動物と共に生き、近隣の農民と糧を交換し、他者や世界のために祈る人々、元気な子どもたちという地域のありようが、参加者にとって、大変印象深い様子がかがえた(写真4)。

その暮らしの様子に「本当にびっくりした」(小1)という感想が見られた。また、ドルマおばあちゃんが「自然から離れると楽しくないと思う」(小3)という感想からは、土地と共にある「楽しさ」を見いだす生き方を想像しえていることが伺える。

「伝統的な暮らしが失われることなく、将来の世代



写真3 カタをかける



写真4 トリップ2の様子

に受け継がれていくことが大切なことだと思う」(大人)、「伝統的な生活を、相手の幸せを願うという習慣を、守ってくださり本当にありがとうございます、と言いたいです。世界中のそういう生活、習慣が一つでも失われないように願うばかりです」という参加者の感想があった。チベットというフィルターを通すときに「伝統的な生活や文化」を捉え直す視点が浮かび上がっているのではないだろうか。それらは自分たちとの共通の財産のように認識されているように思われる。現在の資源を損なわず次世代に引き継いでいく「世代間公正」は、環境倫理の分野でも重要な視点であるが、これらの感想から、このような視点が拓かれていく可能性があるように思われるのである。

### トリップ3 カメルーンの熱帯林

トリップ3は、小学校の時に「魚つかみ」に没頭して以来、人と自然の関係に関心をもち、2002年から10年以上アフリカの森に通っているという大石高典氏(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員/当時京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員)と協働で

12) ラダックにおけるチベット民族の生活世界に関しては、ヘレナ・ノーバグ=ホッジ『ラダック懐かしい未来』(2003)『懐かしい未来』翻訳委員会翻訳、山と山溪社などを参考にした。

13) 山田勇「ブルネイ、スマトラ、カリマンタンの泥炭湿地林:1970年~2014年の記録から熱帯低湿地開発の将来を考える」『泥炭地再訪:40年の変化』での講演より。東南アジア研究所・地球研機関連携プログラム「熱帯泥炭地域社会再生に向けた国際的研究ハブの構築と未来の可能性に向けた地域将来像の提案」FS研究会、2014年9月24日

開発した。タイトルは「森でゴリラに会ったらどうする？」とした<sup>14)</sup>(写真5)。

トリップ3のテーマは、ゴリラや精霊と人間の関係から、「人間の力を越えたもの」とのつきあい方を感じとり、考えることである。まず前半は、大石氏が長年通うカメルーンの森に住むバカ・ピグミー族の狩猟採集や暮らしの様子を「ククルくん」と「ベミスちゃん」という兄妹と一緒に体験していく。森の中の類人猿、見たことのない動物、人間が太刀打ちできない昆虫、自然に還る住まい、ゾウも倒す狩猟採集の様子などである。

後半は、ククルくんたちの冒険の物語である。ククルくんたちはブルーダイカーの子どもを追いかけ森で迷い、ゴリラに出会ってしまうが、最後は無事に村に帰る。精霊「ジェンギ」の手紙に導かれ、通過儀礼に臨む——このようなククルくんの生活世界から、人間の力を越えたものとの共存の術を感じとってもらうことを目指した。それは、自然への感謝と畏れ、その両面に向き合う人間の知恵といえるものである。

トリップの最後には「人間以外で凄いと思うもの」を3つ挙げ、それらはなぜ凄いと思うのか、考えてみるワークを実施した。都市生活では、自然の脅威を人間の「コントロール下」のものとして扱おうとする。人間が「管理」するもの、というとらえ方とは異なる自然のとらえ方を、ここでは体験してみようとするものである。例えば、日本でも1965年あたりまで人間もキツネによくだまされていたという(内山 2007)<sup>15)</sup>。古池や深い森を怖れた感覚を、大人は思いだすだろうか。都市生活を送る子どもたちは日常の中で、自然を怖れることは殆ど無いだろう。ワークの中で人間以外のものの力をどのように捉えてみるだろうか。

回答は、自然物を挙げるものが大変多かった。「木、風、土、水は人間がつくったものじゃないから。それらのモノに人間や動物は助けられているから」(小3)などである。「太陽」は最も多い回答であり、「水」、「海」「土」も挙げられていた。「白いへび:昔から家の主だと聞かされたから」(大人)。「神木」など、超自然的な日本の伝統的表象も挙げられた。「サスライアリ」、「ジェンギ」など、トリップの中で見聞きしたものを受容する回答や、「鳥」、「魚」、「くも」(小2)など、身近な動物や虫などを見つめ直す回答も見られた。

また、「場の履歴」に関わる感想がみられた。小4の



写真5 トリップ3の様子

男子が、「僕は、カメルーンの人が都会に行ってしまうことになったら……と考えると、甲子園球場がドームになるのは嫌だということを思い出しました。(甲子園球場の炎天下でやる野球の歴史がなくなってしまうと思うからです)」(小4) というものである。炎天下の野球が快適なクーラーの中の野球に変容する時、「甲子園球場」を共有した人々の記憶は継承されなくなり、場の履歴が消えてしまう。「ドームになる」ということは、単純に建築様式が変わることではなく、そこにあった何か大切なものが失われるという感覚が、トリップ3の学びに触発されることで、表現されたといえる。

トリップ3の反省点としては、熱帯雨林での暮らしと日本の暮らしがかなりかけ離れているため、素直な比較が難しいように思われたことが挙げられる。また熱帯雨林内の動物や植物自体がとても興味深いため、どうしても細部の説明に時間が割かれ、体験のアクティビティが少なめとなった。トリップ3の大きなテーマに近づきやすくなる工夫を考えることが今後の課題である。

## トリップ4 北米大陸アラスカ周辺

トリップ4は、幼いころからの「動物と話がしたい」という動物好きが高じ、カナダのユーコン準州に住む狩猟民カスカ族の古老から、動物と共に暮らす方法を学んでいる山口未花子氏(岐阜大学地域科学部助教/当時北九州市立大学特任講師)と協働した。筆者が数回訪れたブリティッシュコロンビア州のアトリンという町に住むクリンギット族の紹介も1つの軸とした。隣あわせた土地に住むカスカとクリンギットは共

14) 大石高典『「人間ゴリラ」と『ゴリラ人間』——アフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の交錯と混沌』『人と動物の人類学』奥野克巳、山口未花子、近藤祉秋共編(2012)春風社 pp.95-133を参考にした。

15) 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(2007)講談社現代新書

通する点が多く、並行して紹介することでより重層的に彼らの生活世界が理解できる<sup>16)</sup>と思われた。

北米先住民部族の多くは、政府の同化政策により文化の伝承が一時分断されたという歴史を持つ。その後多くの部族は土地返還のために闘うが、クリンギット族も地方政府と土地利用計画を締結している。彼らはカラス克蘭とオオカミ克蘭のいずれかに属し、婚姻時は必ずもう一方の集団から配偶者を選ぶ。カラスヤオオカミなど動物を祖先や護り神に持つという思想を持つ。そして「すべては1つ」という認識などを繰り返し子どもにも伝えている<sup>17)</sup>(飯塚 2015)。

トリップ4のプログラムはクリンギット族、オオカミ克蘭10才の男の子、アデアくんを主人公とし、テーマは「私たちは大地の一部、水の一部」という先住民の言葉の意味を感じとり考えることとした。プログラムタイトルは、「ボクはオオカミ族」である。

プログラムでは、クリンギット族による次世代への伝統文化や生業の継承のためのキャンプの様子、アデアくんの日常や「大切なもの」の写真の読み解き、カスカ族による動物の魂を自然に還す儀礼などを紹介した。カスカ族の人々は、ヘラジカの魂は気管に宿ると考え、狩猟後に気管を森の木の枝にぶらさげる。そうすることで、またヘラジカは肉や皮を身につけて、人間のもとへ戻ってきてくれると考えるのである。燻製サーモン、薬草茶の試食、ヘラジカの角、スグリの頭骨などにも触れ(写真6)、クリンギット族の歌やドラムも紹介し、最後はアデアくんの「自分は土地や水の一部」という発言について考えてもらった(写真7)。

子どもたちは、「自分が食べたものは自分の一部になる。普段わたしは生きものを食べているということを考えていなかった」(小2)など、生きものとしての人間を改めて認識する感想が見られた。「土地を大切にしているところが私とちがう」(小2)、「アデアくんが「一部」ということは命と同じくらい大切なんだなと思いました」(小3)、「水や動物のおかげでボクが元気でいられる」(小1)など土地と自分の関係を捉え直す発言も見受けられた。大人にも「確かに全ては繋がっている」(大人)、「人には魂がある」という話によくされるのに、動物についてはそういうことがないな、と気づかされた」(大人)など、自分の自然観を捉え



写真6 ヘラジカの角に触れる



写真7 トリップ4の様子

直す発言が見られた。

「自然との繋がりが深くてうらやましい。私たちの先祖もそうだったと思う」(大人)、「自然の恵みを頂くことの畏敬の念」(大人)、「日本のいただきます、ごちそうさまに通じる」(大人)などは、自らの地域と人間の関係性を再認識する感想といえる。

## トリップ5 京都の森へのフィールドワーク

世界の多様な地域への4トリップの後、京都の中川北山町の森へリアルなフィールド・トリップ(トリップ5)を実施した<sup>18)</sup>。京都市街の西北約20kmに位置する北山地方、特に北区中川北山町は、丸太林業地帯として、長い歴史を持つ。北山杉は、切り立った山の急斜面に、長年の手間と愛情を注がれて生育する(写真8)。「土地と人の関わり」が美しい景観をつくる。「世界で最も美しい“人の手が入った森”」(山田勇)であり、川端康成の名作『古都』の舞台でもある。数寄屋造り、茶室など、京都文化を長く支えてきた。しかし、他の林業地帯と同様、過疎化、若者・子ども世代の不足、という

16) 北米先住民世界の理解のために以下のような文献を参考にした。煎本孝、山岸俊男『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』(2007)世界思想社、山口未花子『動物と話す人々』、『人と動物の人類学』奥野克巳、山口未花子、近藤社秋共編(2012)春風社 pp.3-18、星野道夫『旅をする木』(1995)文藝春秋、など。

17) 飯塚宜子『北米先住民タク・リバー・クリンギット族の土地に根ざす教育』、『同志社大学総合政策科学』15(1)印刷中

18) 海外渡航歴130回、世界と日本の森を歩き尽くす森林生態学者である山田勇京都大学名誉教授が引率した。

大きな課題を抱え、地域の小学校は2013年4月に閉校になった。地域の自治振興協議会においても、都市部の子どもたちが地域の魅力を知るような活動については、積極的に受け入れを始めている。

トリップ5のテーマは「京都の森と心を訪ねよう」であった。都市住民にとっては、伝統の生業、土地と人とのつながりを体験的に知り、未来に継承すべきものを考える契機になる。地域住民にとっては、都市住民が中川北山地区の何に魅力を感じ、どこにニーズがあるかを知る機会となる<sup>19)</sup>。

参加者は、往路のバスの中で、山田勇先生から北山杉などについての短い講義を受け、中川北山町に到着した。岩井吉彌先生<sup>20)</sup>らと共に森へ移動し、まず名人の枝打ちを見学した。高い木の梢から隣の木へ、命綱無しに乗り移る姿が大変印象的だった様子は、参加者の感想からうかがえる。子どもたちも枝打ち体験やはしご登りを行った。昼食は小屋の周りできき火を囲んだ(写真9)。切って尖らせた木の枝に生魚を刺し、たき火の近くの地面にさし、火のほうにかたむけて焼く。これは伝統的な林業従事者の昼食で「ひのさい」と呼ばれる。昼食後は森へ入って遊ぶ。その後、北山町ならではの「すべすべ丸太磨き」を行う(写真10)。この地の民話的伝承の通り、菩提の滝の砂で磨くことで、北山杉はツルツルになる。参加者からは「見ただけでは、あのキレイさは伝わらないのかも。触って、自分で磨いて、頬づりして、はじめて、日本の工芸の美しさにうっとりできたような気がします」(大人)という感想が寄せられた。最後は旧小学校の体育館にて、自由な木工を行った。

子どもたちは「ほこらしい北山杉」(小2)や「自然がいっぱいあること」(小4)、「北山杉の柱がきれい」(小6)などに魅力を感じたとの感想があった。異文化理解ワークショップとの相乗的な興味と理解が触発されるためには、さらに工夫が必要と思われる。が、並行してすすめる、回を重ねる中で、子どもたちの気づきが生まれてくることを期待している。土地との深い関わりを基盤とする地域の暮らしの具体的な全体性から、共に学ぶ貴重な機会を生かしていきたいと考えている。

## 子どもたち／参加者による発見

本報告書は、中間報告書である。私たちは今回の反省点やフィードバックを踏まえて、プログラムや問い



写真8 中川町の北山杉



写真9 たき火であぶった「ひのさい」を食べる



写真10 丸太磨き体験

かけを改良し実践研究を続ける予定である。中間報告として、子どもたちや都市住民がこれまで見いだしたもののや、触れられたものの中で、特に興味深く思われたものを数点挙げてみたい。

## 自然観

私たちはよく「自然を守ろう」というように表現する。大切なものとして自然は、自分と対置されている。都市に暮らす私たちにとって、それは常識的な感覚である。しかし例えばモンゴル遊牧民の暮らしを見た参加者には、そういう二元論と別の感覚の「自然のとらえ方」を感じとることが可能であった。それは、「動物や自然に対しての壁が無い。自分もその一部分として

19) 京都府地域力再生プロジェクト支援事業の助成金も得て実施した。

20) 中川自治振興協議会文化的景観推進委員会委員長

生きている」(大人)という感想にも表れている。

クリンギット族の男の子の「ボクは水の一部」という言葉にも二元論ではない自然観は表現されている。これを受けた参加者は、「確かに全ては繋がっている。でも日本に住む自分たちにはなかなか理解できない。自然から切り離されすぎて」(大人)と語る。成人の身体の60~65%、子どもの身体の70%は水でできているという「知識」と「腑に落ちること」は異なる。「対象としての自然」以外の自然観があり得ることに、子どもたちが触れる機会は、都市を生きたり未来の社会をつくっていく上でも重要なのではないか。

## 畏敬

実践を通して、4つの離れたそれぞれの文化に通底するものの1つは、土地や自然への人々の「畏敬」ではないかと思われた。地球上の遠く離れた土地に、様式やかたちは違えどもそれぞれの「畏敬」のかたちがある。カスカ族はヘラジカの気管を森へ還す。モンゴル遊牧民は季節初の馬乳酒を、人間が食す前に空と土の神に捧げる。バカ・ピグミー族の精霊ジェンギは、畏敬にイメージと名前を与えたものといえるだろう。それは伝播したというより、その「場」や「自然環境」に触発された人間の内部から発生したもののように思われた。地域研究の科学性や客観性をもってすれば、多様な土地に生きる人間の内発的感性が提示できるのではないか。それにより、私たち都市住民は、日常の意識を相対化することができ、新たな環境の学びが生まれるのではないかと思われるのである。

## それぞれの土地の暮らし

「日本の文化がいいと思ったけど、他の国の文化もいいなと思った」(小4)、「日本の生活が普通だと思っていたけれど生まれ育った土地での生活が幸せに感じられたらいいなと思いました」(小5)などの感想が見られた。今日の世界が抱えるさまざまな問題は、1つの地域や国で解決できるようなものでは無いとよく指摘されている。地球環境問題は、その最も顕著なものである。遠くの他者の土地が荒廃することで、自分の地域の環境も劣化する。それぞれの土地が守られてこそ、地球全体の環境は守られ、初めて自分たちや子孫が守られる。それぞれの土地に暮らす人々の多様性を知り、その「つながり」や尊重が心に生まれることは、これからますます大切になる。多様な地域を深く知る場をつくる

ことは、社会的に重要であるといえる。

## 倫理

4つのトリップ全てを傍聴した大石高典氏は「共通することは、生きる倫理のようなものですね」と表現した。環境倫理については膨大な議論があるが、加藤尚武の整理によれば基本的な主張は次の3点だということである。すなわち1. 世界の有限性、2. 世代間倫理、3. 生物種の生存権(加藤<sup>21)</sup> 2005)である。ここではこの3点について詳しく書かない。4つの地域の暮らしには、この3点について書くべきことが多すぎるのである。例えば遊牧という行為は、世界の有限性と世代間公正の意識下に実施されていると表現することもできるだろう。「私の半分は馬である」と語る遊牧民の住まいの一番奥には、馬の絵が祀られていた。「生物種の生存権」という表現以上のものが見いだせるように思われる。北米先住民クリンギット族にも、この3点への配慮を体現するような教えが満載である。土地に根ざす暮らしには、現代社会で「環境倫理」として議論されることが、静かに体現されており、その姿を見ることで子どもたちは自然なかたちで倫理を学ぶことができそうである、という表現にとどめておくこととする。

## まとめと今後の課題

刻々と変わり続ける地域の動態や変容を、地域研究はとらえていく。その詳細な記述の根幹に、「人間とは何か」、「地域とは何か」という地域研究者が取り組んできた大きな問いがある。そのような問いは、めまぐるしい現代文明の中では置き去りにされがちである。だからこそ、今日、次世代の子どもたちにとって、そのような大きな問いかけを可能にする地域研究が重要なのだと考えている。

自然と共にある人間の暮らしに、今日の市場経済やグローバル化が組み込まれていく。そのグローバル化を受け止めつつ、それぞれの地域の中で、大人たちが子どもに伝えようとしていることを、私たちはもっと共有していく必要があると考えている。その中には、今日的な環境教育として見落としてならないものが埋め込まれているように思われるからである。

今回、3つのワークショップは初めて開発し実施したものであり、本報告書は、中間的な報告書である。そ

21) 加藤尚武『新・環境倫理学のすすめ』、丸善ライブラリー(2005)

それぞれのトリップで少し振り返ったように、多くの子どもたちは素朴に、自分のいのちが自然界とつながっていることに驚いた。このように子どもたちの学びは、大変基本的な認識から丁寧に出発し、例えば空間の履歴のような次元の学びに発展する可能性が見いだせた。

課題としては第一にプログラムの改良が挙げられる。知見の整理や場づくりの手法など、まだまだ改善すべき点は大変多い。できる限り「生活世界の再現」を試み、「異文化に身を置いてみる」、「他者の身になってみる」経験から、多くの学びの種が芽を出すようなプログラムであり続けたいと考えている。第二の課題は、このような環境教育的試みに関心を持ち、提案や協力を考えて下さる新たな地域研究者との出会いである。第三は、事業を継続していく仕組みづくりである。2013年度はJCAS次世代WSと京都府地域力再生事業として、2014年度は京都府受託事業として助成を頂いている。今後も継続できる仕組みを考え、多くの方の協力を仰ぎたい。

このプログラムには、もっと深い学び——生きることの面白さや大きなつながりの可能性などが、まだまだ秘められているように思われる。協働研究者や参画者と共に、それらを発見していくこと、広く共有していくことが、大変楽しみである。

### 参考文献

- 飯塚宜子「北米先住民タク・リバー・クリンギット族の土地に根ざす教育」『同志社大学総合政策科学』(2015)15(1)印刷中
- 稲村哲也「草原と砂漠における社会文化と環境問題」『人類学研究——環境問題の文化人類学』pp.141-153 内堀基光、本多俊和編(2010)放送大学教育振興会
- 煎本孝、山岸俊男『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』(2007)世界思想社
- 今村光章、井上有一「〈環境教育〉から環境教育へ」『環境教育学——社会的公正と存在の豊かさを求めて』(2012)法律文化社
- 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(2007)講談社現代新書
- 大石高典「[人間ゴリラ]と[ゴリラ人間]——アフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の交錯と混沌」『人と動物の人類学』奥野克巳、山口未花子、近藤祉秋共編(2012)春風社 pp.95-133

- 梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集Ⅳ モンゴル研究』小長谷有紀編(1990)中央公論社
- 加藤尚武『新・環境倫理学のすすめ』(2005)丸善ライブラリー
- 鬼頭秀一『自然保護を問い直す——環境倫理とネットワーク』(1996)筑摩書房
- 桑子敏雄「『空間の履歴』から読みかえる環境思想——「安全神話」の真実」秋道智彌編著『日本の環境思想の基層——人文知からの問い』(2012)岩波書店 p.24-46
- 小長谷有紀『モンゴル』世界の食文化 石毛直道監修(2005)農山漁村文化協会
- 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(1996)朝日新聞社
- 日本環境教育学会編『環境教育』(2012)教育出版
- ヘレナ・ノーバグ=ホッジ『ラダック 懐かしい未来』(2003)『懐かしい未来』翻訳委員会翻訳 山と山溪社
- 星野道夫『旅をする木』(1995)文藝春秋
- 見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』(2006)岩波新書
- 山口未花子「動物と話す人々」『人と動物の人類学』奥野克巳、山口未花子、近藤祉秋共編(2012)春風社 pp.3-18

### 参考にした口頭発表

- 山田勇「ブルネイ、スマトラ、カリマンタンの泥炭湿地林：1970年～2014年の記録から熱帯低湿地開発の将来を考える」『泥炭地再訪：40年の変化』での講演より。東南アジア研究所・地球研機関連携プログラム「熱帯泥炭地域社会再生に向けた国際的研究ハブの構築と未来の可能性に向けた地域将来像の提案」FS研究会 2014年9月24日

## 第1部

# 実践者からの 報告

# トリップ1 ワークショップ『大草原！羊と旅する女の子』の 実践を通して

飯塚 宜子

同志社大学総合政策科学研究科博士後期課程2年/  
NPO法人平和環境もやいネット事務局長

## どのようなプログラムを実施したか ①構成

子どもたちに「モンゴル遊牧民になってみる」ような想像体験をしてほしい。そこで感じたことから考えていってほしい。このような視点から、ワークショップという手法で地域研究の成果を表現することを実践してみた。そのプロセスや成果を報告したい。まずワークショッププログラムの構成についてである。

## 受付

場づくりは、申し込みを受ける時から始まる。事前に参加の動機や関心を聞いておくことは大いに参考になる。当日の受付では、遊び心のある仕掛けをつくり、参加者の緊張感を和らげるよう工夫する。今回、受付で手渡される名札は、パスポート形式の冊子にした。パスポートの表紙が名札になる。内側にトリップで訪れる国名を書き、入国スタンプを押す(写真1)。スタンプはこのプロジェクトのチラシやしおりに登場する「キャラクター」が彫られたものである。名札にはニックネームや自分が呼ばれたい名前を、参加者自身に書いてもらう(写真2)。

名札と共に、フィールドノートを1人に1冊ずつ配布した。使い方に関しては、ワークショップの冒頭でフィールドワーカーに説明してもらう。自分が見たこと、聞いたこと、面白いと思ったこと、思ったこと、何でも書くノートだと話す(写真3)。

場のデザインは大切であり、参加者同士の向き合い方や前方の見やすさなどで、場への参加の度合いが変わってくる。慣れたスクール形式、アイランド形式、サークル形式などが考えられるが、今回は扇形のアイランド形式とした(図1)。すべての参加者が90度以内の方向転換で、正面を向くことができることを心がけた。

## 起 イントロダクション——ねらいの確認

丁寧な導入は、参加者の参加意識や場への信頼感

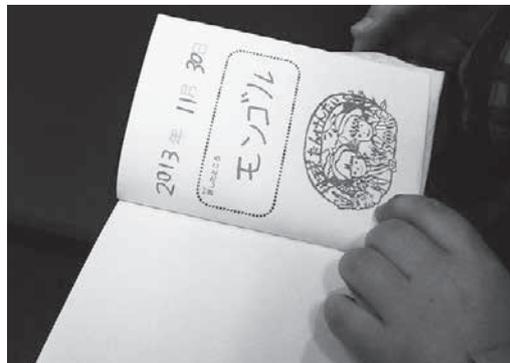


写真1 入国スタンプが押されたパスポート形式の名札



写真2 ニックネームを名札に書く参加者



写真3 フィールドノートを手にする

を高める。まずプログラムのねらいは「オユニティユちゃんの暮らしを感じ取る」ことであると参加者に伝えた。プログラム全体の流れを説明したあと、ワークショップのルール<sup>1)</sup>を話した。知識を頭に入れるのではなく、身体や心で「感じ取る」主役は参加者一人ひと

1) オリエンテーションに必要な事項を、皆で乗るボートのオールに例えた OARR (Outcome, Agenda, Role, Rule) や参加者の心得など、場づくりに関しては、中野民夫『ファシリテーション革命——参加型の場づくりの技法』(2003)に詳しい。

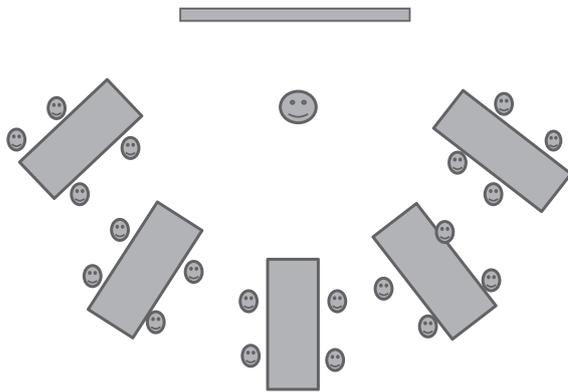


図1 扇形アイランド

りであること、人の話をよく聞くと同時に、自分の心の声もよく聞き、感じたことを表現してほしいこと、無理はしなくてよいことなどである。

スタッフの簡単な自己紹介のあと、参加者にもシートを使って自己紹介をしてもらおう。自己紹介のための簡単な問いは、ワークショップのテーマに関わってくるものを選ぶ。このようにグループの中で話す体験をつくることで、プログラムの中で自分の思いを語りやすくなる。(写真4)。

### 承 テーマを受ける——遊牧民の暮らしを知る

「承」となるプログラムの前半では、モンゴル遊牧民の1人の13才の女の子、オウンティユちゃんの中から見た暮らしの様子を追った。「モンゴル遊牧民の暮らしは」と語るのではなく、「オウンティユちゃんは」を主語にして話す。それにより、参加者は物語を読むように、自分をオウンティユちゃんに投影し易くなる。参加者により臨場感を持たせ、物語に引き込むことを目指した。

参加者は、フィールドワークで現地に降り立つように、さまざまな「新しいこと」を見聞きする。これは何だろう？ 何に使うのだろうか？ なぜこんなことをするのだろうか？ 写真の紹介にクイズ形式を取り入れ、そのような疑問を皆で共有する。移動式住居ゲルの写真には「なぜ移動するのだろうか？」、馬の搾乳の写真では「何をしているのだろうか？」、母馬の搾乳に仔馬を連れてくる行為には「どういう手伝いなのだろうか？」、燃料の牛糞(アルガ) や小枝の写真では「これは何だろ



写真4 グループで自己紹介をする



写真5 羊毛に触れてみる

う？」という具合である。

写真を見るだけではなく、五感を活用する仕掛けも用意した。例えば遊牧民の主食といえる塩入りミルクティーの試飲、羊毛(写真5) やフェルト、羊のくるぶしの骨に触れ、何に使うのかを考えてもらう、などである。遊牧民はこのフェルトでゲルを包むことで、氷点下30度の冬を越すこともその体験の中で説明する。

このように、できる限り体験的に暮らしの様子を知ることによって前半を進行した。後半に入る前に、短く振り返り、遊牧民と自分の生活はどのように違うか、どこは同じか、という比較の時間を設けた。ワークシートに気づきを各々書き<sup>2)</sup>、グループで話をしてもらった。

### 転 新たな展開——精神世界に触れる

「転」となるプログラムの後半は、詳細は後述するが、オウンティユちゃん自身が撮影した彼女の「大切なもの」の写真3枚を読み解いた。写真の背景が重層的に理解できるよう、UNESCOの無形文化財「馬頭琴」の動画<sup>3)</sup> や、モンゴルの国民的お祭りであるナーダムの競馬報道動画<sup>4)</sup> を活用した。ここでは、オウンティユちゃんの暮らしには、携帯電話やテレビなどの近代的

2) 気づきを分かち合う手法として、グループでどんどん意見を出して模造紙などに言葉を書き留める方法などもあるが、子どもは字を書くスピードが遅い。今回は自分のペースで感想を言葉にするワークシート形式を多用した。

3) <http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00068>

The Traditional Music of the Morin Khuur UNESCO: Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity - 2008, Culture, UNESCO(最終確認日 2015年1月30日)

4) ナーダムに関する報道 <http://www.youtube.com/watch?v=aB4kafBcfdM&feature=related> (最終確認日 2015年1月30日)



写真7 集合写真

機器が存在し、オウンティユちゃん自身もウランバートルの小学校で教育を受けていることも説明した。また、オウンティユちゃんと、父親であるツェテンダウさんへのインタビューも紹介した。これらにより、近代化の中にあるオウンティユちゃんとその家族の世界観、遊牧の伝統、歴史性、宗教的感覚などにも触れることを目指した。

## 結 全体の振り返り

「結」では、プログラム全体を振り返るため、「問い」を投げかけ、ゆっくりと考えてもらった。今回のプログラムでは「自分とオウンティユちゃんの自然との向き合い方、動物との向き合い方は、どのように違うか」、という少し難しい問いを提示した。民族衣装や遊牧の道具に触れてもらう時間をとり、遠く離れていても同時代に生きているオウンティユちゃんたち、モンゴルのことを、少し日常生活で気にかけてみてください、という提案で締めくくり、集合写真を撮影した(写真6)。

## どのようなプログラムを実施したか

### ②テーマと内容

自然界の生態的な循環が見えやすい草原の暮らしを扱ったトリップ1のメインテーマは「人と土地の関係性を知る」とした。4つのトリップ共通の作業テーマ、①「自然環境に根ざした暮らし方と日本の子どもたちの暮らし方との比較を、子どもたち自身ができる

ようにする」ことと、②「人びとの心や価値観にふれる」を通し、メインテーマの学びは自ずと達成できると考えた。

①に関しては、「衣食住」を中心とする遊牧民の暮らしが、どのように土地との関わりの中で営まれるかをなぞった。その多くは直接的に土地や、土地に生きる動物や植物などに関わる中でかたちづくられている知恵や技術が世代を超えて継承される様子もみてとれる。日常だけではなく、年中行事や祭事などにも触れる。学校生活を送ることは都市生活者と共通しているが、「土地に根ざす教育」も当然のように行われている。

②に関しては①を知る中で理解のプロセスがすすむことが期待されるが、前述したように、遊牧民の子どもたちに撮影してもらった「大切なもの」の写真や、インタビューを紹介した。大切なものの写真を読み解くことで、遊牧民の子どもの世界観に、より直接的に触れることを目指した。オウンティユちゃんが撮影した大切なものの写真1枚目は馬の絵が祀っている祭壇とナーダムの競馬で家族が代々獲得したメダルである。オウンティユちゃんの家族は代々馬の調教師で、このように多くのメダルがある家族はそう多くはないとのことだった<sup>5)</sup>。2枚目は遊牧の伝統の道具である。馬の鞍、牛の皮でつくったロープ、鹿の角、馬頭琴、ハダックなど遊牧民のゲルなら必ずあるモノたちである。3枚目は戸外で撮影された土地の写真である。広い草原が広がるが、ゲルを撤去した丸い跡が残っている<sup>6)</sup>。この写真は「草原」では無く、草原と人間の暮らしの繋ぎ

5) 調査に同行して頂いたのスヘー・バートルガ氏(モンゴル国立大学教授)からの聞き取り。

6) シナリオ参照。

目、人間が自然に自分たちを関わらせ、またそこを自然に還す場の写真であるという<sup>7)</sup>。

前述したように空間の履歴や、自然と人間社会の関わり全体性を12才の女の子の写真から可視化し、遊牧を営む人々の心や価値観に触れるワークとすることを目指した。

## 参加者にどんな気づきがあったか

実践の中で参加者にどのような気づきがあったか、当日のワークシートと1か月後に実施したアンケートを中心に、これまでのプログラム参加者の感想からの抜粋も一部あわせ、分析と考察を試みたい。

### 切り身の肉

ほとんど全ての参加者が、「スーパーでパックに詰められたものを食べる」、「何でも買ってくる」など、自分たちの食べている肉について語っている。自分で育てた羊から乳を搾り、羊を殺して肉を食べ、動物と草原を移動していくという、土地の自然の循環のただ中にある暮らしと比較するとき、都市の「食」がそのような土地との繋がりから遠く分断されていると気づくことができる。当たり前前の日常が相対化される。

環境倫理の分野では「切り身」と「生身」のモデルがある<sup>8)</sup>(鬼頭 1996)。自然と人間の関係性の中で獲得される糧は「生身」であるが、都市生活ではいのちの糧が「切り身」で提供される。「スーパーから来ているけれど実は動物から来ていることが分かった」、「スーパーで食べ物を買う私たちより命の大切さを知っている」という発言からは、「切り身」のもとをたどった子どもたちの想像があったことが分かる。

### 感謝

ワークショップのシナリオに「感謝」という言葉はないが、参加者の感想には「自然とはあまり関わらずに、自然に感謝できていない」、「日々の何気ないことや暮らしに対する感謝が無かった」などの言葉がみられる。1人の参加者は、「オユニティちゃんはとても自然に感謝して」と考えた。私たちが考える「感謝」とオユニティちゃんの感覚が一致するかどうかは不明なことであるのだが、「自然とあまり関わらない」参加者は、自然との関係性の中に生きる状況下の感覚

を想像し、「感謝」を思い起こしたといえるだろう。都市の暮らし方と異なる、自然と共にある暮らしが身近に引き寄せられ認識されたことが伺われるのである。

### コモンズ

遊牧民は「自然を勝手に食べている」という感想が見られた。動物からの搾乳や屠殺により、自然界から直接糧を得る行為が奇異に感じられたことが伺われる。この奇異の感覚は、「食」は金銭で購入するものという認識の自覚と、購入以外に「食」を獲得する方法があるという気づきにもつながるだろう。この気づきには、「自然は誰に帰属するものか」という問いにもつながっていく。

都市住民にとって土地は資産、投機など、金銭に変換して考えがちな対象であり、個人や法人や国家の「所有物」という認識が強い。しかし里山に生育する山菜やきのこを採集して夕食のおかずにしたたり、海原で泳いだり貝をとったり川で魚を釣ったり、山に入ったなどの行為には、別の土地との関わり方がある。ここでは、土地は自分のものではないが自分のものでもある。あるいは、過去にその土地で生きた人々や、未来世代、生きものや、超自然的なものなども共有される場ともいえる。土地と共にある生活や生業を知ること、都市の暮らしには希薄になっているコモンズ的な感覚に触れる機会となり、それは普段と異なる「土地の見方」があることに、子どもたちが気づく契機となるだろう。

### 二元論ではない自然観

遊牧民にとっての自然は「生活とか生きるとか、その中心にあるもの。動物や自然に対しての壁が無い。自分もその一部分として生きている」という感想が見られた。土地を資源として見る時も、自然保護を考える時も、都市住民は人間と自然を二元論で捉える。この感想には二元論ではない土地との関わりの可能性が表現されている。よく耳にする言説に明治以前の日本人にとって、自然は対象物ではなかったから、現在使用される「自然」という言葉はなかった、自然と一体として生きていたのだ、というものがある。そのような日本人の感覚があったのだとしても、今の私たちには再現することはできない。しかし、このワークショップでは、「対象としての自然」以外の自然観があり得

7) 小長谷有紀氏(国立民族学博物館教授)に写真やシナリオを見て頂き、多くの示唆を頂いた。

8) 鬼頭秀一『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』(1996)pp.126-131

る、と都市住民が考えてみる可能性は開かれているといえるだろう。どのような自然観が環境や生きものを守るのか。そのような思考は、未来社会をつくるヒントになるだろう。

### 誇り・アイデンティティ

アンケートにおいて「オウンティユちゃんの誇り」はどこから来るかという問いを設けた。大人の参加者からは、「今まで絶やすことなく紡いできた遊牧民の暮らし、その真只中にいること自体が誇りにつながるのではないかと思います。オウンティンちゃんは、自分の親や祖父母が遊牧民の暮らしを守ってきた、そして自分にも伝えようとしているということが分かるような年齢ではなかったか」と思います。その重みを感じているのではないのでしょうか、「小さいころから変わらない(伝統的な)日常」などの答えがみられた。地域の中で生きる知恵や技術を持っているという誇りだけではない。先の世代から継承したものを次世代へと繋ぐこと自体の誇りという視点がここにあるように思われる。ここには、未来世代に生きるものたちの生存の条件を悪化させない前提があるようにも思われる。

翻って、自分の誇りは「よく分からない」という子どもたちや参加者も多かった。オウンティユちゃんの誇りを考えることは、普段あまり考えることのない自分の側面、あるいは地域と自分、歴史性と自分、などについて考える契機となる可能性があるように思われるのである<sup>9)</sup>。

## プログラムの進化と課題

プログラムは未完である。しかし「モンゴル遊牧民の身になって考える」経験には多くの学びがあると考える。そこには動物や植物などとともにある知恵、その有限性への認識、次世代へ継承すべきものは何かなど、さまざまな深めたいテーマが含まれている。そしてこのようなプログラムが、次世代の子どもたちにとって「人間とは何か」、「地域とは何か」という大きな問いに触れる場となるプログラムに育っていくことを視野に入れながら、今後も実践研究を続けていきたいと考えている。

9) 6歳以下の子どもたちは大変シンプルに、オウンティユちゃんの誇りは「地球」、「自然」、「ここ」から来るのだと答えてくれた。幼い子どもたちの、言葉にし難いものへの直感的表現は面白いと改めて思う機会となった。

# 大草原！羊と旅する女の子 シナリオ

2013年11月30日実施

飯塚 宜子 同志社大学総合政策科学研究科博士後期課程2年／NPO法人平和環境もやいネット事務局長

ねらい……「オウンティユちゃんの暮らしを感じ取る」ことを通して、人と土地の関係性に触れる。

## 1. 受付

パスポート形式の名札を渡し、モンゴルのページに入国スタンプを押す。

フィールドノートも一人一冊配布し、使い方はワークショップの中で説明するが、聞いたこと見たこと思ったことなど、何でも書くノートだと話す。

座ってもらう机番号を伝え（あらかじめグループ分けしておく）、席についたらパスポートの表紙に、自分が「呼んでほしい名前」を書くよう伝える。

（モンゴル音楽のBGMを流しておく。周りにはモンゴルのグッズが置いてあり、自由に見て触れてもらえる。）

## 0:00 起 イントロダクション

2. 今日はモンゴル遊牧民のオウンティユちゃん、12才の女の子の暮らしを知るたんけんに出かけます。写真をみたり、モノにさわったりしながら、モンゴル遊牧民オウンティユちゃんの暮らしを感じとってください。

まず、最初にフィールドノートの使い方の説明をしてもらいましょう。

スタッフにも、名前とふだん何をしている人か、一言ずつ自己紹介をしてもらいましょう。

3. 今日の進め方です。まず、グループで自己紹介をします。その後、オウンティユちゃんの暮らしを知るたんけんに出かけます。それからオウンティユちゃんの大切なものを教えてもらいましょう。そして、最後に全体を振り返ります。

4. 今日の主役はみなさんです。楽しんで、積極的に、よく皆の話を聴いてください。自分の心の声にも耳を澄ませて、聞いてみましょう。でも、無理はしないで。無理と思ったら言ってください。

2

## ワークショップをはじめます

- 今日  
モンゴルの「ゆうぼくみん（遊牧民）」  
オウンティユちゃんの暮らしを  
感じとってください

3

## ワークショップの進め方

1. じこしょうかい
2. しゃしんを見ながら  
12才の女の子オウンティユちゃんの暮らし  
クイズ  
グループで話そう
3. オウンティユちゃんの大切なものって何？
4. ふりかえり

4

## ワークショップ

- 主役はみなさん
- 人の話をよく聞く
- 自分の心の声もよく聞く
- むりはしないで

5

## 自己紹介（じこしょうかい）

- ① なまえ
- ② 肉と魚、どっちが好き？
- ③ きのう食べた肉や魚はどこから来たの？
- ④ なくなったらこまるもの（大切なもの）  
3つ教えて。

5. では、グループで自己紹介をします。紙を配ります。この紙は4つに区切ってあります。1つ目に自分の名前を、2つ目に、肉と魚とどちらが好きか。3つ目に、昨日食べた肉や魚はどこから来たと思うか、4つめに無くなったら困るもの、自分の大切なものですね、3つ書いて下さい。書き終わったらカードをみせあいっこしながら、自己紹介をしてもらいます。では3分くらいでカードを書きましょう(邪魔にならないBGMを流す)。

(様子を見て)書けましたか。書けたらグループの中で順番に読みあいっこしながら自己紹介してください。最初に話す人が決めるにければ、私に一番近い席に座っている人から始めて下さい。

**0:20 承** モンゴルとオウンティユちゃんの暮らし

6. では、モンゴルのこと、見ていきましょう。みんなモンゴルって知ってる？ 行ったことある人いる？ 何か、モンゴルについて、聞いたことあるよって言う人、教えてくれる？(すもう、白鷗、スーホの白い馬……)

7. 地図でモンゴルの場所をみてみましょう。北海道より、少し北に、オウンティユちゃんは住んでいます。ロシアと中国の間ですね。

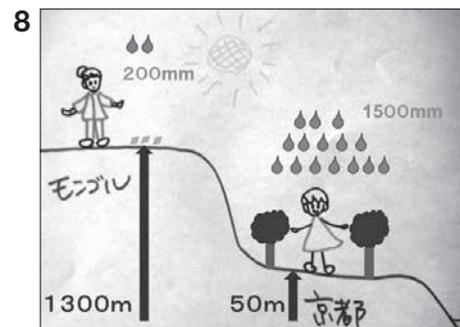
8. そして、京都は海からの高さは50mくらいですが、モンゴルのオウンティユちゃんは1,300mの高さがある場所に住んでいます。寒そう？ 雨も殆どふりません。

日本には緑がいっぱいありますが、モンゴルは草原が広がります。すごく乾いていて、冬はとても寒く、夏は暑い気候です。

9. 去年、私はこの広い草原があるモンゴルに行って、自然がいっぱいの暮らしが大好きになりました。とっても自然と仲良しの暮らしを、いま地球の上で楽しんでいる人たちがいるんですね。

夕方になると影がどこまでも伸びていきます。そこで会ったオウンティユちゃんのことを皆さんに紹介したいと思います。

10. オウンティユちゃん、12才です。おうちの中で、おじいちゃんとおばあちゃんと写っています。



11. 家族です。横が弟11歳。後が左からおにいさん18才、おとうさん、おかあさん、お姉さん19歳。おにいさん、おねえさんは大学生です。前はおじいちゃんおばあちゃんと、いとこの男の子です。

横に写っているのがおうちですが、ゲルという大きなテントのようなおうちです。

30分から一時間くらいで折りたたんで、違う場所へ移動します。

1年の間に何度か移動する生活です。なぜ移動すると思う？

次の写真がヒントです。

11

写真略

12. おうちの周りに広がる風景です。

何が見える？ オユンティユちゃんたちは5種類の家畜を飼っています。

12



13. これは何？ 羊ですね。

13



14. これは？ 山羊ですね。

14



15. これは？ 牛。

これは子牛ですね。

15



16. それから？ ラクダ。

16



17. そして？ 馬ですね。

17

オウンティユちゃんたちは、羊、山羊、牛、ラクダ、馬という5種類の家畜を飼っていて、1年中草原を移動して、また春になったら元の場所に戻ってくる、そういう生活をしています。なぜ？なぜ移動するんだろう？



(皆の意見を聞きながら)

家畜は広い草原に生える草を食べて、人間はその家畜からお乳をとったり、食糧にしたりして、生きてます。もし家畜が草を食べつくしちゃったら？家畜も人間も生きていけないよね。家畜が草を食べつくさないよう、季節によって、住みやすい場所へ移動していきます。家畜と一緒に、住む場所を移動していくオウンティユちゃんたちのような人々は遊牧民と呼ばれています。

18



18. さて、お母さんと弟は何してるのでしょうか？

これは、お母さんが馬のお乳を搾っているところです。実はこの弟はお手伝いをしています。

どうやって手伝ってるんだろう？お母さん馬のところに、仔馬を連れてきてるね。日本の牛は、機械にかけたら牛乳がいっぱい出てきますが、モンゴルの馬も牛も、自然の野生に近い動物です。

19

まず、仔馬がおかあさんのおっぱいをしゃぶらないと、お乳は出ません。お乳が出てきたら、人間が搾り、最後にまた仔馬がお乳を飲みます。何百頭馬がいても、仔馬はお母さん馬がすぐわかるし、母馬も仔馬をすぐ見分けます。



19. オウンティユちゃんのところだけではなく、お母さんのお乳を搾るために仔馬を連れてきている様子は、どこでも見られます。

20. 何してるのかな。皆でお乳を搾って、おうちへ帰ってますね。20  
オウンティユちゃんたちは3つゲルをたて生活しています。



21. さて、これは何をしていますでしょうか？

大切に大切に飼っていた羊ですが、殺しています。10秒ほどで羊のおなかに10センチくらい小刀できって手を入れて、心臓横の動脈を手で切り取るそうです。

あっと言う間、泣き声ひとつたてることもなく即死です。30分くらいで解体して一家の数日分の食料になります。毛皮も骨も肉も血も内臓も何もむだにしません。1滴の血も土に落とさないそうです。血は柄杓ですくって別の鍋にいれて、固まった血を腸に入れてソーセージにするそうです。血や内臓はビタミンやミネラルという栄養源だそうです。

22. 子どもも手伝います。自分が食べるものが、どこからくるのか、この子はよく知ってるんだと思います。おとうさんたちが羊を殺した後、おかあさんとおねえさんが内臓を洗ったり、血を腸につめてソーセージにします。

23. 何をしていますか？

汲んできた水をおにいさんがお鍋に入れているところです。おうちが移動式なので、水道はありませんね。このあたりにある井戸で地下水をくみ上げてます。汚れてさえないければ世界中どこでも、地下水は、夏は冷たくて冬は温かいおいしい水ですね。移動先によっては、川でくんだ水を飲みます。運ぶのは大変だけどね。ペットボトルを買わなくても、水道料金を払わなくても、きれいな飲み水を近くの川からくむって、どんな感じかな？ このお鍋で羊の肉をゆでます。

24. そしておじいちゃんがゆであがった羊をおさらにとりわけてます。

25. おじいちゃんが羊をゆでた、お鍋の燃料です。何だと思う？

近くの林でとってきた木と、牛の糞です。牛の糞で臭いと思うでしょう？ この糞は全然臭くないんです。

モンゴルの牛は、100%草を食べています。それから、乾燥してる気候であるし、全く臭くありません。草原におちている糞を拾って燃料にします。

拾わない糞はどうなるだろう？ 拾った糞は燃料になり、拾わなかった糞は土にかえって、すばらしい肥料になって、草を生やして、また羊たちがその草を食べて、羊のお乳や肉を人間がまた食べるんだね。



©写真家・三井昌志



©写真家・三井昌志



26. 何してる？ 肉をとりわけて食べてるね。お肉のお皿の周りがある、この飲み物。さっき、お母さんが馬のお乳を搾ってましたね。馬のお乳はそのまま飲まないで、数日間、時々一生懸命混ぜます。そうすると、少しアルコールのはいったさっぱりしたカルピスみたいなのみものになります。これがとてもたくさんビタミンCがはいっているので野菜を食べなくても大丈夫らしいのです。

26

写真略

27. オウンティユちゃんたちが主に食べるものは、飼ってる動物のお乳、お乳からつくられる飲み物やチーズやバター、そして肉です。それから小麦粉も買って、うどんのような麺や餃子のようなものもつくって食べます。これは、おやつに揚げパンを食べているところです。

27

写真略

28. 毎朝、オウンティユちゃんたちは、牛のお乳でたっぷりミルクティーをつくります。それを魔法瓶に入れて一日中飲みます。それは砂糖ではなくて、塩入りです。これが魔法瓶とお茶碗ですね。この塩入りミルクティーが、オウンティユちゃんたちの主食といっけいくらいです。さて実は、今日はその塩入りミルクティーをつくってきました。飲みたい人いますか？（飲みたい参加者に塩入りミルクティーを一口ずつコップに入れて配る）

28



29. (試飲している間に、各テーブルに羊の毛とフェルトを配る)  
羊の毛を配りました。触ってみよう。どうですか？

この毛は紡いで毛糸にしてセーターにすることができますね。  
(時間があればスピンドルを使って実演や体験)

でも、モンゴルの遊牧民は、この毛をたたいてのばしてフェルトにします。今日は小さなフェルトを持ってきました。触ってみてください。これを大きな大きな布にします。このフェルトでゲル全体を覆います。ゲルの中では、さっきの牛の糞を燃やすことで、マイナス30度、40度のモンゴルの冬を暖かく過ごすことができます。

29



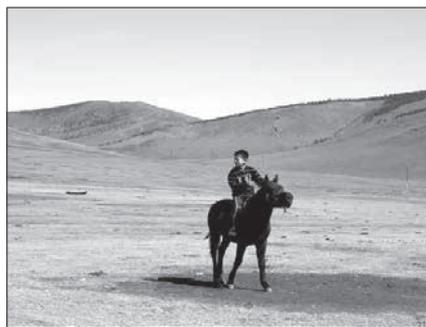
30. (シャガイを各テーブルに配る) これは、どの遊牧民のゲルにもあるモノです。これは、なんでしょう？ 何に使うと思う？  
これは羊のくるぶしの骨で、シャガイと呼ばれています。子どもたちは、これをおもちゃにして遊びます。それぞれの面が牛、羊、ラクダなど決まっていて、サイコロみたいにしたり、おはじきのようになり、占いをしたりします。 食べてしまった羊の骨をずっと遊び道具にして一緒に遊びます。

30

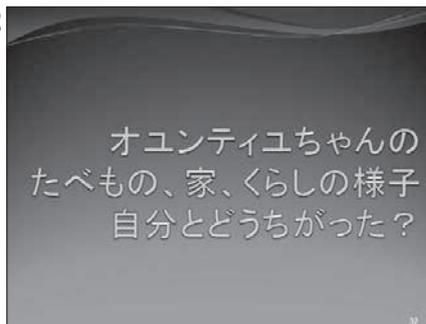
これはなあに？



31. 子どもたちは、みな、馬に乗ります、オウンティユちゃんの弟も 31  
凄く早くてかっこいい乗り手です。

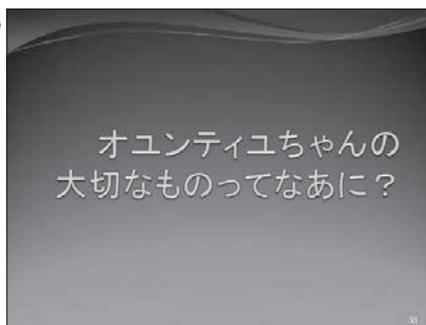


32. それでは、ちょっとふりかえってみましょう。オウンティユ 32  
ちゃんの暮らしを見てきました。オウンティユちゃんの暮らし  
と、自分の暮らしと、どう違った？ どう同じだった？ 紙を配り  
ますので、静かに振り返って、だいたい5分くらいで、紙に書いてみ  
よう。その後、グループでまた見せあいっこして、感じたことや  
考えたことを話してみよう。(静かなBGMを流す)  
だいたい書けましたか？ ではグループで話してみましょう。



#### 0:45 転 オウンティユちゃんの価値観、自然観に触れる

33. オウンティユちゃんはゲーム機で遊んでないし、おうちの近く 33  
にコンビニも無い。デパートで買ってきたものもたくさんはない  
けれど、そういうオウンティユちゃんの大切なものってなんだろ  
う？ そう思ったので、オウンティユちゃんに、私のカメラを渡し  
ました。オウンティユちゃん、オウンティユちゃんが大切だと思  
うものを撮影してくれる？ とお願いしました。そしたら3枚の写  
真を撮ってくれました。



34. この写真は私が撮影した家の中の写真です。オウンティユちゃん 34  
はこの中の二カ所、大切だと言って撮ってくれました。この写真  
の中で、オウンティユちゃんの大事なものの二つってどれだと思  
う？

このあたりとこのあたり、メダルのあたりと、馬頭琴という楽器  
のあたりを撮ってくれました。実は、オウンティユちゃんのおうち  
の中には、テレビも携帯電話もあるんです。でも、大切なものと教  
えてくれたのは、テレビや電話ではなかったのです。



35. さて、これがオウンティユちゃんの撮影写真、一枚目です。どう 35  
してこれが大事なんだろう。

写真の真ん中、見えにくいけど、馬の絵を祀ってます。実は、オウン  
ティユちゃんのおうちは、代々、調教師とって、いい馬を育てる  
のがお仕事のおうちです。大切だった馬を、家族みんなで祀って、  
お祈りしているのかもしれないね。

周りにあるのは、メダルですね。何のメダルだろう？ モンゴル  
では毎年夏に、「ナーダム」という大きなお祭りがあります。そこ  
では3種類の競技が行われます。競馬、すもう、弓です。日本の競  
馬をテレビなどで見たことがありますか？ 日本の競馬では3,000  
m、3キロくらい、プロの騎手が馬に乗って走りますね。でもモン  
ゴルの競馬は 日本の競馬の10倍くらい、20キロとか30キロを  
数百頭が競争します。「ナーダム」のビデオを少し見てみよう。



【ビデオ①1分】

馬に乗るのは、6歳から12才の子どもたちです。ゴールする時は、お父さんなど家族が子どもを迎えて、一緒にゴールしていますね。お父さんは上手に育てた馬に、弟が乗って走ってメダルをとる。でもお父さんは「代々、うちは優秀な調教師、馬を育てる仕事をしてきた」って話してました。お父さん1人ではなく、おじいちゃんやその上のお爺ちゃんや、そのまた上のお爺ちゃん、がずっと工夫して、試して、うまくいった方法を次の世代、子どもたちに伝えてきたのだと思います。そうやって代々、とったメダルをオウンティユちゃんはとても大事だと思ってるんだなと思いました。

馬とオウンティユちゃんたち家族の関係は、お乳をとる・食べるだけではない、一緒に楽しむ、プライドをもって一緒に走る、そんな心のつながりもあるんじゃないかなと思いました。 ナーダムには、そういう馬を大事にする家族が何百、何千と集まります。

36. オウンティユちゃんの大切なものの写真、2枚目です。この青い布はハダックと呼ばれ、もっとも大事な時や儀礼に使うものです。価値のあるものを包んだり、その前においたり、お正月には手に持って挨拶したりします。青色は天の色で、モンゴル人にとって青は天で、天は宗教と哲学的な意味を持つ概念でもあるそうです。実はさっきの写真にも写ってました(スライド1枚戻る)。

それから、遊牧の道具、牛の皮でつくったロープや、鹿の角などの馬具があります。どこのゲルにもある、遊牧民はみんなもってる、モンゴルに古くからあるモノの写真です。

それから、これは馬頭琴っていう楽器です。モンゴル遊牧民は馬が大好きですね。馬頭琴は馬をモチーフに馬を使ってつくった楽器です。一番上には馬の頭の彫刻があって、ボディは今はほとんど木製だけど、30年ほど前までは、子馬やヤギなどの皮を張っていました。弦も弓も70本から80本以上の馬の尾の毛でつくられています。

今はナイロンも多いそうですが、音色を聞いてみよう。踊りなど、暮らしの様子も出てくるので、英語のビデオですが、見てみましょう。

【ビデオ②3分】

(ビデオを見ながら) 毎年、馬のお乳で馬乳酒を最初につくった時は、特別のひしゃくで、お酒を撒いて、空のカミサマと土地のカミにお酒を捧げます。

日本でも、お正月、お盆、七五三など人が集まりますね。モンゴルにも、お正月や、春に仔馬が生れて、お乳を搾り始めるときとか、お正月、子どもが初めて髪を切る、いろいろな行事、儀礼があり、家族や親族が集まることを大事にしています。馬頭琴はそういう時に登場しますし、今でも家族によっては日常的にも弾いて、歌った

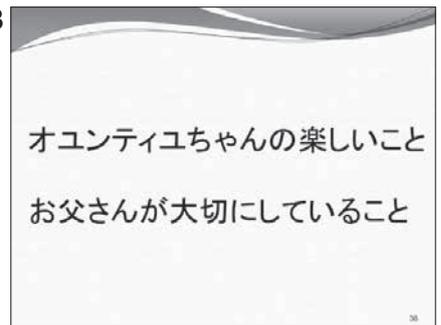


り踊ったりするそうです。こういう遊牧民なら誰でも持っている日々の生活の道具を、オウンティユちゃんは2枚目の大切なものとして撮影してくれました。

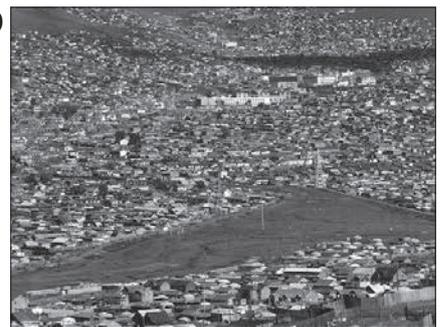
**37.** 3枚目です。何でしょうか。私はこれを草原を撮ってくれたんだなと思っていました。でも、方角によってはもっときれいな草原の風景があるのに、どうして、そんなに緑もきれいでない方角の風景を撮ってくれたのだろうと不思議でした。それで、モンゴルの遊牧の専門家に見てもらったところ、これは草原ではないそうです。単語が違うそうなのです。草原はホド、この場所はホドゥと呼ばれる場所です。この丸いアトは、ゲルがたっていた跡です。人間が使い荒れてしまった大地を、自然に返しているところです。オウンティユちゃんは、さきほど言ったように、夏の場所、冬の場所と草原をお引越していきます。1年後、オウンティユちゃんが戻って来たとき、この場所は跡かたもなく草原に戻っているでしょう。その場を、オウンティユちゃんは大切だといって撮影してくれました。



**38.** 写真撮影の後、オウンティユちゃんにお話を聞きました。オウンティユちゃんに楽しいことって何？と聞いてみました。家の掃除、料理、馬が好きで馬に乗るのが楽しい、子牛の世話が担当。絵を描くのが好き、月曜から金曜はウランバートルの学校で寄宿舎に入って勉強していて、勉強も好き。将来は先生になりたいし、遊牧民になってもいい。と応えてくれました。



お父さん、44歳のツェテンダウさんにも大事なことって何ですか、と聞いてみました。自然がわれわれのことをよく見てくれて、家畜が問題なく大きくなり、草がよく育ち、人間が落ち着いて普通の生活を送れることが一番大事。子どもたちには遊牧民の伝統を誇りとして伝えたい。学校も大切である。どちらも見て、選べばよい。が、ずっと草原の暮らしに関わっていてほしい。うちは、代々優秀な調教師の家系なので、家畜との関わり方など忘れず、都会へ出て遊牧民の誇りを忘れずに生きてほしいということでした。



**39.** モンゴルの遊牧民はこんな草原の暮らしをしてきましたが、お父さんの話にあったみたいに、ウランバートルなど都会で住む人がふえています。この写真はウランバートルですね。ここに住む人は遊牧ではない仕事をしています。

**40.** 都会だけではなく、いま、草原でも、モンゴル政府は、移動しないで、きまったところに住むことをすすめています。草原のどこでもいい、700平米、だいたい27m×27mくらいの大きさの土地を、どこでもへいをたてて囲むと、ただで、自分の土地にしたいよと言われ、決まったところに住むことがすすめられています。塀を建てた家族も多いです。でも一方で、囲い込まれたところは動物が



入らなくなって、こんなふう背の高い草が生えて草の種類がすくなくなってしまうということも言われています。動物が歩いてくれるから、強い草が一人勝ちせず、草原は植物の種類が多いそうです。逆に、ある場所だけで動かずに家畜を飼うと、動物が植物の根っこまで食べて、また植物の種類が少なくなります。何も考えないで草原をいったりきたりしてるみたいにみえますけど、動物と植物と人間がすごくバランスよく生活できているのが、遊牧なんだったということがわかってます。そんな中、オウンティユちゃんの家族は、塙をつくらずに春、夏、秋、冬、家畜を連れて引っ越して、ゲルをたてて暮らす生活をする、遊牧の暮らしを大切にしている家族でした。

### 1:05 結 ふりかえりとまとめ

**41.** さて、ちょっとふりかえりましょう。オウンティユちゃんと自然との向き合い方、自分の自然との向き合い方、どんなふう違うな、と思いましたか？ 5分くらい、考えて書いてみて下さい。難しいな、と思ったら、もう一度改めて、自分の大切なものは何だろうと、3つ考えて書いてみて下さい。

書き終わったら、またグループで見せあいっこして話してみましよう。

**42.** 自分たちから遠くて関係ないと思いがちな、オウンティユちゃんの暮らしですが、実は結構つながってるんです。例えばカシミアのセーターってきいたことがある？ 日本人はカシミアのセーターが大好きですね。カシミアはカシミアヤギっていうヤギからとれますが、1か所で飼うところが増えて、草原に草がなくなって砂漠みたいになって、日本に黄砂が降ったりします。また、みんなは生まれた時、おしりが青かったと思います。蒙古斑といいます。蒙古って、モンゴルのことなのです。何か遠い昔、つながりがありそうですね。オウンティユちゃんは海の向こうに住んでて見えないけど、ちょっとみんながアンテナをはって、どうしてるかな、幸せに生きてるかな、って思いやったり想像したり考えたりしたら、いろいろニュースなど、耳に入ってきたり、気づいたりすることがあるかもしれない、と思います。

最後に集合写真を撮りましょう。

**43.** 時間がある人は、感想、印象に残ったこと、おもしろかったこと、やってみたくなったことなどを書いてくれたら嬉しいです。おつかれさまでした。 気をつけて帰って下さい。

**41**

ふりかえり  
 オウンティユちゃん ↔ しぜん(どうぶつ)  
 自分 ↔ しぜん(どうぶつ)  
 どんなふうにちがう？ 同じ？

★ むづかしいなと思ったら  
 自分の大切なもの3つ もう一回考えよう

**42**

写真略

**43**

カードに書こう！  
 印象に残ったこと  
 おもしろかったこと  
 やってみたくなったこと

## トリップ1 大草原! 羊と旅する女の子 参加者からのフィードバック

### ■当日ワークシート

#### ①私が昨日食べた肉や魚はどこから来たの?

- 生協(小1)
- 日本(小1)
- 日本のどこか(大人)
- オーストラリア(大人)
- わからない(小4)
- スーパー(小2)
- オーストラリア、スーパー(小6)
- ライフスーパー(小2)
- Life supermarket
- 生協(小3)
- 生協で買った豚肉です(大人)

#### ②自分とオウンティユちゃんはどのように違う?

- 白いテントのような家がここでは移動しない。日本ではガスコンロとかを使っているけど、モンゴルは木やフンや紙で火をおこしている。(食べ物)スーパーから来ているけれど実は動物から来ていることが分かった(小4)
- 食べ物: オ = 自分で育ててそれを食べる。自 = スーパーで買う。家: オ = テント、私 = カクカク 暮らし: オ = 動物を育てたり、その動物の骨で遊んだりしている。私 = 学校に行ったり、ゲームをしたり……(小6)
- 食べ物は自分が大切に育てた羊を殺して食べていた。家は違う(イラスト)。冬は羊の毛皮を使って体を温めている。  
動物は5種類いて、それぞれ仕事がある。家を持ち運んで年に3回くらい場所を変えている。それは動物の草が無くなってしまうと自分たちの食べ物が無くなるから(小4)
- 食べ物: オ = 自分たちが飼っている羊を食べる ミルクを搾って飲む。自 = スーパーでパックに詰められたものを食べる。  
家: オ = 移動する 広い空間 動物は家畜。自 = 二階建てで1フロアが狭い。犬はペット  
暮らし: オ = 何でもあるもの(自然の中に)をできる限り利用する。自 = 何でも買ってくる(大人)
- わたしたちのように食べ物をお店で買いものをせず、自分たちで育てたものを食べている。私たちは

同じところにずっと住んでいる。水道、ガス、電気がある(大人)

- Life cycle - awareness living with the animals near to nature. School? Home schooling - 1 food, 2 water, 3 supply. There is much less need of money.
- 馬と一輪車を対比した絵、ゲルとマンションを対比した絵(小1)
- 肉や野菜をお店で買わず、飼っていた動物からとっていた。

#### ③オウンティユちゃんと自分、自然(動物)との向き合い方はどんなふうに違う?

- オ = 自分の食べ物を大切に育てている。自然を勝手に食べている。自 = ペットとして飼っている。エサをあげている(小4)
- オ = 自然に感謝していて、動物をととても大切に育てる、それを殺して食べる。  
自 = 自然とはあまり関わらずに、自然に感謝できていない。動物を捨ててしまうような人もいる。でも動物を大切にしているのは私と同じ。オウンティユちゃんは大切に飼っていたのを殺しちゃうけど、それを悲しんでちゃんと骨まで残している。スーパーで食べ物を買っている私たちより命の大切さを知っている(小6)
- オウンティユちゃんの動物(自然)は家族みたいなことだと思う。自分にとっての動物(自然)はペットを飼っているということ(小4)
- オ = 生活とか生きるとか、(自然は)その中心にあるもの。動物や自然に対しての壁が無い。自分もその一部分として生きている。動物は自然の草を食べる。自 = 動物はペットでかわいがるものだったり、自然はきれいだと嬉しいけど、虫とかはイヤ。ペットはドッグフードを食べる。(大人)
- オウンティユちゃんと自然(動物)は生活に深く関係している。自分と自然は、ふだんの生活では意識しなければ繋がらない(大人)
- In our daily life, we are not aware of the importance of nature. For Oyuntya' s life, there is a stronger and clever connection between the people and what they need to survive.

## ■ 1か月後のアンケート

### ①おぼえていること、心に残っていることはありますか。

- 「羊の毛でできたテント」、「馬がいっぱいいた」、「写真とった」ゲルのような形をしたものを見た時に、「モンゴルの家みたい」と言いました(4才の言葉を大人が筆記)
- 「女の子が馬の世話をした。馬は草を食べてた。」「羊を殺して食べる」(小1)
- メダルとばとうきんとゲルをたいせつにおもっているのをおぼえている(小1)
- テントで住んでるのがすごいと思った。ミルクティがおいしくなかった。スープみたいだった(小4)
- 羊の毛 日本人と服装とか顔が似てた ミルクティがまずかった(小6)
- 柵で囲まれた土地の写真は印象に残っています。定住が進むことで草が無くなってしまっている写真を見て、遊牧民の中にも都市的な考えが入り込んでいるのかと、とても悲しい気持ちになりました(大人)
- モンゴルの大草原でも携帯が使われてるいること(大人)

### ②オウンティユちゃんのお父さんは「ゆうぼくみんの誇り(ほこり)を忘れないで」と話していました。オウンティユちゃんのほこりってどこから来るんだろう？ あなたのほこりはどこから来ますか？

- 「地球」(4才)
- 「自然」(小1)
- 「ころ」(小1)
- 誇りの意味が理解できない。日本の和室(モンゴルとは違うよさがあるから)日本の野球(日本が世界の中で強いから)(小4)
- 誇り…むつかしく答えられない。日本の部屋(小6)
- 今まで絶やすことなく紡いできた遊牧民の暮らし、その真只中にあること自体が誇りにつながるのではないかと思います。オウンティユちゃんは、自分の親や祖父母が遊牧民の暮らしを守ってきた、そして自分にも伝えようとしているということが分かるような年齢ではなかったかと思えます。その重みを感じているのではないのでしょうか。私の誇りは……よく分かりません(大人)
- オウンティユちゃんの誇り⇒小さいころから変わらない(伝統的な)日常、また家族などの親しい人たちからの愛情を受けて育った環境から来るように

思います。家を誇りに思うことは、結局自分自身の誇りにつながるのではないかなと思ったからです。私の誇り⇒オウンティユちゃんと同じく、両親にちゃんと育ててもらったことから誇りがくるのかなあとと思います(大人)

- 先祖代々伝え続けているのでしょうか…… 私の誇りは、自分自身で作り上げている最中です(大人)

### ③オウンティユちゃんにあって私にないものは何？

私にあってオウンティユちゃんにないものは？

- オ:「地球が大事」 私:「パソコン、ピアノ、冷蔵庫、おもちゃ、カーテン」(4才)
- オ:「馬頭琴」、「自然」 私:「いい靴」(小1)
- オ:民族衣装、羊、メダル、私:ゆるキャラ、時計?、おもちゃのメダル(小4)
- オ:家畜、私:ペット、ランドセル(小6)
- 私にあってオウンティユちゃんにないものは、都市的な暮らしだと思います。1つの場所に定住する、食材はスーパーで買う、何と言ってもお金が大きな力を持っている、そういった暮らしはオウンティユちゃんにはないでしょう。逆に、自然との共生という生き方は、私にはありません(大人)
- 私にないもの⇒日々の何気ないことや暮らしに対する感謝がなかったなと思えました。オウンティユちゃんにないもの⇒浮かばないです(大人)
- オ:広大な自然と馬(大人)

### ④「草原で暮らすオウンティユちゃん」と、「草原から離れた都会に住むオウンティユちゃん」どちらが「いいな」と思いますか。どうしてですか。

#### ■草原

- 「自然はきれいだし、いろんなものがあるし、色々なものが観察できるから、自然がいい。」(小1)
- 楽しそうだから。羊とかも飼いやすいから。気候のよいところに移動できるから(小4)
- 都会に住んでいたら、こんな風にオウンティユちゃんの生活を知ることがなかったから。何度も引っ越しできるのがいい(小6)
- もし、オウンティユちゃんが都会に住むようになれば、いまのような笑顔は失われてしまう気がするからです。動物との共生や穏やかな人間関係は遊牧民の中で育まれるものだと思います。都会に出ると、利害関係によって険悪な人間関係ができ上がったり、自然と切り離されたり、ストレスがとても大き

なものになってしまう気がします(大人)

- オウンティユちゃんの大切なもの、遊牧民族ならではの文化(食べ物、住居など)(大人)

- みんながみんな都会に住む世界がいいとは思わないし、自然の中での生活で得るものは大きいと思うので(大人)

#### ■ どちらもいい

- どちらもよかったです！草原でのオウンティユちゃんは、家を大事にしていることが良く分かりましたし、都会のオウンティユちゃんも家族と離れて暮らすことによって、より故郷の大切が分かったのではないかなと思うからです(大人)

#### ■ 都会

- 「きれいなお家がいっぱいあるし、街がいい。」(4才)
- とかい(小1)

#### ⑤ オウンティユちゃんに、伝えたいメッセージがあれば教えてください。

- 「自然がいっぱいあっていいね。」「自然があっていい気持ちなのかな?」「馬と遊んで楽しいのかな?」(小1)
- うまで、どうやって1とうしょうがとれるの?(小1)
- モンゴルの草原で暮らすという文化をこれからも守ってがんばってください(小6)
- できれば今と変わらず、遊牧民の生活を続けていてほしいなと思います(大人)
- 大切なものを思い出させてくれてありがとう！って言いたいです。国も生活習慣も違うけれども、人が大事だと考えるものは世界共通だと思います(大人)
- 自然の中で生きる知恵を日本人に教えて下さい(大人)

#### ⑥ 何でも感想があれば、自由に書いてください。

- 2人とも(4才、小1)「楽しかった。」「もう一回行きたい。」子供たちが当日のことをよく覚えていたことに驚きました。
- 日本の文化がいいと思ったけど、他の国の文化もいいなと思った。モンゴル衣装がかっこいいなと思った(小4)
- 衣装を着たり、いろいろ体験できるのが楽しかった。比較して考えるのが好きなので面白かった。シートに書いてからディカッションするのが国語の授業のようで慣れているので、やりやすかった。(小6)
- 小学生を相手にしたワークショップに初参加させ

てもらいました。予想できない小学生の反応は、時におもしろく、時に大変なものになるのだなと感じました(大人)

- オウンティユちゃんはまだ子どもなのに、年齢が上の私には見えていないものがみえているのだろうなあとおもいました。特別な日ではない、でも最も大切な普通の日常と、感謝の心というのを大事にしていきたいと思います(大人)

#### ■ アンケート以外に寄せられた感想(大人)

とにかく、非情に楽しかったようです。私も楽しかったです。何か楽しかったのか?と聞くとああいいう風に、紙に書いて考えるのが好きなんだそうで、私はちょっと、学校の授業のようでしたいんじゃないかなって、実は心配していたのですが、かえって、そういうのに慣れているからだそうで、ワークシートを書いて、比較して考えて話すというのが、すごくよかったらしいです。で、一番楽しかったのは、最後の衣装を着れたところだそうで、ミルクティはちょっと飲むの嫌だったって話してたけど、長男は、結構よかったみたいで、その後、レストランで飲んだコーヒーの匂いがさっきのミルクティに似てるとか、話してました。モンゴルの家のことは、3年生の時に、いろいろな家という授業があったらしく、少し知識はあったみたいですが、それがさらに詳しく知れてよかったそうです。私の感想ですが、私も親として、こんな風を感じてるんだとか、ただ、ゆっくり改めて「話す」ということが楽しかったです。ワークショップに参加する前は、現地の子どもが来るわけでもなく、ただ、話を聞くだけでは、インターネットなどで知る情報と同じで、知った気になるだけで終わるのではないかと、って心配していたのですが、そこに実際に行って話を聞いてきた人の話は、それだけで「へえーおもしろーい」って思えました。

ただ、今後に向けて、こうしたらどうでしょう?というのも少しあります。自分と比較して考えることで、いろんなことが浮かんできました。ワークシートが考えるための質問があまり細かく決められていなかったのがよかったところありますが、もう少し考えるための手がかりがあってもいいのかなって思いました。例えば、オウンティユちゃんと自然、自分と自然、の比較に入る前に、自分と違うなと思ったところ、自分と同じだなと思ったところ、不思議に感じたところ、もっと知りたいと思ったところなどの項目があるといいなあと思ったんです。長女が、動物が好きな

のは自分も同じ、だけど、かわいがっている家畜を殺して食べるというときに、オンティンユちゃんはどんな気持ちなんだろう？とか、例えば、長女は魚が好きなので、ほとんど骨だけにして、きれいに食べるのですが、一方でピーマンや野菜が嫌いで、残したりします。遊牧民の子どもたちにも、好き嫌いってあるのかな？とか。遊牧民の生活がお手本で、私たちの生活を反省しよう、という裏メッセージを感じとってしまって、やっぱり子どもってお利口さんな答えしか出さないので心配も。どちらが正しいということではなくて、自分たちと同じ人間なんだ、とか自分たちにも、何か工夫ができそうだと、とか。

上手く言えないんですが、自分たちの生活を反省するというよりも、違った価値観を知ることで、今までの当たり前がくつがえされる、だから、自分たちにも自分たちなりに、何かができそう！と感じれるところまで行くといいなあって。どちらが正しいという結論を子どもが出すと、結局、遊牧民になるわけにはいかないの、それは、それってことになってしまう気がして。要するに、優等生すぎる！っていうのが、どうせ私はムリ！ってなってしまうってことです。なので、もう少し、自分たちのいいところも探せたらいいなって思います。日本だって、欧米から見れば、家屋ひとつとっても、狭い空間を工夫するのがうまかったり、日本家屋は自然との共生がカタチになったものだと言えるし、もったいないという発想や、思いやりにかけては、本当にすごい国だと思うし。つまり、モンゴルの生活を知ること、自分の中に元々ある、アイデンティティが呼び覚まされて、いいところが顕在化してくるというのがワークショップのゴールだと思いいなと思います。今日はお誘い下さってありがとうございました。

## トリップ2 ワークショップ『私の家は雲の上』の実践を通じて

木村 友美 (東南アジア研究所 日本学術振興会特別研究員)

私の研究テーマは「辺境地における食の変化と生活習慣病」であり、主にヒマラヤ地域に暮らす人々がどのような環境のなかで暮らし、どのような健康状態にいるのかということとを医学・栄養学的な視点から研究している。標高4,000mをこえるようなヒマラヤ高地は、低酸素状態にくわえ、植物も育たない厳しい寒冷地である。このような、食糧入手も乏しい環境で暮らす遊牧民の暮らしには、長い年月ではぐくんでこられた生活の工夫・知恵がある。今回は環境教育をテーマにしたワークショップということで、ヒマラヤ高地のなかでもとりわけ標高の高い厳しい高所環境で遊牧民が暮らしているラダーク地域について紹介することとした。また、そのような地に住む人々の生活を通じて、自分たちの生活はどうかということもふりかえってもらうことに重点をおいた。さらに、私の研究では心理的な健康の調査もしており、厳しい環境に暮らす人の心、幸福度はどうなのだろうかということにもふれてもらう内容にすることで、幸せや価値観についても考えてもらうことにした。

### 1 プログラムの内容

#### ヒマラヤ地域への導入

まず、プログラムの初めには、簡単な自己紹介とともに「何をしているときが一番幸せか」ということを参加者にたずねた。すると、「お菓子をたべるとき」や、「おふろに入っているとき」などの声がきかれた。これらは、のちに紹介するヒマラヤ高地では手に入らないものばかりだ。プログラムの最後に、ヒマラヤに暮らす人々はどのようなときに幸せを感じるか、という研究データを紹介する。自分の幸せの基準や価値観と、ヒマラヤに住む人々の価値観とを比較してもらう狙いがある。

次に、プレゼンテーションにはいり、ヒマラヤを紹介していく際に、自分たちの住んでいる京都と、富士山、そしてヒマラヤの4,900mの村が、どのような高さ関係にあるか、簡単な絵で説明した。今回のワークショップでは小学生向けであったので、低酸素に関する説明は省略したが、標高が約5,000mでは、酸素は低

地の60%ほどになる。日本人がその地に立てば、少し歩くだけで息切れし、心臓の鼓動ははやくなり、全身の倦怠感とともに、ひどいときには頭痛を伴う高山病になってしまう。そのような地で、元気に暮らしている人々というのは、日本に暮らす私たちにとっては想像もできないような環境で暮らしているのである。今回は説明を省略したが、参加してくれた保護者の方々からは、低酸素適応についても質問がでた。もう少し年齢が上の小学校高学年、または中学生くらいを対象にワークショップを行う際には、ぜひ紹介したいと感じた。

#### ラダーク高原の紹介

ヒマラヤ地域の写真を、2,000mの村、3,000m、4,000m、5,000mと順にみせながら、木々や緑の草原がなくなっていく環境の変化を紹介した。4,000mをこえると緑が谷間にしかなくなって、森林限界を超え、その先にも住んでいる人がいるという現状を話し、写真とともに「こんなところに人は住んでいるのでしょうか」と問いかける。写真には小さく人やヒツジの群れが写っていて、「あ、あそこにいる」と、スクリーンをゆびさしてくれた子どももいた。

#### ひとつめの問い：

##### どんな家に暮らしているか、お風呂、食事はどうか

「さあ、こんなところでどうやって暮らしますか。みなさんなら、どのように家を建てますか」という質問をなげかけた。ヒントとして、手に入るものは写真と文字で提示した。実際にはU字谷のなかにある細い川の周りで移動しながらテントを立てて暮らしている。写真のヒントから、どうやってテントを作っているか考えてもらい、正解はヤクの毛で作っているということを説明した。動物の毛からつくるテントで、「雨が降ったらどうするのか」という素朴な疑問には、実物のヤクの毛の帽子を見せることで紹介した。これは実際は、インド・アルナーチャルプラデーシュ州のモンパ族の人々がかぶっている帽子であるが、ヤクの毛の特徴を見てもうらうために用意した。地面のほうに向かってとんがった角が生えているような形の帽子は、



写真1 ヤクのぼうしをかぶる



写真2 ツアンパをつくる

子どもたちが面白がってかぶって写真をとったりすることで盛り上がる良いアイテムとなった(写真1)。ヤクの毛は油分を含んでいるので、ウォータープルーフのように雨が落ちてこないという説明も加えた。そのようなことをさわって経験してもらった。ヒマラヤの人々の家が分かったところで、次に、「みんなの家はどうやってできているの」と聞いてみると、大人も子どもも悩み、自分の暮らしへの注意がいかに乏しくなっているかを振り返ってもらった。

お風呂も、写真を見せて、小さな川で足を洗ったりするだけでお風呂に入る習慣はないということを紹介した。冷たいヒマラヤ氷山の雪解け水で、足を洗ったり、洗濯もしているという写真を見てもらった。

### ツアンパをつくって食べる

食べ物についても、「野菜などは育てられそうにないけど、どうしましょう」と言って考えてもらった。動物を飼っているので、ミルクやお肉を食べるということを説明した。しかし、すべてが自分で手に入るものではないので、助けあって農民と交換しながら食べ物を得るという話も加えた。チベットでは大麦をよく食べるので、それを実際に作って食べてみようということで、大麦の粉にバターと塩茶を入れて混ぜて団子にして食べてもらうというアクティビティを行った(写真2)。実際に、炒った大麦の粉にバター茶を加えて、お椀を手でくるくる回して練って団子のような形にする。これは実際に作って食べるというアクションで、子どもも大人も楽しんでもらったようであった。意外にも、「おいしかった」という声がかかれ、たくさん食べてくれる子どももいた。また、ヤクの肉(中国青海省からの土産)も試食してもらった(写真3)。

これらの紹介の最後に、「このように限られた資源を用いて、厳しい環境で暮らしている人たちのことをどう思ったか、自分の生活はどうか」ということを、振



写真3 ヤクの肉を食べる

り返ってまとめてもらうという時間をとった。

### ふたつめの問い: 幸せと思うとき

前半で、ヒマラヤに暮らす人々の暮らしを紹介し、振り返ってもらった後に、「ここ人たちの暮らしは大変そうだったかもしれないけれど、実はとても幸せなんだって」ということを話し、「ヒマラヤに暮らす人々は、なにをしているときに幸せなんでしょうか」ということを問い、思いをさせてもらった。一番は最初の問いで、参加者には「なにをしているときにいちばん幸せかですか」と聞いている。大人は「お風呂に入ったとき」、子どもたちは「お菓子を食べたとき」、「友だちと遊ぶとき」、「テレビが好き」などと書いてもらっているのが、比べながら考えてもらった。その後、実際にラダークの住民への研究調査からのデータを簡単にまとめたものを紹介した。これは医学的調査で心理的健康を測るときに同時に行った調査で、「なにをしているときにいちばん幸せか」という問いに対する回答を集計したものである。「お祈り」と答える人が過半数で、二番めに多いのが、「畑や山で働いているとき」、「動物といっしょに山に行くとき」、「たくさんのアンズの実をもらったとき」など、外にいるときや動物と動いている生活自体が幸せという回答、三番目に多いのが「家族といるとき」という回答であった。この



写真4 マニ車をまわす



写真6 フィールドノート



写真5 カタかけあい

ようなことについて、自分とどう違ったかを考え、ふりかえってもらった。

### チベットでの祈り

次に、チベットの人たちが大事だという「お祈り」が、どのような感じのものであるかということを紹介した。お祈りをするときには、お経の書いてあるマニ車という魔法の杖のようなものをクルクル回す。これを実際に、マニ車を用意して回す体験してもらい(写真4)、お祈りの話をした。おそらく、子どものみならず多くの日本人には「祈り」の重大さや偉大さはなかなか理解しがたい点であるが、マニ車のようなアイテムを用いて、雰囲気だけでも感じてもらうことができたと思う。そして最後に、私が聞いた話を交えながら「一つだけ願いをかなえてくれるとしたら、みんなはなにを祈りますか」ということについて考えてもらった。その後、チベット族の多くはお祈りをするとき、自分のことではなく、他の誰かのことを祈る、ということを説明した。一例として、私自身の経験をまじえながら、チベットのお寺に行ったとき、24歳の通訳の男の子に何をお祈りしたのかたずねると「World Peaceだ」と平然と言ったことに衝撃をうけた、という話を紹介した。その時、私は「就職できますように」とか、自分のことを祈っていたので恥ずかしい気持ちになった。そ

の男の子にとっては、「逆になぜ自分のことを祈るのか」ということが疑問だったようで、チベット族には「自分ですることなのに、だれかに祈ってどうするのか」という考えが根底にあり、自分の力の及ばない範囲のことを祈ることが普通であるという価値観もあるのだということを共有した。この話を、子どもたちがどのように受け取ってくれたかはわからない。

### 「カタ」をかけあう

最後に、チベット族のカタという布をかける風習を紹介した。白い布を肩にかけるもので、「幸せ、安全、健康」など、その人のことを思ってかける。もしくは村に入ったときに、「ようこそ。これから楽しく過ごせますように」と、歓迎の意味をこめてかけることもある。

ワークショップの最後には、いっしょに来たお母さんや兄弟に相手のことを思ってカタをかけてみようということをして締めくくった(写真5)。子どもが、お母さんに、またおばあちゃんにカタをかけている姿や、照れながら兄弟どうしてかけあっている姿、どのシーンにも笑顔があふれていて、プログラムの最後の良いエンディングになったように思う。

## 2 当日の状況と参加者からの感想

### 子どもの集中力

当日は90分間で、小学校低学年の子どもが多かったので、途中で食べ物やモノを用いないとやはり続かない。子どもにとってじっと話を聞いているのは難しいということが初めて分かった。最初に山田勇先生にフィールドノートを配っていただき、子どものひとりひとりが「これは自分のフィールドノートだ」と感じて、多くの子どもが必死にノートにメモをとっている姿には感激した(写真6)。



写真7 集合写真

### 体験の重要性

しかし、子どもの感想の多くは、「ツァンパの団子がおいしかった」、「マニ車を回せた」など、モノにふれたとか単純な印象が残っているようであった。やはり多くを話すよりも、モノにふれる、体験する、というアクションがワークショップのなかでは重要な点であることが分かった。

今回は小学校低学年に向けた内容で、かなり簡単に話をしたにもかかわらず、「大人も楽しめた」、「いろいろな価値観を知ることができた」などという、参加者の大人からの意見も聞くことができた。また、私にとってうれしかった点は、ある子どもが家に帰って、「いろいろなことを勉強しているお姉ちゃんがいるんやなあ」と言ってくださったという、保護者からの話であった。子どもにとって、自分がいま勉強していることとはまったく違う世界でなにかをしている人を知ったことで、今学校でしている勉強だけでなく、いろいろな勉強があるということを感じてもらえたのではないかと思う(写真7)。

## 3 今後の展望と課題

### グループごとのファシリテーション

ワークショップの実施時の課題としては、グループで話しあうグループ・ディスカッションの際に、テーブルごとに大人や進行のできる人がいないとディスカッションが滞ってしまうという点である。議長とまではいかなくとも、進行をしていく担当の大人が一人グループに入る必要性を感じた。

### 多様な地域

ワークショップ全体の課題のひとつとしては、今後より多くのさまざまな地域を知ってもらえるように、紹介する地域を増やしていくことが挙げられる。ワークショップでは、子どもたちにパスポートを提供し、判子を捺してもらえて、いろいろな国に行ったような体験ができるような工夫がなされている。一つのプログラムに参加すると、「もっとほかの世界を見てみたい」という気持ちになるワークショップができると、さまざまな文化や価値観にふれることができ一層深みのあるものに発展していくと思う。

### 自然と暮らす、現代に暮らす

そうなったときに、私が紹介したような原始的な生活の残る地域は、確かに強いインパクトを与えるが、「原始的だから良い」、「自然と共存している昔の暮らしが良い」と誘導してしまうことのないよう注意したい。「どう感じるか」は人それぞれであり、いろいろな地域を純粹に知ってもらって子どもがどう考えるのかという点を根底にすえつつ、新たな地域のプログラムを設定していくことで、ワークショップ全体としても発展がみられるのではないかと考える。

# わたしの家は雲の上 シナリオ

2013年11月30日実施

木村 友美(京都大学東南アジア研究所 連携助教)

WSシナリオ開発……木村友美・飯塚宜子／進行……木村友美

ねらい……「ドルマおばあちゃんの暮らしを感じ取る」ことを通して「人と人のつながり、誰かのことを想う気持ち」を思い出す。

## 1. 受付

パスポート形式の名札を渡し、ヒマラヤのページに入国スタンプを押す。

フィールドノートを一人一冊配布し、使い方はワークショップの中で説明するが、聞いたこと見たこと思ったことなど、何でも書くノートだと話す。

座ってもらう机番号を伝え(あらかじめグループ分けをしておく)、席についたらパスポートの表紙に、自分が「呼んでほしい名前」を書くよう伝える。音楽を流す。部屋には、チベット仏教の祈禱旗(青・白・赤・緑・黄の旗が順につるされたもの)が張り巡らせている。

## 0:00起 イントロダクション

2. こんにちは！今日はみなさんと一緒にヒマラヤという高い場所に住むドルマおばあちゃんたちの暮らしを知るたんけんに出かけます。最初の部分を飯塚が進行し、ドルマおばあちゃんたちの暮らしのお話は、木村さんがお話していただきます。今日は、ドルマおばあちゃんたちの暮らしを感じとってください。

3. 今日の進め方です。たんけんに出かける前に、グループで自己紹介をします。その後、ドルマおばあちゃんの暮らしの写真をしながらクイズを出したり、グループで話し合ったりします。ドルマおばあちゃんはどうなものを食べているのかな、それからどんな時に幸せって感じるのかな。そして、最後に全体を振り返ります。

4. 今日の主役はみなさんです。楽しんで、積極的に、よく皆の話を聴いてください。自分の心の声にも耳を澄ませて、聞いてみましょう。でも、無理はしないで。無理と思ったら言ってください。

(フィールドノートの使い方を説明)。

5. では、グループで自己紹介をします。紙を配ります。この紙は4つに区切ってあります。一つ目に自分の名前と学年を、2つ目に、

## 2

### ワークショップをはじめます

- ・今日のねらい  
ヒマラヤ・チベットの村に住む  
ドルマおばあちゃんのくらしの様子を  
感じとろう
- ・スタッフのしょうかい

## 3

### きょうのプログラム

- ・グループでじこしょうかい
- ・ドルマおばあちゃんのくらし  
おうち？  
食事は？  
おふるは？
- ・何をしているときに幸せ？
- ・ふりかえり

## 4

- ・主役はわたしたちみんな
- ・みんなの話しをよく聞こう
- ・積極的に話してね

## 5

### まず、グループで話そう

1. なまえ(よんでほしいなまえ)と学年
2. どこから来たの？(小学校)
3. きょうのばんごはん、何を食べた？
4. 何をしているときに、一番しあわせ？

どこから来たか。3つ目に、昨日のばんごはんは何を食べたか、4つめに何をしている時がいちばん幸せか、書いてみてください。書き終わったらグループの中で、カードをみせあいっこしながら、自己紹介をしてもらいます。では3分くらいでカードを書きましょう。(静かにする。邪魔にならないBGMを流す)  
(様子を見て)書けましたか。書けたらグループの中で順番に読みあいっこしながら自己紹介してください。最初に話す人が決めにくければ、私に一番近い席に座っている人から始めて下さい。

**0:20 承 ヒマラヤ高地のドルマおばあちゃんの暮らし**

6. では、ヒマラヤでの暮らし、見ていきましょう。みんなヒマラヤって知ってる？ 地図で見てください。ヒマラヤ山脈はこのあたりにあります。

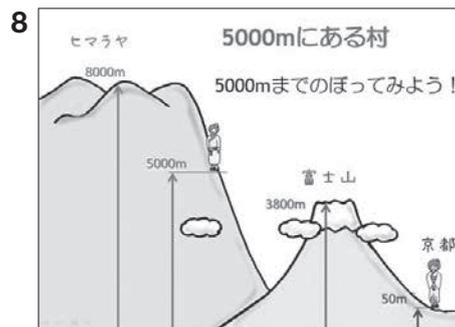
7. こんな人々が住んでいます。これが、ドルマおばあちゃんです。

8. みんなが住んでいる京都は、海からの高さ測ると、50mくらいです。日本で一番高い山は？ 富士山はだいたい3800m。ドルマおばあちゃんは、富士山の頂上よりだいぶ高い、5000mのところに住んでいます。ヒマラヤ山脈の一番高いところは8000mありますが、ここには人は住んでいません。

9. だんだん、登っていっていきましょう。

2,000mまで行くと、こんな感じです。麦が育ってますね。麦からはパンや麺類をつくって食べることができますね。

10. 3,500mまで登りました。もう家は雲の上にありますね。



11. 4,000mです。まだ、木や草が結構たくさん生えていますね。

11



12. ついに、5,000m！ もう木もほとんど生えていません。

12



13. さあ、みんな、5,000mの高地まで来てしまいました。

ここに住んでみましょう。

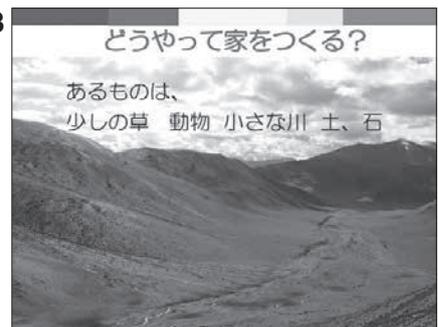
どうやって家をつくったらいいかな？ ここにあるものは、草、動物、小さな川、土や石です。

みんなだったら、どうやって家をつくる？

グループで相談してみましょう。1分くらい、相談してみてください。

どんなアイデアが出ましたか？

13



14. これが、ドルマおばあちゃんのおうちです。何でできてるんでしょうか。これは、ヤクという動物の毛皮でできています。

14



15. このおうち、雨が降ったら、どうなるんだろう？

大丈夫かな？ どう思う？

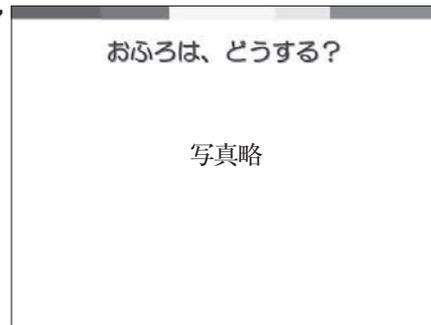
15



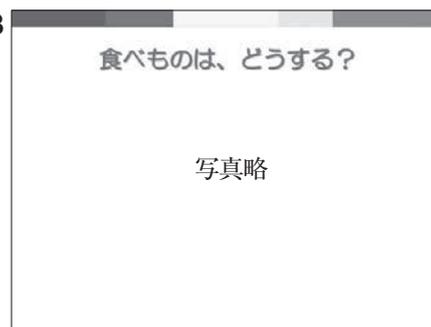
16. おうちを作ったヤクと同じ毛皮でつくった帽子があります。 16  
おじいちゃんがかぶってますね。 ここにもあります。さわってみ  
ましょう。 どんな感じ？ ヤクの毛皮は硬くて分厚くて、水をは  
じきます。だからこの毛皮で家をつくっても雨漏りしません。



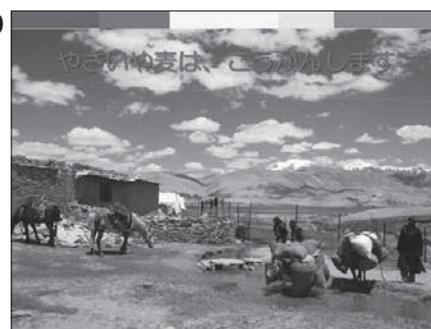
17. おふろはどうしよう？ お風呂は川で水浴びをします。 私 17  
もこの村へ行った時は、川で水浴びをします。すごく冷たいですが  
いい気持ちです。



18. さて、ごはんは何を食べましょうか？ ヤクのお乳を搾って、 18  
お乳を飲んだり、チーズやバターをつくります。



19. ドルマおばあちゃんたちは、さっき見た麦や野菜も食べます。 19  
この村ではとれないので、時々下の村から麦や野菜をもってき  
てくれる人と、ヤクのお乳を交換して、手に入れます。



20. ある夜の、ドルマおばあちゃんの晩ご飯です。 野菜を乳で煮 20  
たスープのようなものと、左はツァンパという食べ物、大麦でつ  
くったお団子のようなものです。



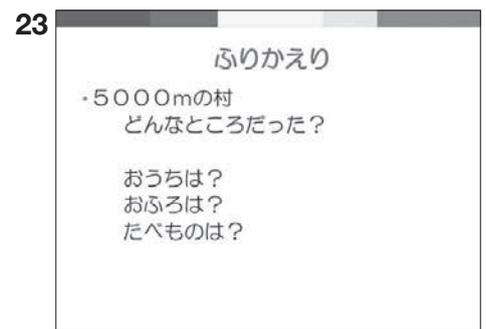
21. チベット族の人はこのツァンパが主食のようなものです。大麦をひいた粉に、バター茶という、バターの入ったお乳を混ぜて、お団子にします。



22. ツァンパはお弁当にもなります。今日はみんなで、このツァンパをつくって食べてみませんか？ 手でこねるので、ウェットティッシュを配ります。気になる人は手を洗ってきてください。（一人ずつ、ちゃわんに入ったはったい粉を配り、バターと塩を入れたミルクティーを少しその茶碗に注ぐ。ツァンパをつくって食べてみる。 食べ終わった後は、手を洗い、机を整える。 牛乳アレルギーなどを持つ参加者がいないか注意し、その場合は、お湯を注いでつくってもらう）

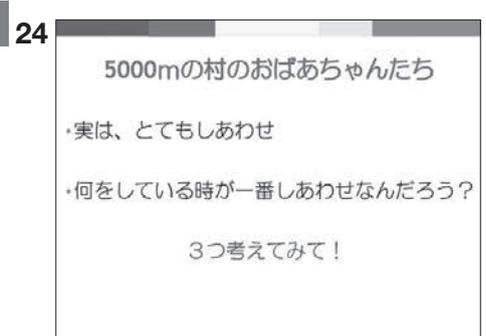


23. どうでしたか？ それでは、ドルマおばあちゃんの暮らしの様子をふりかえってみましょう。 5,000mの村はどんなところだった？ おうちやおふろや食べ物は、どんな様子でしたか。 紙を配るので、覚えていること、気になったこと、感じたことなどを書いてみましょう。 3分くらいで書き終わったら、グループで見せあいをし、話し合ってみましょう。  
(グループで話す→それぞれのシートに書くという順序でもよい)



0:55 転 ドルマおばあちゃんたちの価値観に触れる

24. さて、私はこの高い高地の村、3,000mから5,000mくらいの村の人たちの健康調査とともに、心の幸福度を測っています。それで、村の人たちは、心の幸福度が日本人よりも高いことがわかっています。 おばあちゃんたちが、幸せを感じる時は、いったい何時なんのでしょうか。 そういう場面、3つかんがえてみてください。どんな時かな。



25. おばあちゃんの幸せな時、第3位は？ 友達や家族と一緒にいる時です。



26. では、第2位は？ 畑や山など、外で働いている時です。

26



第2位

27. では、最後に、村の人たちが一番幸せを感じるのは、どんな時でしょう？ それは、お祈りをしている時なんです。

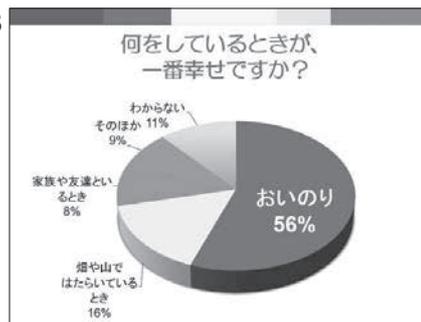
27



第1位

28. これが、アンケート調査の結果です。圧倒的多数で、おいのりおいのりをしている時が一番幸せだと、皆さんは答えてくれました。

28



29. 私がこの村に行った時のことです。ひとつだけ、お願いをかなえてくれるカミサマカミサマがいるところがあります。

29

みんなだったら何を祈りますか？ 私はここに、20代の若い男の子と一緒にいき、お祈りをしました。今度の試験に合格しますように、って祈りました。で、その一緒に行った男の子に何を祈ったか聞いてみました。その子はなんて答えたと思いますか？世界の平和を祈ったと答えたのです。1つだけしか、願いを叶えてくれないんですよ。そこで世界平和を祈ったと言うのです。で、逆にその男の子に聞かれました。どうしてゆみは、自分のことを祈るの？ 自分のことは自分ですればいいじゃないか。自分ではどうにもならないことを祈るんでしょうって。

またこんなこともありました。村の人たちの健康診断をしている時、部屋の中にハエが数匹、飛んでいたのです。それで私は軽く、シューッと殺虫剤を撒きました。ハエが数匹、床に落ちて死にました。次の日の朝、村の人たちは、いつもより長くお祈りをしたそうです。死んだハエのために祈っていたそうです。このように、チベットの人たちは、自分のためにではなく、誰か他の人、他の生きもののために祈ります。その時間が、もっとも幸せな時間なのだそうです。

おいのり

- ・ひとつだけ おねがいをかなえてくれるカミサマカミサマがいます
- ・みんなは、なにをいのる？



チベット族は、自分のことではなくだれかのために祈ります

**30.** お祈りためのツールとして、この教室に飾っている旗があります。この旗は、五色ありますが、それぞれ、天、風、火、水、地を表していて、風ではためく度に、お経を1回あげたのと同じ効果があるそうです。またマニ車という道具があります。グループに1つずつ、配りますね。(マニ車を配る) 時計周りとは反対方向に回すと、これもお経を一回あげたのと同じ効果があるそうです。回してみてください。

それから、この白い布はカタ、と呼ばれています。お別れの時など、相手の幸せや旅の安全を祈りながら、その相手にかけてあげる布です。このカタを皆さんに一枚ずつ、配ります。(カタを配る) ご家族どうし、お友達どおし、二人一組になってください。そして、相手の幸せを祈りながら、相手にかけてあげてください。

**30**

・マニ車、祈禱旗、カタ

写真略

**1:05 結** ふりかえりとまとめ

**31.** それでは、ふりかえってみましょう。みんなは何をしている時が一番幸せですか。またみんなのおばあちゃんやおじいちゃん、またはお父さんやお母さんは何をしている時が一番幸せなんだろう。紙を配ります。考えてみて、3分くらいで紙に書いてみてください。書き終わったら、グループでみせあいっこして話し合ってみてください。

〈グループで話す→それぞれのシートに書くという順序でもよい〉

**31**

かんがえてみよう

みんなは 何をしているときがしあわせ?

みんなのおばあちゃんは  
何をしているときが  
いちばんしあわせだろう?

**32.** みんなに1つ、覚えて帰ってもらいたい言葉があります。タシデレ! です。

挨拶の言葉ですが、相手への感謝や、相手の幸せを祈るという意味も含まれています。今日はこのタシデレ! という言葉を覚えておうちに帰ってくださいね。

最後に集合写真を撮りましょう。

時間がある人は、感想、印象に残ったこと、おもしろかったこと、やってみたくなくなったことなどを書いてくれたら嬉しいです。

今日は参加してくれてありがとうございました。

**32**

カードにかいてみよう

・今日 印象に残ったこと  
おもしろかったこと  
やってみたくなくなったこと

## トリップ2 わたしの家は雲の上 参加者からのフィードバック

### ■ワークシート

#### ①ドルマおばあちゃんたちの暮らしは自分の暮らしとどのように違った？

- ヤクの毛のテントでできていて、石で周りを固めた半地下で高さを確保していた。おふろはなく、ヒマラヤの氷河が溶けた水が流れている川で足を洗う程度。交換で手に入れた小麦などや家畜をつぶして食料にしている。ツァンパは大麦の団子。
- おうちは？ 半分地下でヤクの毛。おふろは？ 無い！！ 川で足を洗う。食べ物？ 大麦、ヤクのミルク、チーズ、お肉。(小1)
- 5,000mの村は、家は半分地下で、その中は石積み。テントはヤクの毛。おふろはない。川で足を洗うだけ。冷たい。ごはんはチーズ、ミルク、バター、ツァンパ。(小3)
- (家)ヤクの毛でできている。油出してるので雨を防げる。少し地面を掘って天井を高くする。/(おふろ)川で足を洗うだけ。雪解け水だからとても冷たい。/主食はツァンパ。ほろほろしている団子みたいな茶色い食べ物。固まったお米みたいなモノを混ぜたりする。ヤクの肉も食べる。ジャーキーみたい。(小5)
- 家はヤクの毛でテントにしていた。おふろは入らない。水で足を洗う。食べ物は交換、または町に買い物。燃料はヤクのフン。(小1)
- おうちは？ 床を掘って天井を高くする。ヤクの毛でつくっている。(大人)

#### ②何をしている時が幸せ？ 自分のおばあちゃん(お母さん、お父さん)は何をしている時が幸せだろう？

- 子どもが喜んでいる顔を見る時が幸せ。おばあちゃんはひ孫と遊んでいる時が幸せ。
- おばあちゃんはポシェットをつくっている時が幸せ。寝ている時と食べている時が幸せ！！(小1)
- 自分は寝ている時が幸せ。おばあちゃんは編み物している時が幸せ。タシデレ！(小3)
- がんばってテストやピアノがうまくいった時かな？(小5)
- 好きな本を読んでいる時かな？ ママはおふろ。パパは会社。(小5)

- お友達と遊んでいる時が幸せ(小4)
- 笑顔でいる家族を見るとき(大人)

### ■1ヶ月後のアンケート

- ①覚えていること、心に残っていることはありますか。
- 旗がいっぱいかかった。牛のうんちを燃やす。楽しかった。もう一回行きたい(4才)
- チベットは京都よりもっと高い。チベットは家がとても狭かった。くるくる回る音になるやつ。(小1)
- ドルマおばあちゃんが、都会(私達)の暮らしと全然違う暮らしをしていることに本当にびっくりした。そのことが一番心に残っています。(小1)
- 5,000mの雲の上に住んでいる人がいること。マニグルマを回せたこと(小1)
- お菓子が素朴で味がないなあとおもった。家をテントでつくっていることにおどろいた(小3)
- マニグルマ。ヤクの毛の帽子をかぶらせてもらったこと。←雨が降っても三つ編みの部分から流れ落ちるなど工夫されていると思いました。/水で練った粉を食べさせてもらったこと。/カタもらえたこと。
- 日本(私)では考えられない生活だなと思った。(小5)
- 毛の長い「やく」という牛に似た動物を余すことなく、うまく利用していること。標高5,000mという、植物もなかなか生育しない地域で人が生活していることができるということ(大人)
- チベット族の方がたは、自分のためではなく、人のために祈るということ(大人)
- 資源の乏しい様子が写された山の上の写真には驚きました。こんなところで本当に生活できるのか、という疑問が常に付きまとい、暮らしの様々な工夫が紹介された後でも、実際に生活している様子を想像することが非常に難しかったです(大人)
- 大麦の粉(ツンパ?)、バター茶両方とも初めていただきました。甘くないミロ+そば茶の香ばしさのような味でした(大人)
- 食べ物。私とは住んでいる標高が全然違うこと(大人)
- ②自分ではない誰か、相手の幸せを願う時、どんな気持ちになりましたか(どんな気持ちですか)。
- 「いい気持ち」(4才 or 小1)

- お願い事が本当に叶うといいなあ(相手に願った事)と思いました(小1)
  - 友達とかが元気になったらうれしい(小1)
  - ほんとにかなったらいいいね(小1)
  - その人の考えている通りになると、良かったなと思う(小5)
  - 「良かったね」と思います。が、相手の幸せを願う⇒自分の立場に置き換えて考えてしまっている気がします(大人)
  - 穏やかな気持ちになる(大人)
  - 私はある家族と一緒にWSに参加させてもらったので、その家族(親子3世代)がお互いに幸せを願う場に立ち会わせてもらいました。その様子を見て、心が温まる思いがしました。普段は口にしない、相手を思いやる気持ちを伝えるということは、少し恥ずかしいことかもしれませんが、そうすることで幸せを願われた方も、願う方も、両方が幸せになれるのだと思いました(大人)
  - 心の「余裕」を感じました(大人)
  - 日本でも、もちろん神社に参った時などは相手の幸せを願ったりもするが、自分の願いもだいたい一緒にするので驚きました。自分ではなく、相手の幸せを考えることは本当に大事な心だと思いました(大人)
- ③「雲の上の村に住んでお祈りをするドルマおばあちゃん」と、「自然から離れた都会に住むドルマおばあちゃん」、どちらが「いいな」と思いますか。どうしてですか。
- どちらでも
  - どちらに住んでいてもそれぞれのよいところがあるから、どちらでもよいと思いました(小1)
  - 本人が望んでいるのであれば、どちらのドルマおばあちゃんもいい。どこにいてもドルマおばあちゃんなら自分の幸せに忠実でいられるだろうし、その幸せの獲得に労力を惜しまないだろうと思うから(大人)
  - 雲の上に住むドルマおばあちゃん
  - 気持ちが良さそうだから(4才or小1)
  - 住み慣れてないから(小1)
  - 仲間とかがいるから。好きなことができていたら、雲の上の村に住んでいる方がいいと思います。でも、私たちの暮らしみたいなことも体験してもいいと思います(小5)
  - 自然からはなれると、楽しくないと思うから(小3)
  - 子どもたちとも話していたのですが、「都会に来た

ら便利だけど、空気は汚く感じはるやろうし、自然は少ないしびっくりしはるやろうなあ。」「もっと若ければ都会の生活に慣れるかもしれないけど……」ドルマおばあちゃんが幸せと思えることがあるから今のままでいいと思います(大人)

- お金が無くても幸せに暮らすことができるので(大人)
  - 伝統的な暮らしが失われることなく、将来の世代に受け継がれていくことが大切なことだと思うので(大人)
  - 都会
  - くものうえだといきがしにくいから(小1)
- ④ドルマおばあちゃんの「ここがすごい！」ところはどこですか。自分の「ここがすごい！」ところは？
- 不便な生活の中で、暮らしのことや食事のこと(粉をこねたりする)を全部自分でしていたところがすごいと思いました(小1)
  - 5,000mの雲の上で息ができること。働いているときに幸せというのがすごいと思う(小1)
  - お祈りを熱心に行っていること。生活が平和な感じがする。助け合いながら生きている。などがいいことだと思います(小5)
  - 自分のことでなく、人の幸せを第一に考えることがすごいと思います(小3)
  - 「お祈りをしているときに幸せ」と答えられることです(大人)
  - 心がとっても豊かなこと！(大人)
  - ドルマおばあちゃんに限らないことですが、相手の幸せを願う、という習慣は素晴らしいことだと思います。私たち日本人からすれば、なかなか実行できることではありませんので。ドルマおばあちゃんには、今の日本の状況、自分勝手な人ばかりである状況を見てもらいたい。(大人)
  - いくつになっても友達となかよくできているところ(大人)
  - 自分のここがすごい
  - 汚い空気やガズ、人混みがすごい都会の中で、元気に迷子にもならず、生きているところがすごいと思います。(小1)
  - 工作が得意です(小1)
  - 宿題が早くできる(小1)
  - 自分のすごいところは、体がやわらかいことです。(小3)
  - 途中でやめないで最後までがんばること(小5)

- 家のこと、子供たちのこと、仕事、近所(町内の役) など主人は毎晩帰りが遅く母子家庭のようですが、ほとんど1人でこなしていること(自画自賛です)(大人)
- 自分のすごいところは、絶えることのない好奇心(大人)
- 今のところ、社会の流れ(大学進学→就職というような“ごく普通の流れ”)に乗らずに自分のペースで人生を歩めているところ、ですかねー(大人)
- 興味のあることには積極的(大人)

⑤ドルマおばあちゃんに、メッセージがあれば教えてください。

- これからも自然を守って元気に暮らしてください(小1)
- ヤクのお肉をたくさん食べてください。元気でいてください(小1)
- マニグルマを持ってずっとお祈りをしているのは重くて大変ではないですか?(小5)
- おしあわせに(小3)
- ドルマおばあちゃんと一緒にお祈りをさせてもらって、幸せを感じてみたいです(大人)
- 伝統的な生活を、相手の幸せを願うという習慣を守ってくださり本当にありがとうございます、と言いたいです。世界中のそういう生活、習慣が一つでも失われないように願うばかりです(大人)
- いかがおすごしでしょうか? 大変興味深い自然環境で生活されていること、お友達や仕事を大切にされていること、日々祈りをささげておられることなど、木村さんからうかがいました。貴方のことをお聞きすることで自分を見つめなおす機会に恵まれました。ありがとうございます。貴方にとって最善をお祈りさせていただきます。寒い時節柄、くれぐれもご自愛下さい。感謝をこめて(大人)

⑥何でも感想があれば、自由に書いてください。

- 自分がもしも雲の上の村に行ったらどんな暮らしをするのかなあと考えることができました(小1)
- 村の食事(粉のお団子)が意外とおいしかったです。(小1)
- 酸素マスクをして1回くらいは行ってみたい。ずっと住むのは慣れてくるかもしれないけど、ちょっと嫌だ。学校、食べるもの、スーパーがない。お湯がなくてお風呂がないと寒いと思う(小1)
- そんな高いところに人間が住むってことを知らな

かった。便利でないことは現地のの人にとっては満足してるからいいのかな……と思う。私は体験してみたいけど生活できるかどうかはわかりません(小5)

- 粉をこねて、だんごをつくるのがたのしかったです(小3)
- 何かが手に入ると、次はこれも欲しい、あれもやりたい……どんどん欲が出てきてしまいますが、忘れてしまう感じがしました(大人)
- 子供たち(4才、小1)が当日のことをよく覚えていたことに驚きました(大人)
- 参加した3回のトリップ(1、2、4)の中で一番印象に残っている回でした。初めにも述べましたが、あそこまで資源の乏しい環境で生活している人々がいるということに非常に驚きました。一度訪れてみたいな、と思いました(大人)
- 参加対象が小学生にも関わらず、子どもだけで無く大人も楽しめる内容でした。現地の方の食べているものを試食できるのはいいと思いました。食べることは記憶に残りやすいと改めて思いました(大人)

⑦【他のトリップに参加してくれた方に】いろいろな自然やいろいろな暮らしを見て感じたことがあれば教えてください。

- カナダも参加させていただきました。その土地その土地で工夫をして生活されていると思いました。私の暮らしの中で工夫って……バーベキューするにしてもコンロや網、炭まで一式セットが家の物置にあります。あと動物などに対して命をいただくことにとっても感謝されていると思いました。そのような感覚をもっと私も大事にして子どもたちにも感じてもらわないといけないと思いました(大人)
- 楽しかったです。ありがとうございました(大人)

感想

- チベットの方が熱心に聞いていたようで、割と記憶に残っていたようです。(2、4)5年生の娘は内容だけではなく普段、関わることのできない先生のお話を聞けたことが良かったみたいで「いろんなこと勉強してはる先生がいるんやなあ」と言っていました。なかなか体験できないようなことをさせていただいてありがとうございました(大人)

## トリップ3 ワークショップ『森でゴリラに会ったらどうする?』の 実践を通して

大石 高典(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員)

トリップ1とトリップ2は標高が高かったり寒かったりといったところでしたが、私は逆に温暖で多湿の環境で暮らしているバカ・ピグミー族という狩猟採集民の生活について紹介するワークショップを行ないました。

プログラムの概要ですが、眼目としては、飯塚さんから与えられた2点、「多様な環境で生きている人たちの生活」と「そこで育まれる精神性」との両面についてアプローチすることが課題でした。

アフリカも日本とはかなり違う環境ですし、熱帯雨林も日本から遠いので、そういった自然環境やそこの生業、狩猟採集に依存した生活があることを紹介する。そのうえで、そういったところで自然との共存がどのように図られているのか。ゴリラやゾウは日本では動物園にしかいませんが、そういった動物と共存する、いっしょに暮らしながら生きることがどのようなことなのか。その表象の一つである精霊との関係などについて、実際の自然のなかでの暮らしと関連づけながら紹介するというアプローチをとりました。

### どんなプログラムを実施したか

#### プログラムのあらすじ

プログラムでは、前半に熱帯雨林の自然環境や、狩猟採集に依存した生活とはいかなるものか、そしてそのなかでハンター、狩猟という活動が狩猟採集民族であるピグミー族の男の子のなかでしだいにアイデンティティをもっていくことについて紹介しました。子どもから大人になる過程で精霊儀礼を受けるのですが、それを控えたバカ・ピグミー族のある男の子が、森のなかでふとしたきっかけで冒険してゴリラに会い、そして村に帰って精霊儀礼を受ける、という伏線を含んだ物語にしました(写真1)。

#### 主人公の設定と動物、昆虫

具体的には、そもそもアフリカがどこにあるのかわからない子どもも多いのではと思い、まずはカメルーンの場所について紹介しました(写真2)。

主人公としてククルくんとベミスちゃんという兄弟



写真1 参加者の様子



写真2 カメルーンはどこか

に登場してもらいました。森のなかではモングルというクズウコン科の植物で作った小屋に住みます。移動する時、家の材料はすべて自然に還ってしまう、という移動生活に適した生活をするという話をしました。

そして、森の中の動物や昆虫の話、それらと人間の暮らしの関わりのお話をしました。森のなかでは大なり小なりいろいろな動物がいます。たとえばサスライアリというものがいて、これに攻撃されると怖いことがあるという話も紹介しました。みんなが森で好物なのはハチミツで、半日くらいかけて木を切り倒して採ります。この話をするさい、たいへん時間をかけて男たちが斧で木を切り倒す様子を映像で示しました。実際のハチミツ採集がいかに大変な仕事であると同時に楽しみをもたらすものかを伝えたいと思ったためです。

また動物を獲るためのワナの紹介をしました。バカ・ピグミーのハンターたちは、現在は主に「はねわな」で猟をします。ククルくんも森のなかで遊びながらそれ



写真3 サスライアリに反応する子ども



写真4 フィールドノート

を身につけていきます。

アフリカの熱帯雨林には、日本にはいない動物もたくさん見られます。そのなかでも、ダイカーというカモシカに近い動物がもっともよく獲れる獲物のひとつです。その解体を手伝う場面について説明しました。このようななかで、狩猟が彼らの生活ぜんたいの基盤となっている生き方であることを説明し、トゥーマと呼ばれる熟練ハンターの話もしました。そしてここから、バカ・ピグミー族の社会ではどのように子どもは大人になってゆくかという内容に入っていきます。ゾウ狩りは現在禁止されていて違法になってしまっているのですが、昔はゾウのお腹の下に入って大きな槍で殺した話などをしました。また、夜の森は真っ暗なので、どのような虫の音がするか、部屋の電気を消した状態で現地録音の音を体験してもらいました。

### 精霊ジェンギとの出会い

その後バカ・ピグミーの人々が信仰している精霊の話をしました。森に棲む精霊というものが出てきて、大人になる過程でそれに出会わないといけないという話をしました。そこで、ククル君のところから「儀礼に来てください」という招待状が届いたという設定にして話をしました。森のなかでダイカーの子どもを見つけて遊んでいたククル君が、逃げ出したダイカーを追っている間に冒険をする。ゾウが歩いた跡にできる道を通ったり、キノコを見つけたりする。そのキノコ採りに夢中になっているところで、ふと見るとゴリラの糞がある。ゴリラとの出会いを描写して、やり過ごすさまを描きました。なんとかダイカーも見つかり無事にキャンプに帰り、一件落着きという話です。そのあと村に帰ってジェンギという精霊儀礼に彼が臨んだというオチにしたわけです。当日の流れは以上のようなものでした。

### 参加者の反応

参加者の反応としては、物語全体というよりも、具体的なこと——サスライアリやハチミツを採るために木を倒すところなど——や、直接的な刺激、感覚的な刺激に子どもたちは反応していました(写真3)。また、気になったものの絵をフィールドノートに描いてもらいました。毛虫やサスライアリ、キノコなどをノートに描いて、それをもとにいろいろな話しあいをして盛り上がりました(写真4)。

### 設定したテーマと議論の結果

グループワークで設定したテーマは三つです。冒頭で好きな動物と嫌いな動物を挙げてもらいました。そしてシナリオ中間の夜のキャンプや精霊儀礼の話に移る前のところで、アフリカの森の暮らしと自分の暮らしとを子どもたちに比較してもらいました。そしてこれらがすべて終わったあとで、日本では神社のお祭のような、儀礼のなかでカミと出会う仕組みはありますが、人間以外のすごい存在と生きながらに出会う機会は限られていると思いますので、そのようなものとしてどんなものを思い浮かぶかについて、グループワークで議論してもらいました。

結果、さまざまな「人間よりすごいもの」が出てきました。自分がノートにとったものをベースにして、「サスライアリは小さいが大きな動物もかみころす」など、ワークショップの前半の内容を踏まえたものがありました。「木や風や土や水が偉大である」というものもありました。また、「人間はとべない、ゴリラは人間よりあたまがいいかもしれない、魚はずっとずっと泳



写真5 集合写真

げる」から「鳥、ゴリラ、魚がすごい」など、ユニークな答えを挙げてくれる子どもがたくさんいました。

### 今回WSの自己採点

ワークショップの自己採点をする、飯塚さんからいただいた一つの課題、「それぞれの自然環境に根ざした暮らし方と自分たちの比較」という意味ではある程度成功したかと思えます。しかし「心や価値観にふれる」という点では、そこまで伝わらなかったという気がします。

### 臨場感の演出

よかった点や反省点もいくつか考えました。はたして、森での発見の魅力を伝えられたかどうか。森の民と呼ばれる人たちと森歩きをすると、いろいろとおもしろいことがあります。そういったアフリカの森での発見について、さまざまな音や映像(全部で10個くらいのファイルを使いました)を使って紹介しました。臨場感のあるかたちでプレゼンテーションをしたつもりです。参加者はそれを反映して、感じたことや見たことをノートやワークシートに書き込んでくれました。

### 知識伝達の過重

一方で、地域研究者として森の細かいディテールを伝えたいという気持ちが先走ってしまって、前半での森の自然史やそこに住む人たちの暮らしぶりの紹介に時間を費やし過ぎてしまい、とくに後半の精霊儀礼とのつながりの部分への時間配分が足りなくなっ

てしまいました。そのために、全体としてメッセージがわかりにくくなってしまったことが反省点として挙げられます。また、たとえば「木に板根が生えていますが、それはなぜでしょうか」といったクイズもしましたが、そういった知識を伝える部分に偏重してしまっただけでも良くなかったかなと思っています。

### カメルーンの子どもたちに伝えたいこと

ワークショップ終了後に、今回のワークショップの成果をクルル君など出演してくれたカメルーンの子どもたちにどのように伝えたらよいかを考えました。日本の子どもにカメルーンの森の生活を使って学んでもらうだけではなく、逆に日本の子どもたちの生活をどのようにむこうの子どもたちの学びや好奇心に繋げられるかを考えました。そこでふと気づいたのは、自分自身が日本の子どもの世界にまったく無知であるということです。今回のワークショップへの参加は、自分の思考や生活のゆがみにも気づかされる良い機会になりました(写真5)。

# 森でゴリラに会ったら、どうする？ シナリオ

2013年12月7日実施

大石 高典(総合地球環境学研究所プロジェクト研究員)

WSシナリオ開発……大石高典・飯塚宜子／進行……大石高典

ねらい…… ゴリラや森の精霊とバカ・ピグミーとの共存関係から、「人間の力を越えたもの」と人間との関係性を感じとる

こんにちは。私は、きょうこれからみんなと一緒に地球探検にでかけるオオイシタカノリと言います。よろしくお祈いします！今回の探検隊のテーマは、「森でゴリラに会ったら、どうする？」です。

2. では、さっそくワークショップをはじめます。みんな準備はいいかな？

3. 今日の目標は、アフリカのカメルーンという国に住んでいるバカ・ピグミー族の兄妹、ククルくん、ベミスちゃんといっしょに熱帯雨林を探検することです。

4. 探検に出かける前に、みっつの約束をお願いします。ひとつ、他の人がしゃべっているときは、お話を聞いてあげてください。ふたつ、わからないことができたら、どんなことでもよいですから手を挙げて聞いてください。みっつ、探検の途中でも質問は大歓迎です。

5. では、はじめましょう。みなさん、それぞれ班別の机に座っていると思います。周りのお友達と自己紹介をしてください。まず、名前と学年、どこから来たのかを教えてください。それから、好きな動物と嫌いな動物をみっつずつ挙げてみてください。時間があれば、なぜその動物が好きなのか、嫌いなのかも話し合ってみてください。

2

ワークショップを  
はじめるよ！

3

きょうのもくひょう

カメルーン(バカ・ピグミー)の  
きょうだい  
ククルくん、ベミスちゃんといっしょに  
もりをたんけんしよう！

4

やくそく

- ほかのひとはなしをきこう。
- わからないことは、てをあげてきこう。
- しつもんもだいかんげい！

5

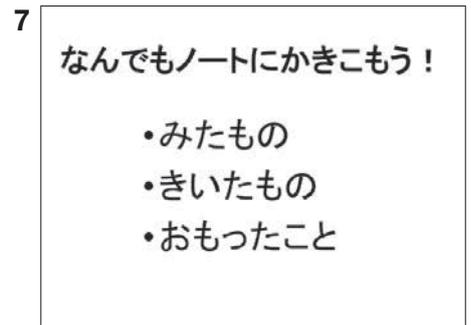
みんなではなそう

1. なまえ がくねん
2. どこからきたの(小学校)
3. すきな動物(どうぶつ)3つ
4. きらいな動物を3つ

6. わたしも自己紹介をします。わたしは、小学生の時にはまった魚つりがきっかけで人と自然の関係に関心を持つようになり、大学院にはいってからアフリカの森に通うようになりました。これまで12年間、日本とアフリカを行ったり来たりして過ごしてきました。



7. これから、アフリカの森のなかで出くわすいろんなものをお見せします。見たもの、聞いたもの、そして思ったことがあったら何でもノートに書き込んでください。私たちフィールドワーカーは、野外に出かけて、観察したことをノートに書き留めるのが発見の第一歩です。その場で感じたことは、書きとめておかないとすぐに忘れてしまいますが、ノートに書きつけておけば後で簡単に思い出出すことができます。



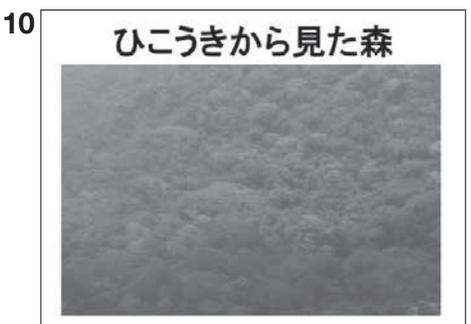
8. 今日お話しするのはアフリカのお話です。この世界地図で、アフリカがどこにあるかわかるかな？日本はここだよ。



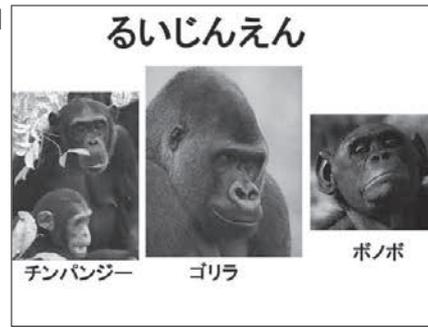
9. アフリカには50か国以上の国があります。そのなかで、ククルくんとベミスちゃんが住んでいるのは、カメルーンです。カメルーンは、アフリカの中西部にあります。北がサバンナと沙漠、南が熱帯雨林です。



10. これは、飛行機から見た熱帯雨林です。ももことした植生が続きます。



11. アフリカの森には、チンパンジー、ゴリラ、ボノボという3種類の類人猿が住んでいます。かれらは、私たち人間の親戚にあたります。



12. さあ、森に出かけるぞ。森の中には木材伐採会社がつくった林道が通っています。



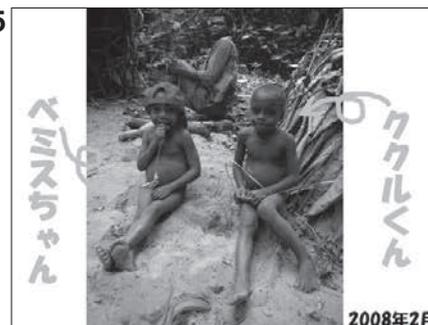
13. 森のなかにいっぽ足を入れると、巨大な木があちこちに生えています。木の根っこが出っ張っているけど、これはなぜだかわかりますか？ 板根といって、土壌の薄い熱帯林の中で木が倒れないように支えているのです。



14. この森には、バカ・ピグミーと呼ばれる狩猟採集民が住んでいます。森で狩りをして動物を捕まえたり、植物採集をして暮らしをしてきました。



15. ククルちゃんとベミスちゃんは、バカ・ピグミーの兄妹です。ククルちゃんは8歳の男の子、ベミスちゃんは6歳の女の子です。これは、森のキャンプでお父さんと一緒にいるところ。



16. バカ・ピグミーのこどもたちは、子どもどうして遊びます。男の子、女の子に分かれて遊ぶことが多いです。どんな遊びがあるのかな？

16

### こどもどうしてあそびます



17. ちょっと、この音を聞いてみてください。何の音でしょう？ 当ててみて。(月)

17

### なんの音でしょう？

音1 

音2 

18. 答えはね、こどもたちが出していた音遊びです。何人かで鼻をつまんだり、手や口を鳴らして音を合わせてゆきます。

18

画像省略

19. 音楽が好きなのは、こどもだけではなく、バカ・ピグミーは老若男女問わず歌と踊りが大好きです。夜になると、太鼓を叩いて女性たちが歌を歌い、精霊を呼び出して踊りが始まります。(月)

19

### うたとおどり



20. つぎに、森のごはんについて紹介します。右のお皿にごはんになる食べ物、左のおさらにおかずになる食べ物が載っています。何だかわかるかな？ 答えは、右のお皿がバナナとキャッサバ芋をふかしたもの。左のお皿は森でとれたモセレレと言うきのこのシチューです。

20

### ごはんとおかず



21. これがさっきお皿の上に載っていたバナナです。日本にもよく似ている植物があるけど、知ってるかな？(答え:バショウ)プランテンバナナと言って、主にお料理に使います。

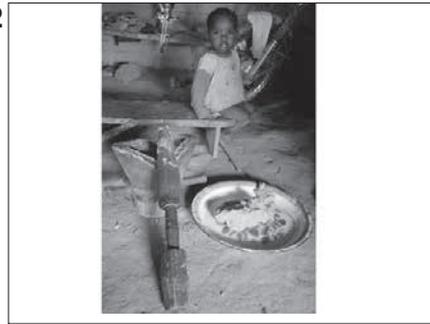
21

### 料理バナナ



22. プランテン・バナナは搗いて、お餅のようにして食べることもできます。あかちゃんの耳たぶくらいの堅さのものが最高においしいです。

22



23. 次にどんな家で暮らしているか、見てみましょう。この写真は、バカ・ピグミーたちの森の中のキャンプの風景です。焚き火から煙が出ています。この葉っぱで葺かれた丸いのがモングルと言って、家です。

23

### もりのなかのいえ: モングル



24. モングルはなんでできているか？ この葉っぱは雨を通さなくて丈夫なので、家づくりには一番大事なものです。1枚の大きさはどのくらいでしょうか？(答え:おおきいものは新聞紙の半分くらいになります。)

24

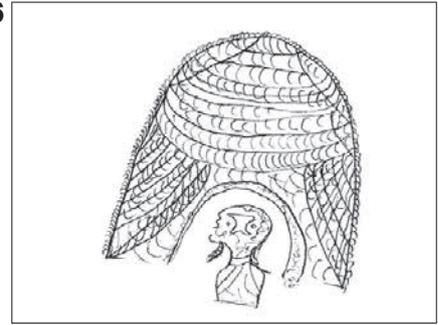


25. 細い木の枝で骨組みをつくって、さっきの葉っぱを引っ掛けてゆきます。家づくりは、半日もかからずにできてしまいます。

25



26. バカ・ピグミーの青年の自画像です。モングルの前にいる自分を描いたそうです。



27. モングルには、かならずあるものがあります。これはベンガとよばれる槍です。



28. 犬もいます。犬は、どこにでも一緒に着いてきます。

28 かならず、イヌがいます。



29. 森の中にはコワイ動物がいます。そのひとつがサスライアリ。誤って足を踏み入れたら噛みつかれて大変なことになります。(映像)

29 サスライアリにごちゅうい！

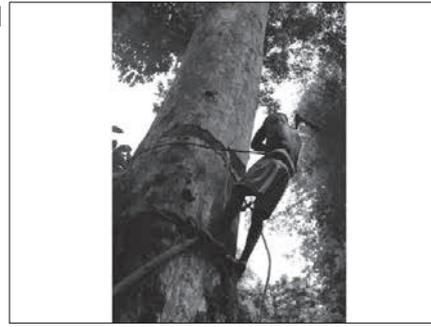


30. バカ・ピグミーたちがゴンゴロとよぶ大きなヤスデにも要注意です。この虫は、夜になると電車のような乗り物になって呪術師を載せ、人の身体に入ってきて悪さをするそうです。

30 ヤスデにもごちゅうい！



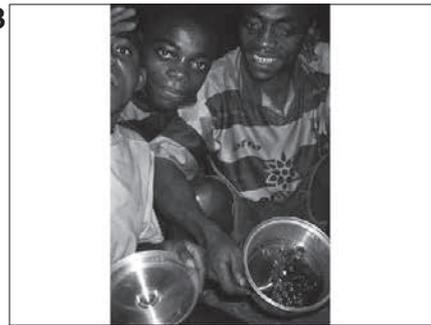
31. 男の人が木に登っていますが、何をしているところでしょうか？ 手に持っているのは斧ですね。



32. じつは、これは木を切っているところです。何人もの男性が交替しながら、何時間もかけて一本の木を切ります。「バシーン」木の倒れる音戸)なんのためなんでしょう？



33. 木を切り倒していたのはこれのためです。お鍋の中に金色の液がはいっていますがなにかわかりますか。蜂蜜です。蜂蜜をとるために木を切っていたのです。



34. バカ・ピグミーの人たちは蜂蜜が大好きです。「ロコロコ」というのは、バカ語で「甘い」と言う意味です。蜂蜜だけでなく、蜂の子入りの蜂の巣ごと食べてしまいます。



35. 森の中にはお料理につかう油がありません。どうするか？ 脂肪分の豊富な木の実を拾って、使います。30分から1時間もひろうと、木の実の山ができます。この写真は、その実を一つずつ割っているところ。



36. 山刀で木の実を割るとき、キンキン音がしていますね。木の実  
はそれだけ堅い殻に覆われているのです。(映像)

### ナッツをとりだす



37. 森歩きや、森での仕事の合間には、おやつがあります。37  
ここでは、バナナを焼いて食べていますね。

### おやつ時間



38. もう一つ、大事な採集物にヤマイモがあります。これは、森の38  
中での主食になるものです。マンホールのような大きな穴を掘っ  
て、掘り出します。

### ヤマイモほり



39. ここまでは、おもに植物採集の話をしてきました。次に動物狩39  
猟の話をしていきます。これが、バカ・ピグミーが一番大事な仕事だと考  
えていることです。

いろんな動物(どうぶつ)を  
狩りして食べます。

40. バカ・ピグミーの少年は、まずネズミ取りから習い始めます。40



41. 次にさまざまな小動物の狩猟を覚えていきます。これはオオネズミ。



42. ブルー・ダイカーと呼ばれるカモシカのなかま。

42



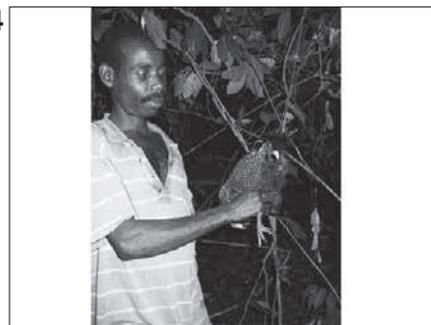
43. キノボリセンザンコウ。

43



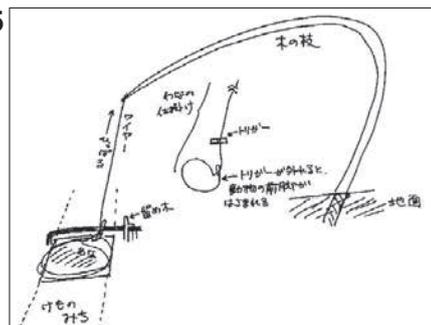
44. 野生のホロホロチョウ。「カンガ！カンガ！」と啼きます。

44



45. 今では、多くの動物は跳ね罠と言う罠で捕えられます。けもの道を見つけて、そこに罠を仕掛けるのです。

45



46. 大人に教わることなく、子どもたちは自分たちで跳ね毘獵の真似をして遊びます。



47. 動物を捕まえたら、どうやって解体するかも大事です。お父さんやまわりの大人を手伝って覚えます。



48. そうやって、だんだんいろいろな動物の狩猟ができるようになっていくと、名人ハンターと呼ばれるようになります。名人ハンターはタバコが大好きで、パイプでぷかぷかふかします。



49. バカ・ピグミーにとっての最大の獲物はアフリカゾウ。今は、自然保護のために狩猟禁止になっていますが、ゾウ狩りはハンターだけでなく、バカ・ピグミーのコミュニティにとって大事なイベントでした。



50. さて、森のキャンプの夜の様子です。真っ暗です。なにか音がしてきましたね。森のどこかで、ジェンギの踊りが行われているのです。



51. さて、ここまでカメルーンの熱帯雨林で、ククルくんやベミスちゃんたちがどんなふうに住んでいるのか、見てきました。お話をふりかえって、お友達やお父さん、お母さんと話し合ってみてください。すむところ、たべもの、あそびなど自分の生活とどうちがったかな？

51

### ふりかえってみよう

ククルくん、ベミスちゃんたちの森のくらしってどんなだった？

すむところ、たべもの、あそびなど自分とどうちがった？

52. 前半で、森には精霊が住んでいること、精霊を呼び出すためにみんなで歌ったり、踊ったりするということをお話ししました。じつは、森の中に住んでいる精霊は1種類ではありません。何十種類以上もの精霊が森の中に住んでいるのですが、そのなかでもジェンギと呼ばれる精霊が、もっとも力を持った存在だとされているのです。

52

### ジェンギ

53. ある日、そのジェンギからククルくんの手紙が届きました。クズウコン科の植物の葉っぱに、ラフィアヤシの葉鞘が一文字に差し込まれています。ジェンギからの招待状です。お父さんはククルくん、こんど森から村に戻ったら、ジェンギに会いに行ってもらいたい、と言いました。どうしよう？ 恐ろしいジェンギから招待されたククルくん、「だいじょうぶかなあー」と不安になりました。

53

### てがみがとどきました。



54. そんな気持ちで森のキャンプに戻ったククルくん。お父さんたちは、狩りへ。お母さんたちは魚とりへ。昼間のキャンプは、こどもばかりになります。きょうは、ベミスちゃんといっしょに、他のちっちゃん子たちといっしょにキャンプでお留守番です。つまらないなー、と思ったそのときです。

54



55. ククルくんの眼に、キャンプの近くを走ってゆくブルーダイカーの子どもが映りました。あれっ、待て待て！ ククルくんは追いかけます。ベミスちゃんもククルくんの後を追って走り出しました。

55

### ブルーダイカーのこども



56. がさがさ、ごそごそ、ブルー・ダイカーはなかなかつかまりません。ククルくんとベミスちゃんは、とげとげのつるが絡まっている大木の下を負けじとするすると通って追いかけてゆきます。



57. ぐんぐんダイカーの子どもを追ってゆくと、急に視界が開けました。おっきな穴ぼこがぼこぼこあいています。「やばいぞ、これはゾウが通ったあとだ。」ククルくんは、でもゾウのうんこのにおいを嗅いで、安心しました。1日以上前のうんこのようです。



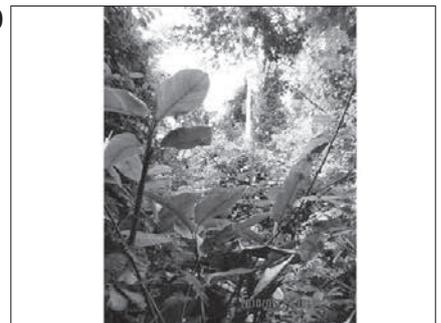
58. おそろおそろゾウ道をぬけると、見晴らしの良い森になりました。あのダイカーの子はどこに隠れてしまったのかな？ 耳をかさこそ、かさこそ。かさこそ、かさこそ。ベミスちゃんが指さしました。



59. いました、いました！ ククルくんがそーっと近づいていきます。ククルくんの手が後ろ脚に近づいたそのとき。

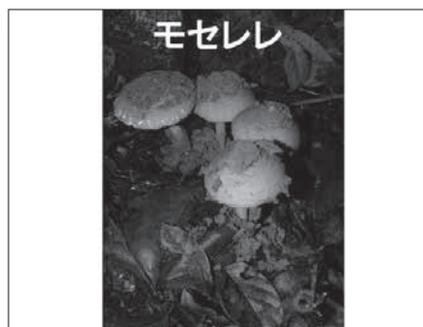


60. ビーっと啼いて、ブルー・ダイカーはアフリカショウガの繁みの中に消えて行ってしまいました。ククルくんががっかりしていると、ベミスちゃんが、ククルくんのTシャツを引っ張りました。その指差す方向を見ると……。



61. 「わわわ！ モセレレだ。」ベミスちゃんの指さす木の下に、シロアリキノコが丸く輪のようになって頭をもたげていました。モセレレは、柔らかくておいしいきのこです。これはしめしめ。収穫して、葉っぱにくるみます。

61



62. ダイカーの消えていった方向に進んでゆくと、こんどは別のきのこが生えています。モンドウングラです。赤い色が特徴的なこれもまたおいしいきのこです。しめしめ。ベミスちゃんの顔がほころびます。

62



63. 見渡すと、あっちにも、こっちにも、モンドウングラは一面に生えています。ふたりは、いつの間にかブルー・ダイカーのことも忘れて、一心不乱にきのこを摘んでいます。

63



64. ふと、ククルくんの手が止まりました。目の前には太くてくろい塊。ゴリラのうんこです。うーん、これは新鮮なうんこだ。ククルくんの頭に悪い予感がよぎります。

64



65. そのときです。ポコポコポコ…という音が降ってきました。ククルくんたちは、キノコに夢中になっている間に、ゴリラの群れのすぐそばにまで近づいていたのです。ふたりは思わず、地面に顔を伏せました。

65



66. 顔をあげると、じーっとククルくんたちをみつめる大きなゴリラ。ククルくんは頭がまっしろ。でも、ベミスちゃんを抱えて地面に顔を伏せ続けます。あ、やられてしまう。

写真省略

67. 何分か、何十分か、たったでしょうか。顔をあげると、もうゴリラはいません。かわりにすぐそばにあのブルー・ダイカーのこどもがいました。ククルくんは、そっとダイカーを抱き上げました。



68. 見上げると、かぜが強くなってきました。もうそろそろ帰りましょう。ククルくんとベミスちゃんは、きのこダイカーを連れて、急いでキャンプに帰りました。

かぜがつよくなりました



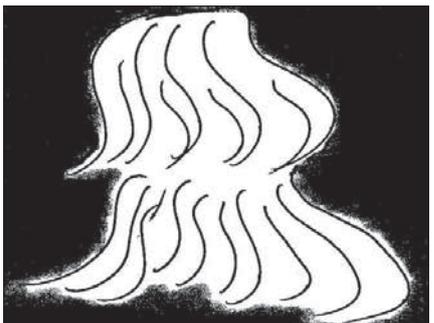
69. キャンプにつくと、もう夕方になっていました。みな、二人が迷子になってしまったのではないかと心配していました。森のなかでは、夕日は早く沈むのです。でも、ククルくんたちのお父さんはだまってふたりを迎えました。

ゆうやけ



70. 村に帰ると、ジェンギの祭りがはじまりました。ククルくんは、招待状をくれたジェンギに会いに行きます。ジェンギは、ククルくんを「殺して」から生き返らせます。ジェンギの祭りは男の子をハンターにするお祭りです。ゾウのようにこわくて恐ろしいジェンギの精霊。しかし、森でのゴリラとの出会いを経験したククルくんは、たじろぐことなくジェンギと対面することができたのではないのでしょうか。このように、森の中で生きた動物と直にふれあっていることと、ジェンギの精霊がバカ・ピグミーの人たちにとって力をもった存在であり続けていることには大きな関わりがあるのです。

ククルくんとベミスちゃんの冒険のお話はこれでおしまいです。ゴリラも、ジェンギも、バカ・ピグミーたちにとって、怖いけれども、大事な存在です。最後に、きょうのお話をふまえて、にんげん以外で、すごいなあって思うものを3つ考えてみてください。なぜそう思えるのかということも含めて、みんなで話し合ってみてください。



## トリップ3 森でゴリラに会ったら、どうする？ 参加者からのフィードバック

### ■当日ワークシート

#### ①好きな動物 嫌いな動物

- 好き：うさぎ、犬、ねこ 嫌い：無い(小3)
- 好き：犬、ねこ、トラ 嫌い：ゴキブリ、ハチ、毛虫(小3)
- 好き：トラ、ライオン 嫌い：ヘビ(小4)
- 好き：ライオン、北極クマ、パンダ 嫌い：ムカデ、ゴキブリ、バッタ(小2)
- 好き：パンダ、ペンギン、キリン 嫌い：ライオン、トラ、ゴキブリ、むかで(小2)
- 好き：サル、猫、カメ 嫌い：蚊、ゴキブリ、ムカデ(大人)
- 好き：犬、猫、ペンギン 嫌い：ネズミ、ヘビ、ゴキブリ(小6)
- 好き：ねこ、犬、ヤギ 嫌い：ねずみ、ゴキブリ(大人)
- 好き：白と黒の小鳥、青い蝶、鶴 嫌い：わに、へび、むかで(大人)
- 好き：トラ、パンダ、いぬ 嫌い：ライオン、オランウータン、チンパンジー(小4)
- 好き：ネコ、ゾウ、カバ 嫌い：へび、ムカデ、蚊(大人)
- 好き：パンダ、犬、コアラ 嫌い：へび、トラ(小3)
- 好き：オオカミ、ゴリラ (大人)
- 好き：ネコ、うま、カンガルー 嫌い：猿、ゴリラ、チンパンジー(小2)
- 好き だちょう、いたち、たぬき 嫌い：嫌いな動物は無い(6才)
- 好き：パンダ、きりん、ライオン 嫌い：へび(大人)
- 好き：ユキヒョウ、トラ、クマ 嫌い：へび、ゴキブリ(小4)

#### ②人間以外ですごいなあって思えるものを3つ考えてみよう。なぜそう思えるのかな？

- サスライアリ：小動物でもかみ殺す。モセレレ：シロアリのきんで生えてきた。木：とても大きくて倒れないように工夫している(小3)
- あり 人間も食べるから 機械 段ボールを作ったり、いろいろなものをつくったりするから。海 人間より大きい、いろいろな魚がいて楽しそうだから(小2)
- 犬 番犬や盲導犬などのいろいろな種類の犬がヤクにたつて凄と思うから。木、草 自然や緑を

守ってくれるから(小5)

- 鳥 人間は飛べない。ゴリラ 人間より頭がいい。魚 ずっと泳げる(小3)
- 法然院の庭にあった木のつる まるでリボンのようにねじれたり、くるくるした形でびっくりした！(大人)
- 木、風、土、水は人間がつくったものじゃないから。それらのモノに人間や動物は助けられているから(小3)
- ひょう、あざらし、鹿、おとせい、かえる、わし、犬、うさぎ、チーター、わに、ぞう、たーが、ねこ(6才)
- 太陽：日光は明るい、温かい。木(大きな木)：神木(神社にある)すらっと伸びていて清々しい。富士山：雄大。(大人)
- くも：ねばねばする糸が出るから。鳥：飛べるから。魚：人間は泳げないけど、魚はずっと泳げるから(小2)
- 水、太陽：無かったら人間も動物も植物も生きられません。時間：いつになっても消えない(大人)
- 水、風、地球(大人)
- 電気、太陽(小4)
- 食べもの：人間を大きくさせるから。学校：頭が良くなるから。地球：いろいろな国があるから。(小2)
- 食べ物 くも ちきゅう わくせい さし あり(小2)
- 太陽：朝が来る。暖かい。明るい。山：紅葉、新緑。クモ：どこに住んでいるのか分からないけど机の上に出てくる。こうじ：酒、醤油、味噌、無かったら困る(大人)
- チンパンジー：賢い 熊：恐ろしい、でかい。カラス：賢い(小6)
- 白いへび：昔から家の主だと聞かされたから。鳥(カラス)：何か考えてそうだから、飛べるから。カミナリ：自然の中で身近に怖れを感じるものだから。チンパンジー(大人)
- 海：人間が日々生活で汚した水を微生物など力を借りながら浄化し、人間に恵みをもたらすし続けてくれるから。土：木、草、花、食べ物を育む土壌。冬眠のねぐら(大人)
- 太陽：太陽があるから暖かい。何十万メートルも離

れているのに温かいし光も届くから(小5)

- 魚:海の中で暮らしているから。へび:水の上を泳ぐから。ムカデ:足の数が多いから(大人)
- あり:集団行動 犬:人間と動物の間で上手に行動する。木:生えている環境によって形が違う(大人)
- ジェンギー 子どもに葉っぱの手紙をくれるから(大人)
- 太陽、微生物(大人)
- チーター、太陽、火(小4)

## ■1ヶ月後のアンケート

①おぼえていること、心に残っていることはありますか。

- その国では虫を大切にする。ゴリラに会ったらじっとする(小2)
- 料理バナナが美味しそうだったけど、甘くないと言っていたので普通のバナナが食べなくなった。カメルーンは、行きたくないと思った。裸で生活してて、泥だらけになるのがいやだと思った。(小4)
- さすらいありが牛をも殺すこと(小4)
- ハチミツをとるのが春日(世界番付という番組)がやっているのとちょっと違うと思った。歯が痛そうだった(小6)

②クルルちゃんたちは「ゴリラ」のこと、どう思ってるのだろう？

⇒好き？ きらい？ ⇒ 会いたい？ 会いたくない？ ⇒ どうしてそう思う？

- 好きだけど、神様だと思ってるので、会うのは怖いので会いたくない(小4)
- わかりません(小4)
- 好きだけど、会いたくない(小6)

③クルルちゃんのここがすごい！ ところはどこ？ 自分のここがすごい！ ところは？

- 虫とか動物を怖がらないところ(小4)
- 自然の中で生きていること(小4)
- ゴリラに会っても、逃げたり攻撃したりしないで、じっとしていたところ(小6)

自分のすごいところ

- 特にない(小4)
- 特にない(小6)

④「森の中で暮らすクルルちゃん」と、「森から離れた都会に住むクルルちゃん」、どちらが「いいな」と思いますか。どうしてですか。

- 森
- 森の中(小4)
- 都会に行ってしまったらバカ族がなくなって、歴史が終わってしまうから(小6)
- どちらでも
- どちらもいい(小2)
- 都会
- 不潔な生活をしている気がするから(小4)

⑤クルルちゃんに、メッセージがあれば教えてください。

- これからも動物と仲良くしてね(小2)
- 都会で住んだ方が、基本的な生活ができるから、そうの方がいいよ(小4)
- 幸せに暮らしているなら、無理に都会に住まずに森での生活をつづけてください(小6)

⑥何でも感想があれば、自由に書いてください。

- あまり覚えていません。ごめんなさい(小2)
- 僕は、カメルーンの人が都会に行ってしまうことになったら…と考えると、甲子園球場がドームになるのは嫌だということを思い出しました。(甲子園球場の炎天下でやる野球の歴史がなくなってしまうと思うからです)(小4)
- カメルーンに都会があるのかな？(小4)
- 神様の絵が水木しげるの漫画みたいだった。オンティンユちゃんの時(トリップ1)のように、もう少し体験を増やしてほしい(話は時間がたつと忘れてしまうので)(小6)

## ■感想

- 先日、トリップ1のワークショップは感想を書きましたが、カメルーンに関しては、モンゴルでいろいろ体験できるんだと思っただけに、ちょっと話が盛りだくさんすぎるなあという印象でした。後日、アンケートに答えようと思っても、こちらは、「あんまり覚えてない」と言われ、モンゴルの方も、やっぱり、ミルクティや衣装を着たことなど、体験の部分はしっかり記憶に残っていました。えらいもんですね(大人)

## トリップ4 ワークショップ『ボクはオオカミ族』の実践を通して

山口未花子(岐阜大学地域科学部助教)

トリップ4では北米先住民のトリングットおよびカスカの伝統文化や自然との関わり方を、アデア君という男の子の視点から紹介し、日本の子どもたちに自然との深いかわりを持つ文化があることを知ってもらうと同時に自分との比較を通じて考えてもらうという趣旨のワークショップを行った。

報告者は文化人類学の視点から、北米先住民と動物との関係についてフィールド調査を行ってきた。北米先住民は伝統的には狩猟採集民であり、北方という環境に適応することで人類の活動範囲を広げていったと考えられている。さらに現在の生活においても、食糧や現金獲得のために動植物を狩猟採集することは日常的に行われており、そこには伝統的な価値観が再生産されながらも維持されていることがわかっている。こうした知見を、ワークショップの対象となる小学生向けのプログラムにどのように反映させることができるのかという点が課題となった。

### 当日のプログラム

#### イントロダクション

ワークショップ当日、どのようにプログラムを進行したのかについて説明する。まず初めに、飯塚さんからクリンギット族について及びワークショップの概要についての説明があった。具体的には、クリンギット族の説明と、今回のプログラムの主人公であるアデア君という男の子の紹介である。班ごとに分かれた参加者に、あらかじめ配布されていたワークシートで4つの質問、①名前と年齢、②魚と肉はどちらが好きか、③好きな動物はなにか、④自分の大切なものはなにか、に回答してもらい、班の中でその答えを発表し合ってもらった。(写真1)

#### 狩猟採集と近代的生活

ここで、飯塚さんから山口へとマイクが渡され、ワークショップの本題に入る。まずはアデア君の顔の写真などを見せ、カナダに暮らしてはいるが日本人に似ているのではないかという切り口から、北米先住民と日本人の祖先のつながりについて紹介したのち、ト



写真1 自己紹介の様子



写真2 動物の骨に触る子ども



写真3 ヤマネコの毛皮に触れる子どもたち

リングット族の現在の生活について、狩猟や採集を現在も活発に行っている様子を示した。この際、アデア君たちも食しているものとして、用意しておいたラズベリーのジャムやドライサーモン、薬草のお茶を参加者に味わってもらうとともに、実際にカナダで捕獲された動物の毛皮や骨(写真2)、ビーズ刺繍を施された皮工芸品などを参加者の机に回し、じかに見て触ってもらった(写真3)。また、こうした狩猟採集活動を通じてアデア君が「大地や水は自分の一部である」と考えていることを紹介した。

また、そうした活動をしながらも他方では、学校に通ったり車に乗ったり近代的な家に住んだりしてい



写真4 クリンギットの歌



写真5 ワークシートを書く子どもたち

ることを紹介し、現代の私達日本人の生活とも通じるところがある点も指摘した。

### オオカミクランとカラスクラン

そうした現代の生活においても、伝統的な考え方が維持されている事例として、オオカミクランとカラスクランという氏族制度があり、すべての人がどちらかのクランのメンバーとしてその規範に従っているということについて話をした。そしてこうした伝統的な価値観に沿ってコミュニティに人々を受け入れるときに歌う歌をドラムの伴奏つきで飯塚さんが演奏した(写真4)。

ここで、振り返りとして、「アデア君と自分たちをくらべて、ちがったところ、おなじだったところはどこか?」という問いかけをし、答えを紙に記入したのちに班の中で共有してもらった。

### アデアくんの大切なもの

次のセッションでは、アデア君が10歳のときに飯塚さんが「アデア君の大事なものを写真に撮って」と頼んで撮ってもらった写真を子どもたちに見せた。アデア君が大切に思っているモノは、湖などの「土地」をあらゆる風景、自転車、そして家に張ってあるポスターの「すべての木が切り倒されたとき、すべての川が汚れてしまったとき、最後の魚が獲られてしまったとき、その時はじめてあなたはお金を食べることはできないということを知りましょう」という言葉、木イチゴなどの植物であった。

さらにこの質問をアデア君に投げかけた2年後、アデア君12歳の年にも同じお願いをしたところ得られた写真として、漁網を作る道具、土地をあらゆる風景、ビーズ刺繍の道具、サーモンをスモークしているところ、もスライドで参加者に見てもらった。

そのうえで、参加者各自がワークショップの一番初めにかいた「大事なもの」とアデア君の「大事なもの」

とがどのように違ったかを比較してもらい、それについてどのように考えたかを紙に書いてもらい、班で共有してもらった。(写真5)

### カスカ族の狩猟

ここまでは、トリンギット族のアデア君を中心に話をしたのだが、ここからは同じくカナダ北方に暮らす先住民でクリンギット族の隣人であり、報告者が長年にわたって調査対象としてきたカスカの文化にも枠組みを広げて話をした。これは自然と人との関係、特に超自然的な部分も含めてより深く説明することができるとの狙いからである。

ここではカスカとトリンギットに共通する伝統的な生業活動として、特に陸生哺乳動物の狩猟を取り上げて解説した。たとえばカスカの人びとはビーバーをライフル猟や罠猟で獲るのだが、そのビーバーがどのような場所に暮らし、木を切り倒してダムをつくり、川の流れを堰き止めるといった生態についてもよく知っている。カスカの人たちがこうした知識を生かして、冬になればこうしたビーバーの生息地である川や湖が凍りつくために、容易にアクセスできるようになり、簡単に罠でとることができた、というような一連の活動の様子を写真によって説明した。次に、ビーバー以外にも多様な動物種を狩猟の対象とし、殺した動物の毛皮や肉は無駄にすることなく利用しているというということを話した。

### ヘラジカの魂と再生

さらに、カスカにとってもっとも大事な獲物であるヘラジカの狩猟についても狩猟の様子を写真で示すとともに、解体に伴って行われる儀礼として、ヘラジカの気管を木の枝につるすというということについて解説した。カスカを含む北方アサパスカン諸族は、ヘラジカは殺されるために猟師の前に現れたのであり、気管を木の枝につるすことでそこに残っているヘラジカの

魂がまた皮と肉を身に着けて狩猟されに来てくれると考えているためである。すなわちカスカの人々は動物は人間に肉や毛皮をプレゼントしてくれているのであり、受け取った人間はそのプレゼントを大切に使い、感謝することでその動物もまた肉体を取り戻すことができるという思考を持つことによって狩猟の際に気管や骨などを森のなかにおいておくのである。

さらに、こうした思考はトリングット族とも共通するものであるという点についても解説をした。トリングットの人々は「土地には多くの種類の薬草が生えている、その薬草を食べるヘラジカを人間が食べることで人間は健康を維持できる。だから土地を健康な状態で維持することが一番大切なのだ」と話す。こうした言説の背景にも人と動物と大地が別々のものでなく、つながりを持った循環する生態系の一員であるという考え方があり、先住民の人々が動物を殺して食べるという行為を通じて自然や土地との結びつきを作っているのだ、という点について話をした。

### ボクたちは土地の一部

そして最後のふりかえりとしてまたアデア君に話をもどし、アデア君がただ狩猟や採集をしているだけでなく「土地や水は僕の一部だ」と話していたということについて、これはどういうことなのかを参加者に考え、議論してもらった(写真6)。そして最後に、報告者が持参した毛皮やビーズ刺繍の施された皮製品をそれぞれ手に持ってもらい、記念撮影をした(写真7)。

以上がプログラムの概要である。当日は単にスライドを見せながら話をするだけでなく、トリングットの人々と同じものを食べてもらったり、現地から持ってきた動物の毛皮や骨、工芸品に触れてもらったり、歌とドラムの演奏を披露するなど、実体験を交えたワークショップとなった。特に動物の毛皮や骨は、報告者が現地の古老から動物に関する知識を学ぶ際、「クズリの噛む力が強いのは骨がこのように入れ子状態になっているからだ」というように実物を使って教えられたということもあり、現地の人が知識を学ぶ様子を追体験させるという目的があった。

## 設定したテーマを北米先住民の事例からどのようにアウトプットしたか

### テーマ①——それぞれの自然環境に根差した

#### 暮らし方と、自分たちの暮らしの比較

それぞれの自然環境に根差した暮らし方、の事例と



写真6 話し合う子どもたち

しては主に狩猟採集についてとりあげた。トリングット族、アデア君がフィッシュキャンプでサケを獲ったり、木イチゴ類を採集したりする様子、カスカの猟師がビーバーやヘラジカを狩猟する様子、といった、狩猟採集の現場を具体的に説明した。一方で、先進国であるカナダの市民という側面も持つ先住民の現代の生活や、モンゴロイドとして日本人と共通のルーツをさかのぼれること、そしてアニミズム的な世界観など日本文化との共通の基盤についてもところどころ触れることを心掛けた。このことによって、かけ離れた作り物のような世界としてカナダ先住民の生活や文化を見るのではなく、自分たちとのつながりを感じてもらえる仕掛けを作った。これは主人公として、参加者と同じ世代のアデア君を登場させた理由でもある。

他方で、狩猟などの活動や、超自然的な自然とのつながりという点においては、必ずしも共感することのできない部分があることも想定した。そうした差異を感じてもらい、その違いがなぜなのかという点についても考えてもらえるように、アデア君自身が自然の中に身を置いて、積極的に活動している様子も紹介した。

### テーマ②——それぞれの地域の人々の心や価値観に触れる

テーマ①で挙げたような狩猟採集活動の背景に、動物とのつながりを象徴するクラン制度や「土地や水は自分の一部」という言葉、動物霊に対する儀礼である気管の掲揚のような、自然とのつながりを維持しようとする思考があるという点についても説明を加えた。こうした活動と思考のセットによって、動物や植物、大地や水との強いつながりを感じながら、それらの資源を利用するという生活が成り立っているというところまで理解できるような示し方をしたつもりである。



写真7 集合写真

## 当日の親子の様子

### モノの力と使い方

全体を通して、参加者は話をよく聞いてくれ、質問を投げかけた際もよく反応してくれ、ワークシートへの記入もそれぞれ対応してくれていたという印象である。特に、子どもたちの反応が良かったのは、話をするだけのときよりも、実物である毛皮や工芸品、骨などを見せたり、太鼓や歌を実演したときであった。これはその場の盛り上がり方を見た感じや、書いてもらった感想を読んでも非常に印象に残っていたことがうかがえる。ただし、歌やドラムの演奏についてはこちらで時間をきめられるが、モノを見せた場合、こちらが次の話にうつろうとしても子どもたちがものに夢中になって、話を聞いてくれなくなってしまうような場面もあった。したがって、モノの出し方や、使い方はどのようにすれば効果的であるかについてももう少し考える必要があると感じた。たとえば、話をしている際には前で見せるだけにして、終わった後で触ってもいいという時間を設けるなど工夫が必要かもしれない。

### 子どもの集中力のために

もう一点あげられるのが、やはり途中で集中力が切れてしまう子どもがいたということである。試験的なワークショップであったこともあり、幅広い年齢の子どもがいたという点もあると考えられるが、内容が少し難しかったり、紙に書く作業が多かったり、時間が少し長かったということがその要因であると推測できる。プログラムを作成する段階では、今回のワークショップは漠然と小学生くらいの子どもの想定していたのだが、もう少し聞き手の属性にあわせて構成や時間の長さを調整する必要があることを感じた。また、長引いた原因として、トリンギットとカスカという二つの民族を取り上げたのだが、内容をすっきりさせ時間を短縮するためにはトリンギットだけの事例を取り上げるプログラムの開発などが必要なのではないかとも感じた。

## テーマは達成されたか

参加者から寄せられた感想を読むと、こちらが用意したプログラムの内容や、テーマについて理解してくれているようである。たとえばテーマ①「それぞれの自然環境に根差した暮らし方と自分たちの暮らし方との比較」についての感想として、「アデア君にはカナダの自然のなかにいるのが合っているし、そういうところがいいと思う」という声がある一方「でも、ちょっと自分にはできないかもしれない」という声もあった。どちらの声においても、昔からその土地に暮らしてきた人たちの自然との共存の様子については価値を認めたいうえで、それを自分と比較したときに生まれるような視座であることから、プログラムの内容をくみ取ってもらえたのだと考えられる。

ただし、感想にはこちらが意図していなかったような内容も書かれていた。たとえば「歌が面白かった」、「〇〇族というのがあるのが不思議だった」というように、自分の印象に残ったことを挙げてくれた参加者も多く、なかでも特にこの歌とクランに関する感想は多かった。そうした点では、こちらが意図しない部分に何か意味や面白さがあるのだということに気づかされたといえる。

また、テーマ②の「それぞれの地域の人の心や価値観に触れる」について考えるうえで、とても印象的な場面があった。ワークショップが終わった後に一人男の子が机に座ってずっと絵を描いていた。その絵というのが動物の骨の絵で、質問するとヘラジカの儀礼のシーンを彼なりに描いているということだった。ヘラジカの狩猟儀礼について強い印象を持ちながら、少々衝撃的なシーンでもある動物の殺害についてポジティブにとらえているようであった。他の子どもの感想の中にあつた「動物を殺すことは残酷ではないということにびっくりした」というものもあった。こうした感想からは、これまでの価値観に対して新たなものの見方を提供できたのではないかという一定の効果を読み取ることができるといえる。

その一方で感想文の中には「動物を殺すことは残酷なので、そのシーンは見たくなかった」というものもあった。これは動物をころす場面に触れたことのない子どもにとって、当然の感想であるともいえる。もちろん、報告者としてもプログラムを作る段階である程度見せる写真なども残酷さをあまり感じさせないも

のを選んだり、話し方に工夫を加えたりしたつもりではある。しかしそのうえで子どもたちがどう感じるかは、それぞれの子どもの持つ感受性によるということだろう。ただこうした感想があるということは、もう少しわかりやすい話し方や、そもそも動物を殺すことに重点をおくことなくプログラムを組み立てる可能性についても検討する必要があるということを示しているともいえる。その一方で、残酷なものもあるということについて知ったうえで、自分の考えを持ってもらうという点では、安全策をとって残酷なものや汚いものを隠してしまうということが子どもたちの多様な感じ方の幅を狭めることになりかねない。バランスが難しい問題であるだけに、今後検討する課題として挙げておきたい。

## 研究者としてこの試みをどう評価するか

### ワークショップによる「再フィールド化」

報告者はこれまでもワークショップや展示など、論文や学会発表以外の研究者以外の人に向けた成果の発表をしてきた経験がある。そうした取り組みをなぜするのかということにも関係するのだが、やはり文化人類学の研究内容やフィールド調査での経験というものは、決して研究者だけに理解できればいいというのではなく、幅広い人に公表する価値のあるものであると考えている。ヴィクター・ターナーなどが指摘するように、フィールドワークの経験を学術的な方法でしか発表しないことによって、生き生きとしたフィールドでの経験が生かされないままお蔵入りになってしまうのが大方の現状ではないだろうか。そうした点で、子どもを対象にしたワークショップというのは、フィールドの経験を活かしながら幅広く成果を発信するためのツールとして可能性を秘めているといえる。

また、展示に係わる実践をしている研究者の間ではすでに指摘されていることではあるが、論文などと異なり、ワークショップでは作り上げ実践するために場所や時間を共有するアクターが複数いるという点も重要である。誰かと何かをつくる、とは、たとえばワークショップを企画した飯塚さんと報告者という関係でもあるし、スタッフや当日の参加者でもある。こうしや他者との協働という過程を持つことによって、新しい視点が見えたり、お互いの技術を補い学ぶようなことが起こる。いみじくもそれはフィールドにおいて

研究者が経験していることでもある。そう言った意味では、こうしたワークショップのプログラムを通じてターナーの言う『再フィールド化』のような場面をつくりだすことができるかもしれない。

### 子どもたちの感性を押し広げる

もう一つこの実践を通じて感じたことは参加者の年齢がばらばらだったこともあるが、受け手としての子どもたちの多様性という点である。ある程度こちらの意図をくみ取ってくれる大人とは異なり、子どもたちは同じ話を聞いても、受け止め方は多様である。そのため私達が気付かないような視点を示してくれることもあった。現在の学校教育では、テーマに沿って正しい理解を導くよう指導するのが常道なのかもしれないが、むしろ、子どもたちの多様な感じ方を押し広げるようなところにこうしたワークショップの意義はあるのではないかと考えている。子どもたちにとって話の内容が100%理解できなくても、珍しいものに触れ、不思議な話を聞くことで、多様な世界の在り方があるのだということに無意識のうちにも気づくことができるようになるのではないだろうか。

### 自分へのフィードバック

今回のワークショップは報告者にとっても新しい経験であった。子どもを対象にするということで、こちらの意図を伝えるのが難しくなる半面、新しい視点で北米先住民文化を見ることができるようになったと思う。また、一人で作る論文や学会発表と異なり、多くの人との協働にとって作るということは、時間がかかったり説明するのが難しいこともあるが、新しい方法論や内容の普遍化を図れたのではないと思う。手探りで作業であったが、感想などを見た限りでは一定の成果が出せたように見える。もちろん、様々な課題が浮き彫りになり、今後の修正の必要があるものの、そうしたことに取り組む価値はあるのではないだろうか。また、大人向けのプログラムを子どもに応用するためには、大幅な修正が必要となるが、きちんと作られた子ども向けのプログラムであれば、中高生や大学生、大人向けにも応用することができるのではないかと感じた。今後は機会を見て報告者が教鞭をとる大学での授業などでもこのプログラムを実践してみたいと思っている。

# ボクはオオカミ族 シナリオ

2013年12月7日実施

山口未花子(岐阜大学地域科学部)

WSシナリオ開発……山口未花子・飯塚宜子／進行……山口未花子

ねらい……「人間は大地の一部、人間は水の一部」という先住民の言葉の意味を感じとる

## 1. 受付

パスポート形式の名札を渡し、カナダのページに入国スタンプを押す。

フィールドノートも一人一冊配布し、使い方はワークショップの中で説明するが、聞いたこと見たこと思ったことなど、何でも書くノートだと話す。

座ってもらう机番号を伝え(あらかじめグループ分けをしておく)、席についたらパスポートの表紙に、自分が「呼んでほしい名前」を書くよう伝える。

(音楽のBGMを流しておく。周りの北米先住民関係のグッズには自由に見て触れてもらえる)

2



3

オオカミクランのアデアくん  
先住民(せんじゅうみん) トリンギット族  
(写真略)

## 0:00 起 イントロダクション

2. こんにちは！ わたしは2年前に、アラスカとカナダに旅へ行った時、面白い彫刻を見ました。人間は動物より強いと思われていないように見えました。それから旅を続けていると、

3. アデアくんという、10歳のクリンギット族の男の子に会いました。アデアくんはオオカミクラン、オオカミ族で、隣に住んでいる女の子はカラスクラン、カラス族なんだと聞きました。

4. これがアデアくんの家族。お父さん、お母さんと弟と写っていますね。今日は、このアデアくんのことを皆さんに紹介し、様子を感じとってもらいたいと思います。

4

アデアくんの家族  
(写真略)

5. 今日の目標です。アデアくんとお話ししていると、アデアくんは自分が住んでいる土地や動物をととても大切に思っていることが分かりました。そのアデアくんの想いを感じとってみよう、というのが今日の目標です。

今日の進め方は、まずたんけんに出かける前に、グループで自己紹介をします。その後、アデアくんの暮らしの写真を見ながらクイズを出したり、グループで話し合ったりします。アデアくんの大切なものは何か、考えながら、クリンギット族の隣に住むカスカ族の様子も見てみます。そして、最後に全体を振り返ります。

5

## ワークショップをはじめます

◎今日のもくひょう  
アデアくんの、大地や動物への  
思いを感じとる

◎すすめかた  
・はじめまして(自己紹介)  
・アデアくんの暮らし ・大切なもの  
・狩りのようす ・ふりかえり

6. 今日の主役はみなさんです。楽しんで、積極的に、よく皆の話を聴いてください。自分の心の声にも耳を澄ませて、聞いてみましょう。でも、無理はしないで。無理と思ったら言ってください。

7. それでは山田先生に挨拶とフィールドノートの使い方の説明をして頂きます。

(●日付と場所を最初に書く ●聞いたこと、見たこと、考えたこと、感じたことを何でも書く ●地域研究者は、その日のうちにフィールドノートをもとに文章を書く。みんなも日記を書いたらとてもいいと思う ●年月が経ってから見直したらとても面白い記録になっている ●外国のことを見たり聞いたりすることは、自分の「当たり前」をひっくり返すことにもなるなど)

スタッフにも、名前とふだん何をしている人か、一言ずつ自己紹介をしてもらいましょう。

8. グループで自己紹介をします。紙を配ります。この紙は4つに区切ってあります。1つ目に自分の名前と年齢を、2つ目に、肉と魚、食べるならどっちが好きか。3つ目に好きな動物、4つめに自分の大切なものが何か3つ、書いてみてください。書き終わったらカードをみせあいっこしながら、自己紹介をしてもらいます。では3分くらいでカードを書きましょう。(静かにする。邪魔にならないBGMを流す)

(様子を見て)書けましたか。書けたらグループの中で順番に読みあいっこしながら自己紹介してください。最初に話す人が決めにくれば、私に一番近い席に座っている人から始めて下さい。

### 0:20 承 アデアくんの暮らし

9. さて、それではアデアくんの暮らしの様子、見てみましょう。アデアくん、何してる？ なんだか、アデアくん、日本人に似てませんか？

10. カナダってどこにあるか知ってる？ ここがカナダ。行ったことある人いる？ 聞いたことある？

コロンブスがアメリカ大陸を発見した、と言われていますが、ヨーロッパ人が海を渡って、カナダやアメリカに来るずっと前から、この大陸に住んでいた人たちは、日本人に似ているアジア系の人たちでした。彼らのことを、最初にその土地に住んでいた人、と

### 6 今日のやくそく

- ◎主役(しゅやく)はみんな
- ◎みんなの話をよく聞こう
- ◎自分の心の声もよく聞こう
- ◎でも、ムリはしないでね

### 7 はじめまして

- ◎フィールドノートのつかいかた
- ◎スタッフのしょうかい

### 8 まず、自分のことをグループで話そう

1. 自分の名前(よんでほしい名前)とねんれい
2. 肉と魚、食べるならどっちが好き?
3. 好きなどうぶつは?
4. 自分の大切なもの3つあげてみよう

9 写真略

### 10 カナダ?



いう意味ですが、先住民と呼びます。それから、今から300年くらい前に、ヨーロッパの白人たちが、アメリカ大陸に行き始め、先住民の人たちの住んでいた場所にどんどん自分達が住む場所を広げて、今のようなアメリカやカナダのような国をつくりました。

11. アデアくんは今、カナダのこのあたりに住んでいます。



12. これがアデアくんの住む、アトリンという町です。アトリンに住む人々の約半分がクリンギット族の人々です。



13. これがアデアくんが通う小学校です。



14. 教室の中です。この壁に、何か貼ってあります。なんだろう。



15. カナダの国旗の下、この絵はなんだろう。実はこれは、オオカミとカラスの絵です。

クリンギット族の人たちは、オオカミ族かカラス族、どちらかに必ず属しています。お母さんがオオカミ族なら、自分もオオカミ族になります。



16. オオカミ族の人は、自分たちはオオカミとつながりのある一族だと思っています。



17. カラス族の人は、自分たちはカラスとつながりのある一族だと思っています。どちらも、強くて賢い動物です。ここからは人間も動物も同じ土地で生きてきた家族のようなものだと考えていることがわかります。お母さんがオオカミ族だと、アデアくんはオオカミ族になります。そして、アデアくんは、オオカミ族の女の人は結婚できません。カラス族の人と結婚します。日本の神話にも、カラスが出てきます。かみさまが、日本の国をつくるとき、神様のすすむ道を示したのが、ヤタガラスというカラスです。このカラスは、今、サッカーの全日本チームのユニフォームに入っていますね。



オオカミやカラスだけではなく、カナダ先住民の人々は、熊だったり、サケだったり、自分と特別な関係にある動物や植物を持っていることが多いです。この動物たちは、しばしば、人間を助けてくれたり、いろいろなことを教えてくれたりします。先住民の人たちは、決して人間が動物より賢いと考えていません。



18. アトリンには大きなみずうみがあります。皆もお肉や魚を食べるよね。アデアくんはお父さんとここでサカナを採ります。

19. アデアくんは肉を食べるのに、スーパーでも肉を買いますが、森へ行って狩りもします。これは、鹿やウサギ、ハリネズミ、ヘラジカという大きな動物など狩りに出かける時にアデアくんが乗るのりものです。アデアくんがとったハリネズミの針をもらってきました。触ってみますか？ヘラジカという大きな動物もとります。〈ハリネズミの針、毛皮やヘラジカの角に触れてみる〉



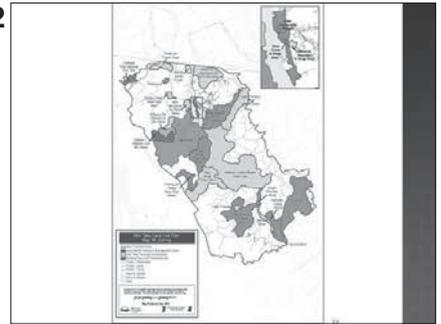
20. 動物をとる以外にも、木の実やベリーもとります。



**21.** もし、世界が全部、こんなビルばかりの都会になったら、動物や植物は育たない。アデアくんたちも、動物や、木の実や、ベリーをとることができません。



**22.** だからアデアくんたち、クリンギットの大人たちはカナダ政府と相談をしました。ずっとクリンギット族の人たちが動物や植物をとって食べてきた大切な地域、そこでは森や水を守ります。それから、木を切ったり飲物をとってもいい地域、などを決めました。



**23.** そんな、森や湖をしっかり守る土地で、アデアくんたちはキャンプなどをして、大人たちから昔からの伝統の知恵を、学んでいます。



**24.** これは、獲った魚をすぐに食べずに、ポプラの木でスモークして、冬に食べることができる保存食にしています。

たくさんサケがとれたときは、1週間くらい、サケをスモークするという暮らしをしていたそうです。火は、近くに住むコミュニティの人たちが、交代で見張ったそうです。スモークサーモンと、ベリーのジャム、食べてみますか？〈ドライスモークサーモンやベリージャムを食べ、薬草茶を飲む〉



**25.** アデアくんをとりまく人は、家族だけではなく、オオカミ族の人々、またカラス族の人々も、アデアくんと一緒に生きています。これはキャンプで、アデアくんとコミュニティの皆が、一緒に、大きな動物、ヘラジカをとってきた時のために、ヘラジカの肉を干す小屋を立てているところです。



26. トリンギット族の人々は、誰かがコミュニティに来た時、歌を歌って歓迎します。トリンギット族の人の歌は、必ず誰かの歌です、誰かに属している歌なんです。勝手に歌ったらいけないのですが、今日はオオカミ族のウエインさんに許可をとってきました。歌ってみたいです、皆も一緒に歌ってもらえたら嬉しいです。〈ドラムの演奏と歌〉

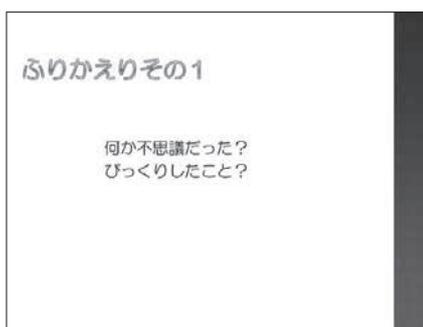


27. アデアくんたちは、自分の土地をととてもよく知っています。動物や鳥を大切にするし、鳥が食べる虫も大事にするし、動物や自分達が生きるために必要な木や森、水、そしてそれらがすべてその上に立っている大地を大切に、敬います。土地は自分の一部で水も自分の一部であると話します。



28. さて、アデアくんの生活、自分とどう違った？ 不思議だったこと、びっくりしたこと、ありますか？

3分くらい、考えてワークシートに書いてみてください。その後、グループで書いたことを1人ずつ見せあいっこして、お話ししてもらえたらと思います。〈グループで話す→それぞれのシートに書くという順序でもよい〉



0:45 転 アデアくん、カスカ族の人々の自然観、価値観に触れる

29. そんな生き方を、大人たちに習っているアデア君。そんなアデアくんの大切なものってなんだろう？ そう思ったので、アデアくんに、私のカメラを渡しました。アデアくんが大切だと思うものを撮影してくれる？ とお願いしました。そしたら写真をたくさん撮ってくれました。さて、アデアくんは何を写したのでしょうか。



30. 1枚目はこれでした。

30



31. 2枚目。

31



32. 3枚目。

32



33. 4枚目。何の写真？ アデアさんに、これは何って聞きました。33  
そうしたら、アデアさんは、これはランド。土地の写真だよって教  
えてくれました。



34. 自転車。

34



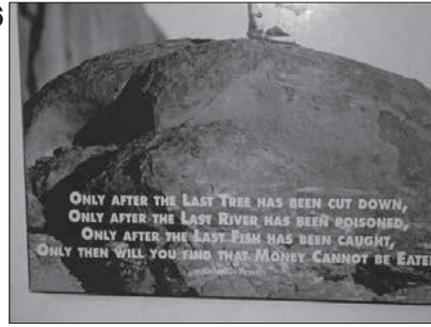
35. さっきの、動物を狩りにいくときに乗るバイク。

35



36. これは、アデアくんの家の玄関に貼ってあったポスターの下半分です。なんて書いてあるでしょう。

すべての木が切り倒されたとき、すべての川が汚れてしまった時、最後の魚が獲られてしまった時、その時初めて、あなたは、お金を食べることはできないということを知るでしょう。と書いてあります。

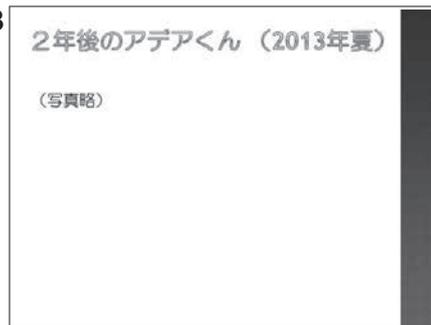


37. それから、ベリーですね。実がなっている植物の写真を撮ってくれました。



38. それから2年後の夏、またアデアくんにまた会いに行きました。

2年前にアデアくんが撮影したこれらの写真を見てもらって、アデアくん、これらは、今も大切？って聞いてみました。なんて言ったと思う？ アデアくんは、当たり前だ、大切に決まっていると言いました。その時、アデアくんは、昔からのやり方や知恵を学ぶための、キャンプにいました。それで、アデアくんに、2年前の写真の他にも、大切なものがあれば、それも撮影して、ってカメラを渡して頼んでみました。



39. アデアくんが新たに撮ってくれた写真です。魚をとる網。



40. そしてまた、土地の写真。

40



41. 昔から伝わる、ビーズを縫うところの写真。

41



42. とった魚をスモークしている写真。これらをとってくれました。 42



43. では、またちょっと振り返ってみましょう。自分の大切なものはアデアくんとどんなふうに違った？ アデアくんの大切なものを見てどう思った？ 感想を教えてください。

43

### ふりかえり2

◎自分の大切なものは、  
アデアくんと、どんなふうに違った？

アデアくんの大切なものを見て  
どう思った？ 感想を教えてください

44. ここからは、アデアくんのトリンギット族のとなりに住んでいるカスカ族の写真です。

44

同じ先住民で、世界の見かた、動物の見かた、自然の見かたなどがトリンギットととても似ています。

カスカ族も動物のことをよく知っています。これは、おじさんが山の上から、どこに動物がいるかなあって良ーく見て探しているところです。



45. ビーバーが、こうやってかじって木を切り倒して、

45



46. 川をせき止めるダムを造って、そのダムの中に家をつくることをよく知っています。



47. カナダはとても寒い国なので、冬になると川も湖も凍ってしまうので、このビーバーの家の場所を知っていれば歩いていくことができます。



48. そして罾を仕掛けて

48



49. ビーバーを獲ることができます。

49



50. ビーバーだけでなく兎や

50



51. オオカミもって、肉は食べ、毛皮は洋服などにします。

52. 一番のえものは大きなヘラジカです。

53. 皆さんはこうやって動物をころすところが残酷だとか、動物がかわいそうと思うかもしれません。

54. でも実は先住民のひとたちは、ただころすのではなく、このように殺した後に動物の気管や目玉を森の中にかえします。なぜだとおもいますか？ じつはこの気管のところには、動物の魂がやどっているからです。先住民の人たちによれば動物を殺すことができるのは動物が肉や毛皮を人間にプレゼントしてあげようと思うからなのだそうです。人間はプレゼントを大切につかい、さらに動物の魂の部分は森に返してお祈りをします。

そうすることによって魂がまた肉や毛皮をつけて元の動物の形になることができるのだそうです。

先住民の人たちは動物を食べることも、動物の力を自分の一部にすることだと思っています。トリンギット族の大人たちはこんな風に話していました。土地には多くの種類の薬草が生えている。その薬草を食べるヘラジカを人間が食べることで人間は健康を維持できる。だから、土地を健康な状態に保持することが一番大切だそうです。このように、先住民の人たちは動物を殺して食べることで、動物や土地とつながりをつくっています。

それがアデア君がはなしてくれたように、自分が動物や水や土地の一部だということの意味なのかもしれませんね。

## 1:10 結 ふりかえりとまとめ

55. ふりかえってみましょう。アデアくんの大切なものは自分の大切なものとどう違った？ アデアくんは、土地はぼくの一部、水はぼくの一部、動物は僕の一部、とお話してくれます。これってどういう意味だろう？

ワークシートに書いて、そして、グループで1人ずつお話しをしてみてください。〈グループで話す→それぞれのシートに書くという順序でもよい〉

最後に集合写真を撮りましょう。

感想、印象に残ったこと、おもしろかったこと、やってみたくなったことなどを書いてくれたら嬉しいです。



55

### ふりかえり

アデアくんは、「自分の土地や水や動物は、ボクの一部だ」と話します。どういう意味だろう？

## トリップ4 ボクはオオカミ族 参加者からのフィードバック

### ■当日ワークシート

#### 1. アデアくんの暮らしと自分の暮らし、違うところと 同じところはどんなところ？

- 一緒＝学校へ行っている／肉も魚も食べる／家族で協力してる／あやとりがある  
違う＝洋服／自分の食べるものを自分でとってくる／守護動物がある／言葉(小2)
- 一緒＝学校へ行ってる。顔似てる。洋服。おもてなしの心  
違う＝食材の調達方法／調理方法／自然いっぱい／動物信仰(大人)
- 一緒＝小学校に通う。家族が協力しているところ。  
違う＝自分たちの食べるものを獲る(大人)
- 学校に通っているところ、毛皮をとるところが似てました。  
日本では歌で人を歓迎しない(小2)
- 一緒＝髪の毛が黒い／学校に通っている／村や近所の人と協力して生活している  
違う＝狩りに行って肉を手に入れる。／カラス族、オオカミ族に属している。していない(大人)
- 一緒＝あやとり／顔／学校へ行く  
違う＝食べものを獲る／来た人を歌でもてなす／みんなで獲った動物を分ける
- 外で歌を歌うとは思いませんでした(小3)
- 狩りとかあまり日本ではしない。昔は獲ってたけど、今はやらないから困っている。鹿とかイノシシとか、森でいっぱいだから山中道に出てくる。／○族とか日本ではあまりない(アイヌ族(北海道)他……)(小5)
- 違う国から来た人を歌を歌って日本は歓迎しません。学校にカラスやオオカミの絵を飾りません(小1)
- 一緒＝子どもたちが学校へ行って学ぶ  
違う＝食料を狩りで手に入れる。他の生きものをいのちを余すところなく利用する。カラス族、オオカミ族といったくくりがある。獲物の無い時期に備えて食物を保管する方法(大人)
- 違う＝歌を歌って歓迎するのが、日本とは違うと思いました。  
一緒＝魚を捕るのは日本もしてるから同じと思う(小5)
- 違う＝日本はスーパーで食べものを買っている。カナダでは狩りをする。  
同じ＝カナダにもあやとりがある(小3)
- 違う＝歌は歌わない。建物がある。  
同じ＝洋服を着ているところ(年長)
- 違う＝学校、生活、魚の干し方、森、歌を歌うところ(小1)  
同じ＝顔??
- 違う＝狩り、歓迎の歌、生活のために森を残す  
同じ＝あやとり／歓迎の気持ち、学校、家族、顔(大人)
- 違う＝食べ物、動物を大切にしているところ(カラス、オオカミ)、自分たちの歌、自然に対する考え方  
同じ＝服装、学校、乗り物
- 違う＝食物の入手方法／日本はお金で買う(楽しみで時々煙で燻したりするけど彼らは生活そのもの)／カナダでは自分たちで身体を使って獲る。加工も自分たちです。  
同じ＝動物を図案化してワッペンにしているところは日本もやる。ヤタカラスは好きで湯飲み、小皿など持っている。(大人)
- 違う＝2つのチームに分かれている。学校にものをおくところが違う。獲った肉は煙で燻して食べる。  
同じ＝顔が似ている。(小2)
- 違う＝魚や肉を自分で狩ること／オオカミ族やカラス族があること。  
同じ＝学校(大人)
- 違う＝狩り：ヘラジカ、漁：スモークで長持ち、歌で歓迎、お母さんが同じ族(オオカミ、カラス)  
同じ＝学校、顔
- 違う＝狩り、スモークサーモン(長持ちするところ)  
同じ＝学校、顔
- 違う＝自然を自分の一部という考え方、魚・肉を自分で狩りに行く。動物全て一肉、皮などを利用する。オオカミ、カラスなどの守り神がある。食材を工夫する。  
同じ＝学校(大人)

#### 2. 自分の大切なものは、アデアくんとどんなふうに 違った？ アデアくんの大切なものを見てどう思った？ 感想を教えてください

- 土地を大切にしているところが私と違う。狩りの

道具を大切にしているところが違う(小2)

- 自転車が一緒だった(小5)
- わからない。生のサーモンの方が好き(小1)
- 狩りの道具を大切にしている。土地(自然)を大切にしている(大人)
- 土地が好きというところが似てました(小2)
- 異なるところ=暮らしに密着したモノ、無くては生活していけないもの、生命を維持しているものをととても大切にしている。同じところ=自然をすばらしいと感じている(大人)
- 自然の写真を撮ったのが大切なものとは思わなかった(小5)
- 自分のことだけではなく、周りの自然や土地を大事にしているのだなあと思いました(小3)
- 自分の大事なものはいのち、家族、地球。アデア君の大切なものは写真、自然、活動(小1)
- 豊かな自然、土地(大人)
- アデアくん とても自然、大地、動物を大切に敬っている。私たちも上記のものは大切だけど濃度が違う。  
自然との繋がりが深くて羨ましい。私たちの先祖もそうだったと思う。家族や友人たちとの繋がりは日常どうなんだろうな?(大人)
- 生きものや土地が大切なのだと思った、家やものではなくて自然が大切だとわかった(小2)
- 同じ:自分の住んでいる土地のりものものづくり—毛皮、スモークサーモン
- アデア君は自分の生活に関わるものが大切、自分の住んでいるところ
- アデアくんの大切なもの……自分の住んでいる土地、木イチゴ スモークサーモン  
自分の大切なもの……家族 友達 家  
気づいたこと……アデアくんの方が自然が好き、という感じ
- 土地、狩りの道具、自然 生きるために必要なものを大切にしている。私は……(大人)
- アデア君:土地、乗り物、木イチゴ、魚を捕る道具、手袋づくり、スモークサーモンづくり→生きていくために必要なもの 自分:山、飯、食べ物→趣味とか楽しむためのもの

### 3. アデアくんは自分の土地や水や動物は、ボクの一部だと話します。どういう意味だろう?

- 自分が食べたものは自分の一部になる。普段わたし

は生きものを食べているということを考えていなかった。(小2)

- 世界の人々がすべてそのような考えを持っていたら、地球は救える!(大人)
- 食べるための動物は自然からのプレゼント。/自分たちの食べる動物が健康でいることは、薬草や健康な土地のおかげ、大切に思う—自然、水、動物は「自分の一部」/体の一部を自然に還す—気管、目玉、足の一部など(大人)
- 循環の絵(小5)
- 健康でいられるのが嬉しい。水や動物のおかげでボクが元気でいられる。本当に生きかえてくれるのか不思議(小1)
- 大人たちが日々していることを子どもは自然に身につけていくものであろう。地産地消なんて改めて言わずとも、クリンギットの人々は住んでいる土地を大切にすることが良い草を生み、美しい空気、水をつくり、それらを食べる動物も健康に育つという自然の循環について揺るぎない信念を持って暮らしている。アデア君も親たちのしていることを手伝う中でそのような文化を受け継いでいる。魂についての考え方が、クリンギットの人々の根っこにあるように思いました(大人)
- 動物たちを殺して毛皮にするという考え方はすごいと思った(小5)
- ぼくはアデアくんが「一部」ということは命と同じくらい大切なんだなと思いました(小3)
- ちょっとヘラジカを殺しているところが怖かった。殺してほしくないと思った。動物を大切にしていなあとと思った(小1)
- 動物たち、生きものたち、どれもみんな大事。どれも何かを食べなくては生きられない→お互いの一部(大人)
- 確かに全ては繋がっている。でも日本に住む自分たちにはなかなか理解出きなこと。自然から切り離されすぎて。どちらが幸せなのかな。「人には魂がある」という話はよくされるのに、動物についてはそういうことがないな、と気づかされた(大人)
- 私たち日本人(都会人)と違って、自然と密着して暮らしているから、自ずから日常茶飯事に自然・大地のありがたさが実感できるのだと思う。自然=神さまを日々感じていると思う。魚の切り身、肉何gで入手する私たちとはすごく違うと思う(大人)
- 土地がなぜ大切なのか分かった。動物を殺すのが残

酷じゃないのがびっくりした(小2)

- 繋がっているということは大切だと思います。土地や水や動物はみんな繋がっているから、大切だと思います(大人)
- 土地や水や動物を自分の一部と考え方はすばらしい 共生・共に生きる。日本の「いただきます」「ごちそうさま」に通じる(大人)
- 何を食べても自分の身体の一部になるとボクも思います(小2) 食べ物には感謝をしないとイケないと思いました(下線本人、小2)」

## ■1ヶ月後のアンケート

### ①覚えていること、心に残っていることはありますか。

- アデア君の見る目が自分と違うことが印象に残っている(年長)
- アデア君と一緒に遊びたかった。また行きたいな。楽しかった(小1)
- 自分で食べるものを捕ってくるのはすごいと思った。森で狩りをした時に、獲物の気管を枝につるしておくなんて初めて知った(小2)
- アデア君がどれだけ自然を大切にしているか、ということがとても心に残っています(小3)
- むかえいれてくれる歌が面白かった(小4)
- 毛皮、動物を食べた後に目玉や気管を木にかけること、お母さんがカラス族なら生まれた子供もカラス族でオオカミ族ならオオカミ族になること。日本はお父さんの名字になることが多いから(小5)
- 歓迎の歌がすてきでした! 毛皮がふわふわで、手触りがよくて、びっくりしました(大人)
- 遠い異国の異文化に暮らす北米先住民の方々ですが、講義を聴いて、日本の私たちにも通じる場所があるようにも想い、親しみを感じました(大人)

### ②アデアくんのように、あなたも大地、水、動物、植物とつながっていると思いますか?

- はい。動物とかを毛皮にするから死ななくて安心する(小1)
- つながっていると思う(小2)
- いるとおもいます。例えば自分たちが飲む水は、川からひいてきたりしている水であったりするので、切っても切れない関係だと思います(小3)
- はい。私たちとつながっていると思います(小4)
- あまり考えたことはなかったけどつながっているんだな。と思った(小5)

- 今は、とってもつながっているように思えません。つながってはいけなはずなんです(大人)

- 日頃はわすれがちであると思います(大人)

### ③アデアくんの「ここがすごい!」と思ったところはありますか。自分の「ここがすごい!」ところは?

- 写真を綺麗に撮れるところがすごいと思った(年長)
- 自分でお茶がないからといって草を使って作る所です。私はボーイスカウトを頑張っています(小1)
- 自然に対する感謝の気持ちを持っているところがすごいと思った(小3)
- アデア君は勇気があるな、と思いました(小4)
- スモークサーモンとか作っていたこと(小5)
- ここから自然に感謝しているところ。自然からいただいたもののありがたさをよくわかっていること(大人)
- 先祖から伝えられた文化を大切に思っているところ(大人)

### ④「自然と仲良く暮らすアデアくん」と、「自然から離れた都会に住むアデアくん」、どちらが好きですか。どうしてですか。

- 自然と暮らすアデアくん
- アデア君らしいから(年長)
- アデア君は自然が好きだから(小1)
- 大切にしている自然がそばにあるから(小2)
- 自分にはそこまでの自然に対する気持ちはないけど、アデア君にはこちらの方があっていると思うから(小3)
- 自然の方が楽しそうだから(小4)
- 都会に住むストレスを今は多少知ってしまっているからでしょうか……(大人)
- 自然と仲良く暮らすアデアくん(大人)

### ⑤アデアくんに、メッセージがあれば教えてください。

- 自然がなくなったら困るから、大切にしないとと思ったよ(年長)
- アデア君と一緒にカナダに行って遊びたいです。会いたいな。ビーバーの毛皮がほわほわして気持ちよくて、私も欲しいな(小1)
- アデアくんがもっと大きくなった時に、大切なものが何か、また聞かせてほしい(小2)

- アデア君へのメッセージ。僕も自然を大切にしたいと思ったよ(小3)
- これからも頑張るってね!(小4)
- いつか狩りに連れて行ってください!(大人)
- 時代の変化に生活にも色いろんな影響があるか、とは思いますが、現在アデアくんが大切にしているものが、いつまでも守れるよう願っています(大人)

⑥何でも感想があれば、自由に書いてください。

- アデア君といたらとても楽しいと思った。また行きたい(小1)
- トナカイの角や、ヤマネコの毛皮を見たり、さわったりできて、とても楽しかった。1人ずつ守り神(動物)がいるのは不思議な感じがするし、少いうらやましい(小2)
- またこんな体験がしてみたいです(小4)
- 動物保護の観点から、狩猟などに反対する動きもありますが、自然の恵みをいただくことの畏敬の念をよく理解して、それにお返しするという循環型の社会があることを忘れてしまっている気がします(大人)
- 写真や毛皮、角、お茶、ジャムなど、五感を使って異文化に触れる機会になり、私も娘も楽しく、勉強になる一時でした。ありがとうございました(大人)

⑦他のトリップにも参加してくれた方に いろいろな自然やいろいろな暮らしを見て、感じたことがあれば教えてください。

- 日本と違った生活が色々あるということを知りました。日本の生活が普通だと思っていたけれど生まれ育った土地での生活が幸せに感じれたらいいなと思いました(小5)

■作文(2年生)

12月8日(日)僕はオオカミ族

昨日、『地球たんけんたい2』に行きました。私が聞いたのは、カナダの先住民のアデアくんの話です。この話に出てくる部族は、オオカミ族とカラス族です。どちらになるかという、お母さんの部族になるそうです。オオカミ族の人はオオカミと自分が関係があると信じています。

日本と違ってアデアくんたちは、自分たちの食べるものは自分でつかまえます。動物を殺しても魂は空中にただよっているから、空気をすいこむ管を残して木にかけておきます。すると、魂はその管を使って、また

元気になって血や肉、皮をとりもどせる、と考えているそうです。誰がこんなことを思いついたのかとても不思議に思いました。わたしは動物を殺しても怖いと思ったり、かわいそうに思わないように、そう考えようになったのかな、と思いました。

最後にヘラジカのツノや、ヤマアラシのはり、オオヤマネコの毛をさわらせてもらいました。ヘラジカの角はもってみるととても重かったので、その角を二つも頭についているヘラジカは、力持ちだなと思いました。オオヤマネコの毛皮は、とてもあったかく、ふわふわでした。寒い国に住む動物の毛皮はとても温かいと教えてもらいました。

私たちは狩りをしないから、生き物を食べていることを思い出さないけれど、先住民たちは、いつも自然を大切にしているのだと思いました。世界には知らないことがいっぱいあるのだと知りました。

## トリップ5 森林・林業体験の受け入れについて

岩井 吉彌(京都・中川文化的景観推進委員会委員長)

京都の西北の山間部にある90戸余りの私たちの村は、古くより北山杉を育てて林業を生業としてきました(写真1)。

私たちは昨年12月に、NPO法人平和環境もやいネット主催の子どもたちの森林・林業体験を受け入れました(写真2)が、その理由は二つあります。一つは、かねがね私が感じていたことですが、「人と森との関係をもっと密にしたい」という事、二つは、「こうした体験の受け入れを、私たちの村おこしの大きな柱にしたい」という事でした。以下、この二つについて少し詳しく述べてみます。

### 1 人と森との関係をもっと密にしたい

昨年マスコミにも大きく取り上げられましたが、集中豪雨によって京都の嵐山の街並みが洪水に見舞われて、大きな浸水被害を受けたのは皆さんの記憶に新しいと思います。しかし、あの洪水の一因が間伐不足による森林の荒廃にあると知る都会の人たちはほとんどいないのではないのでしょうか。

私たちの住んでいる上流部では、豪雨によって森林の表土が谷川や河川に流れ込み、河川のよどみを埋めて河床が上昇してしまいました。下流部でも同じことが起こったでしょう。さらに下流部では、森から流れ出た土砂が水流と混ざり合って水の体積が膨れ上がり、嵐山の洪水を引き起こしたであろうことも容易に推測できます。

あの時は、京都の真ん中を流れる鴨川も危機的な状態にあったことを考えますと、今後も、集中豪雨によって京都の町はたえず脅かされることになるでしょう。

洪水の防止のためには、川底を浚<sup>しゅんせつ</sup>渌したり堤防をかさ上げするといった方法もありますが、いずれも対症療法でしかありません。京都の町を守るには、森林から流れ出る土砂を最小限に抑えるといった根本的な体質改善が必要なのであり、京都の町は森林によって守られていることの認識が必要と思われます。そして今、林業を取り巻く状況が悪いために手入れがなされず



写真1 中川北山町



写真2 枝打ちを見る

に森林の荒廃はどんどん進行しているのです。

私たちの地域には、山林の作業をするために作られた幅3mほどの林道が国道から分かれて、あちこち山の中に伸びています。昼間は作業をするために車が時々通りますが、夜は全く通行はありません。それをいいことに、町からトラックでいろいろなものを捨てに来ます。布団や家具、建築廃材、車やオートバイの廃車などです。森がゴミ捨て場になっているのです。地元のお巡りさんの協力を得て捨てた犯人捜しをしても、すべて突き止めるのは不可能です。こうして森が汚れるのを見ていると、とても悲しくなります。

森には、木だけでなく様々なものがあります。私たちの子どもたちには、時間があればよく山に行って遊び、野イチゴやイワナシそれにクリや柿の実をとって食べていました。森はそういった多くの恵みを与えてくれるのであり、またその収穫はとても楽しいもので

した。

森の中に住む、シカやイノシシも、昔は捕獲して食料としていました。しかし今では、市販の鶏肉・豚肉・牛肉が好まれて、その結果、特にシカをとるメリットがなくなり、頭数が増えて色々な被害を及ぼしています。

ところで、少し歴史をさかのぼってみますと、農山村の人たちはもちろん都会の人たちでさえ、近くの山から切り出された木材を使って家を建てていたし、薪や炭の燃料源もそうでした。その結果、おのずと森の手入れや管理が行われて、森は洪水を防ぐ機能を十分に発揮していたのです。もちろん、森にごみを捨てに来る人もいませんでした。そして森から出てきた産物の多くが商品化されて、都会の人たちに供給されてきました。

以上のように、森はもともと私たち人間とは密接な関係を持ち、私たちの生活や社会に多くの恩恵を与えてくれたのです。

ところが、高度経済成長期を通じて、そのような人と森との関係は大きく変容してしまいました。

木材の多くは輸入材にとって代わられたし、燃料源は木材から化石燃料に移行しました。シカ肉に代わって、もっぱら家畜の肉が食べられるようになりました。山村の子どもでさえ、野生のイチゴや木の実には見向きもしなくなりました。この様に、人と森との関係はどんどん希薄となって、自分たちの生活と森とはどのようにかかっているのかがほとんど見えなくなってしまいました。森の有難味なんて全く感じられなくなってしまったのです。

経済が発展すると、どの国でも日本と同じようになるのだと私は思っていました。

私は、かつて大学に勤めていたころ、仕事で外国に調査に出かける機会が多くありました。その時には、外国の人たちがどのように森林とかかわっているのかに、常に興味を持って見ていました。はなはだ断片的ですが、その中で目にした事実をあげますと次の通りです。

- カナダでは、林野庁の役人が自分で薪割りをしている。
- シベリアのハバロフスクの人たちは、毎年、家族中で森にイチゴ狩りに出かけて、ロシア紅茶に入れるイチゴジャムを作って日常を楽しんでいる。
- ヨーロッパの山村の主なエネルギー源は薪であり、都会の人で暖炉を持っている人たちもやはり薪を用いている。
- アメリカの多くの人たちの楽しみはキャンプに出

掛ける事であるが、そのキャンプも、一か月もかけてあちこちの森の中でキャンプすることも珍しくない。

- ドイツの人たちは、森の中を歩くのが大好きで、マイナス30度の厳寒期でも家族中で森の中を歩いて楽しんでいる。
- ヨーロッパには、巨大な木材のスーパーマーケットが各都市にある。それは、市民の多くが日曜大工をして、自分の家を建てたり内装工事を自分でするのが一般的だからである。その結果、彼らは、木材の樹種を大変よく知っているし、森に生えている木の種類についてもよく知っている。
- ウィーンの郊外には広大なウィーンの森が広がっているが、ウィーンの人たちはこの森をとっても大切に、その森の中で楽しんでいる。ハイキング・乗馬・サイクリングをし、森の中にあるレストランやホイリゲ(ワインの居酒屋)でも楽しむ。森の維持管理のために伐採される木材は、建築材や燃料材として市民が利用している。

以上のことから、今まで私が思い描いていた先進国での人と森との関係は全くの誤解であり、両者の関係は大変緊密であることが分かったのです。

こうした森との関係を見ますと、なんだか気持ちがホッとしますし、私たち日本人もそうありたいと思うのは私だけではないでしょう。ヨーロッパでは石油よりもはるかにコストが高いにもかかわらず、あえて環境に優しい木材エネルギーを利用している理由がよく理解できるような気がします。

私たち日本人は、戦後、欧米先進国に追い付き追い越せと頑張ってきました。その過程で自然とかかわる部分を切り捨て、自然と離れたところで生活するのが近代的であると信じていたのではないのでしょうか。ところが、今、欧米の人たちの生活を見ますと、一見古いと思われる自然との関係をなお残しているのあり、人と森とは大変近い関係にあります。

確かに、欧米では一般市民の森への立ち入りが法的に認められているという違いはあるにしても、人と森との関係は日本とは大きく異なります。このことから、私たちはもう一度人と森との関係を見直し、森との関係を築く必要があるのではないのでしょうか。そのためには、森や林業の体験教育が重要な手段になるのではないかと、そして社会的にも意味のあることだと考えたわけです。

## 2 村おこしの一つの柱にしたい

私たちの村は、世界でも最も古い600年という歴史を持つ林業地で、茶室や数寄屋建築それに一般住宅の床の間に用いられる磨き丸太を生産してきました。ところが、近年、床の間よりもキッチンやリビングを重視した住宅が多くなってきて、床の間が減少して、その結果磨き丸太の需要も大きく減少しました。村としても、北山杉の林業だけでは生活ができなくなってきましたので、新たな村おこしに着手しています。具体的には、北山杉やその加工場を含めた村落の景観を売り物にして、外部からの来訪者を増やしてお金を落してもらおうことを計画しています。そのために、村おこしの先進地見学会や勉強会を何度も実施してきました。村落内ガイドツアーや、森林・林業体験をしてもらうアイデアもそのような中から生まれてきました。こうした、村おこし事業に対しては、次のようなことを期待しています。

- ①少しでも収入につなげる（森林体験では参加料をもらう）
- ②事業にかかわる住民の生きがいになる（参加者に教える喜び・楽しみ、老化防止）
- ③参加者からの情報入手と村おこしのヒントの吸収
- ④北山杉のファンづくり、磨き丸太の将来の市場開拓
- ⑤当村へのリピーターづくり

私たちは、これから村おこしによって、新しい挑戦をするわけですが、その中で多くの苦勞もするでしょう。しかしそれは、私たち住民のそれぞれの人生をより深くより豊かにするものと信じています。

今回受け入れた森林・林業体験は、私たちとしては二回目でしたが、NPO法人の目的と参加する子どもたちの顔ぶれを予想して、メニューについて色々と検討しました。特に配慮した点は、次の通りです。

- ①子どもたちが喜びそうなこと
- ②創造力をかきたてるもの
- ③地元で比較的容易に準備できる事
- ④子どもの安全性
- ⑤参加者と地元住民とができるだけ接触してもらう事

以上の条件で、メニューを企画して各メニューの担当を決め、協力してもらえる住民の方を募集しました(写真3、写真4、写真5)。今回協力してくれた人たちは、参加した子どもたちがどのように喜んでくれ



写真3 名人の枝打ち



写真4 細かい砂で丸太を磨く体験

るか最も気にかけていたようです。メニューの一つであった、山小屋で食べる昼食(山で働く人たちが、たき火をしながら魚の切り身を焼いておかず(=ひのさい)とする)の体験が、あれほど子どもたちに好評であるとは予想もしていませんでした(写真6)。また、いろいろな大きさや形の木片を使って、好きなものを作る木工メニューも大変喜んでくれたようです(写真7)。それを見ていたひとりの村人は、自分たちのグループでもあんなことをやってみたいと話していました。そして、子どもたちといろいろと交流できたことに喜びと満足を感じていたようで、私たちが期待していた「生きがい」の点でも大きな収穫があったと思っています。

ただ、今回の森林・林業体験について実施されたNPO法人のアンケートでは、子どもたちが感激したのは、林業や森林の体験と言うよりは、たき火をしながらの昼食や木工それに杉の葉っぱでのクリスマスリース作りであったのは、少しさみしい気もしました。もっと森そのものに関心を持ってほしかったと思うからです。



写真5 魚を枝に刺す



写真8 森で遊ぶ子どもたち



写真6 たき火であぶるひのさい



写真9 枝打ち名人との集合写真



写真7 北山杉をつかった木工

でも、今後こうした森林・林業体験を受け入れるなら、クワやスコップを使って山の歩道を作ったり、森の中で秘密基地を作るのはどうかなど、どちらかと言うとワイルドな考えをめぐらしています。

### 3 NPOや研究者に期待すること

私たちは今回森林・林業体験を受け入れて色々な経験をさせてもらいました。子どもたちが森の中で体験をしたり、自然の材料を使って遊ぶ時の嬉々とした様子はとても素晴らしいものだと感じました(写真8)。最初にも言いましたが、「人と森との関係を密にするため」には、こうした体験はとても大切で、一回限りでなく、継続的に進めるのが重要なのではないかと考え

ます。それは、日本の初等教育の重要な課題であるとも考えています。

また、私は先だつての京都でのシンポジウムにも出席し、研究者の皆さんのプレゼンテーションを聞かせていただきました。皆さんの研究は、「日本の暮らしの客観視」という目的で、発展途上地域の事例を研究されていましたが、日本と発展途上地域との直接比較では、少し距離がありすぎるように思います。これまでお話ししましたように、人と森との関係でいえば、日本と発展途上国との間に、欧米諸国があり、さらに中進国があるのではないかと思います。そのように考えた方が日本の暮らしの客観視がし易くなるのではないのでしょうか。この様な研究やNPO法人の実践が、今後ますます発展し、日本人と森との関係ひいては自然との関係が密になるよう念じております。

## トリップ5 京都の森へ行ってみよう！参加者からのフィードバック

(2013年12月14日実施)

### ■アンケート

#### ① どうして、このトリップ5に参加しようと思われましたか。

- たのしそうだったから(小1)
- 新町小学校で京大の先生の講演会があり、その時チラシを頂き、自然とふれあいながら学べるプログラムとスタッフの良さが魅力的でした。(小2)
- 自然が好きだから(小2)
- まるたまがきなど、やったことがないことを体験したかったからです(小3)
- おもしろそうだから(小3)
- 急にお母さんに行こうと言われてびっくりした。最初はちょっといやだと思ったけど、行ってみたら楽しかった。トリップ1～4は世界のことをやってきたけど、5は京都(日本)のことも知れると思ったから(小4)
- 野外で活動するのが好きだから(小4)
- 食事が美味しそうだったから。いつもは京都の文化遺産めぐりに行ったりして、森には行かないけど、そういう場所も京都にあるんだと思ったから(小6)
- 野外活動が楽しそうだったから(大人)
- 京都で自然に触れさせたかったため(大人)
- イベントがたのしそうだったから(大人)

#### ② また中川北山町へ行きたいですか。なぜですか。

- 「行きたい。」(4才、小1)
- 行きたい(小1)
- 行きたいです(小2)
- 行きたい。おもしろかったから(小3)
- 北山杉が見たいので、もう一度行きたい(小4)
- はい、楽しかったから(小4)
- はい！人も自然も素敵だったので！(大人)
- 自然が好きなので行きたいです(大人)

#### ③ 次回もやってみたいこと、新たにやってみたいことはありますか。

- 「木の工作と枝打ちと、たき火がしたい。」(4才、小1)
- おもしろかったから(小1)
- 夏に行って、川遊びをやってみたいと思います。子どもが遊ぶのにちょうどよさそうです。コンクリー

トで手入れされていない川が透明できれいだと思います(大人)

- じぶんでたき火をおこしたい(小1)
- 木で丸太小屋をつくったりしたい。魚をとり川で泳いだりしたい(小2)
- 木工製作をまた、したいです(小2)
- もう少し役にたつものを木工で今度はつくりたい。作り方を教えてほしい(小4)
- 枝打ちなどで自分で切った木で何かつくりたい。(小6)
- 焚き火、森へ入って遊ぶ、木工製作は、またやってみたいです(大人)
- 小さくてよいので「ミニ杉玉」をつくってみたいです。日本酒好きや物作り好きは楽しめる気がします(大人)

#### ④ 北山杉のふるさと、中川北山町の魅力は何でしょうか。

- 「自然」、「静か」(4才、小1)
- 森がきれい(小1)
- 美しい自然とほろらしい北山杉(小2)
- 自然がいっぱいで綺麗！(小2)
- 森がきれい(小3)
- 自然がいっぱいあること(小4)
- 川がきれい。北山杉の柱が綺麗(小6)
- 京都市内でありながら、豊かな美しい自然に囲まれているところ(大人)
- 親しみやすい人々(大人)
- 人と美しい自然！(大人)

#### ⑤ 何でもお気づきのこと、感想などご記入ください。

- 「楽しかった。」「また行きたい。」(4才、小1)
- すごく良くして頂いて心から感謝です。子どももすごく喜んでおり、また参加させて頂きたいです(小2)
- 楽しかったです。怪我の手当てをしてくれてありがとう(小2)
- 苗木体験ができなくて、少し残念でした(小4)
- これに参加してから、柱を見て「これ北山杉のだ」とか考えるようになった(小6)
- 木工教室の時にのこぎりなどで怪我をされる子どもが何人かいましたが、それらに備えて救急箱が

あったほうがいいかと思いました。とても楽しいトリップで、このようなかたちで他の国のことを紹介できて、尚且つ自分たちの暮らしを見つめ直すことができるんだなんて親もとても勉強になりました。ありがとうございました！(大人)

- 子供たちが想像していた以上に喜んだので、もっと自然に連れて行ってやらないと、と思いました。
- 貴重な経験ができました。ありがとうございました(大人)
- 枝打ち名人がとなりの木に移って枝打ちをしたことがすごいと思いました。「きつねのたすき」を使用したクリスマスリースは杉とはまた異なる魅力がありました(大人)
- たき火での食事がとてもおいしかったです。こんどはおにぎりをもっと多めにもっていきたいとおもいます。小さな子供づれには、自家用車での現地参加もお許しいただけますと、助かります。みがき砂を提案したお坊さん(仏教との関連)の話が興味深かったです。神社と杉や森の関連はあるのかどうかや民話などの文化的背景についてもお話を伺うことができれば、と思いました。私の故郷の高知でも杉山がたくさんありますが、北山杉はとても上品さを感じる杉でした。企画ありがとうございました(大人)

## 感想

- ものすごく、盛りだくさんの内容で、子どもたちも大満足で帰りました。

特によかったと思うのは、杉の木をつるつるに洗ったワークです。多分、見ただけでは、あのキレイさは伝わらないのかも。触って、自分で磨いて、頬づりして、はじめて、日本の工芸の美しさにうっとりできたような気がします。

子どもがアンケートにも書いていましたが、あの後、和室の床柱に目が行くようになりました。北山杉だと、妙に愛着が湧いているようです。

木工体験は、面白かったのですが、ちょっとあまりにも自由すぎて、モヤモヤしながら終わってしまったかも。あのきれいな木を何かにかしたいって思うんだけど、木工の知識と技能が追いつかないのがとても残念でした。あの余りの木をつかった商品企画をみんなで考えるワークショップとかもおもしろいかもしれませんね(大人)

- 『京都で世界を旅しよう2013』の企画、ご案内ありがとうございました。家族、親族一同で参加させていただき、とても楽しませていただきました。北山の森を自転車散策するのは以前から好きでしたが、今回の企画を通じてあらためて北山杉がすきになりました。クリスマスリース台としてもちかえらせていただいた丸太の切れ端は我が家のリビングで大事にしています。楽しい企画を本当にありがとうございました(大人)
- 「京都で世界を旅しよう」では誠にお世話になりました。家族皆で楽しみました。企画に参加させていただき、トリップを楽しんだだけではなく、Iさん・A先生・Nさんとお世話になった懐かしい方々にも再会でき、とてもうれしかったです。そういえば、トリップ5のアンケートで書いた「すぎ玉」はNさんが現地の方にお聞きしていたことから興味を持ちました。企画に参加者も含め沢山の方が関わることで、深みが増しているのかもしれないと思いました(大人)

「京都の森へ行ってみよう！」参加動機、参加してみて面白かったプログラム アンケート (2013年12月14日実施)

| (チラシを見て)面白そうだったプログラムに○をつけてください        | 5歳以下 | 小1 | 小2 | 小3 | 小4 | 小5 | 小6 | 子ども | 大人 | 総計 |
|---------------------------------------|------|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|
| 1 名人の枝打ちを見る                           |      |    |    |    |    |    |    |     | 2  | 2  |
| 2 苗木づくり体験                             |      |    |    |    |    |    |    |     | 2  | 2  |
| 3 たき火                                 |      |    | 1  | 1  | 1  |    |    | 3   | 2  | 5  |
| 4 魚を焼いて焼き芋をつくる                        |      | 1  | 2  |    | 2  |    | 1  | 6   | 2  | 8  |
| 5 すべすべ丸太をみがく                          |      | 2  |    | 1  |    |    |    | 3   | 1  | 4  |
| 6 木工体験                                |      | 1  | 1  | 1  | 2  |    | 1  | 6   | 2  | 8  |
| 7 森はかせたちと一緒に森にでかける                    |      |    |    | 1  |    |    |    | 1   | 2  | 3  |
| 8 世界でもっとも美しい「人がつくった森」北山杉のふるさに行ける      |      |    |    |    |    |    |    |     | 2  | 2  |
| 9 トリップ1～4の世界の異文化体験のあと、日本の森体験に行くのも面白そう |      |    |    | 1  |    |    |    | 1   | 2  | 3  |
| 10 ほか                                 |      |    |    |    |    |    |    |     |    |    |
| 参加してみて 面白かったプログラムに○をつけてください           |      |    |    |    |    |    |    |     |    |    |
| 1 名人の枝打ちを見た☆                          | 1    | 1  |    |    |    |    |    | 1   | 3  | 4  |
| 2 枝打ちを体験した                            | 1    | 2  |    |    |    |    |    | 3   | 2  | 5  |
| 3 はしごにのぼった                            | 1    | 2  |    |    | 1  |    |    | 4   | 3  | 7  |
| 4 たき火                                 | 1    | 2  | 1  | 1  | 1  |    |    | 6   | 2  | 8  |
| 5 魚を焼いて、焼き芋やマシュマロを食べた                 | 1    | 2  | 2  |    | 2  |    | 1  | 8   | 3  | 11 |
| 6 森へ入って遊んだ                            | 1    | 2  |    | 1  |    |    |    | 4   | 2  | 6  |
| 7 すべすべ丸太のお話を聞いた                       |      |    | 1  |    |    |    |    | 1   | 3  | 4  |
| 8 すべすべ丸太をみがいた                         |      | 2  | 1  | 1  | 1  |    | 1  | 6   | 3  | 9  |
| 9 木工制作                                | 1    | 2  | 1  | 1  |    |    | 1  | 6   | 2  | 8  |
| 10 クリスマスツリーやリースをつくった                  | 1    | 3  | 2  | 1  |    |    |    | 7   | 3  | 10 |
| 11 ほか★                                |      |    |    |    |    |    |    |     | 1  | 1  |
| 参加者数                                  | 2    | 3  | 9  | 6  | 4  | 1  | 1  | 26  | 8  | 34 |
| 回答者数                                  | 1    | 3  | 2  | 2  | 2  | 0  | 1  | 11  | 3  | 14 |

★名人が枝から枝へ移ったこと、☆すごかった。樹から木へ飛び移って。(4才、小1)

## ワークショップに参加して感じたこと

三宅 由莉

小学校4年男子と6年女子の子どもと一緒に、トリップ1『大草原！羊と旅する女の子』（モンゴル遊牧民）、トリップ3『森でゴリラに会ったらどうする？』（カメルーン、バカ・ピグミー族）、トリップ5『京都の森へ行ってみよう』に参加しました。

西宮からの参加ということもあり、京都へ子どもたちと出向くこともまた楽しく、午後からのプログラムには参加せず、京都観光させてもらいました。全てのトリップに参加することはできませんでしたが、遠い国の文化にふれるワークショップと同じ日に、京都という日本を代表する文化に触れることは、とても有意義でした。

私自身は、普段の仕事において、学習環境デザインの研究をベースにしたデザインワークに携わっています。今回のレポートは純粋に親子で参加させてもらった一親としての見解と、ワークショップデザイン(学びのデザイン)の視点を織り交ぜながら意見を述べることにします。

### トリップ1に参加して

ワークショップ直後、子どもたちは口をそろえて「楽しかった」と興奮気味に話し出しました。「どんなところが？」と訪ねると、まずは「モンゴルの衣装を着れたところ」、「自分のことと比較するのが面白かった」、「クイズになっていて答えるところ」、「学校でならなかったパオのことが出てきた」などなど。

途中、ワークシートに書き込むことが多くて、学校の授業のようだと嫌がっているかな？と心配したのですが、それに関しては、「かえって、慣れているから、その方が話しやすくてよかった」という感想でした。トリップ1に関しては、

- ①自分の知らない世界のことを知る喜び(インプット)、
  - ②話せたという喜び(アウトプット)、
  - ③衣装を着るなどの体験した喜び(エクスペリエンス)
- の3つの活動がうまく回っていた結果、参加した満足度が高かったのではないかと思います。

また、私に関しては、普段、親子でゆっくりと自分たちの生活や文化に向き合う機会はないので、そんな話を真面目にすることがとても新鮮で楽しく感じました。ちょうど、年齢的にも少し概念的な話が理解できる時期にあったことも大きいかもしれません。

子どもたちだけで参加するのとは異なり、生活の多くを共にする親子で参加することで、ワークショップ後も、あらゆる生活の場面でつながる可能性があります。例えば、食事の箸の持ち方ひとつにしても、今まではきちんと持ちなさいと指導していたところを「日本人なんだから、やっぱりきちんと持ちたいよね」という言葉がけに変わりました。これだけでなく、自分の中で少しでも日本のよいところ、誇りに思うところを意識的に子どもに伝えるようになりました。

### トリップ1とトリップ3を比較して

カメルーンとモンゴルを比較するとモンゴルに関しては、自分たちと背格好が似ているにも関わらず、生活や文化が異なるという点、また、生活水準とっていいのかわかりませんが、日本の子どもにとっては、自分もモンゴルだったら生活できそうだと思うレベルであったのか、文化の違いを同レベルで比較できたように思います。カメルーンの文化は、あまりにも自分たちの生活とほど遠いため、まだまだテレビの中の世界(遠い国の話)として感じているようでした。

「日本の文化もいいけど、モンゴルの文化もいいな」という感想は、異なる価値観を認めるということではなく、率直に「パオに住むの楽しそう」、「馬の競争かっこいい」などの感情が生まれているようです。一方、カメルーンのククル君の生活に関しては、「自分はそこで生活する自信がない」、「動物が怖そう」、「食べ物が不潔そう」などの感情が生まれ、その感情をどのように消化していいのかが分からなかったように見えました。

## 自分の感覚を通した学び

ワークショップから日がたち、アンケートに答える際に、子どもたちがまず思い出したのは、ミルクティ、バナナ、ハチミツ。すべて食べ物でした。実際に飲ませてもらったモンゴルのミルクティの味は忘れられないようです。食文化の違いというのは、子どもにとっても大人にとっても文化の違いを一番感じやすい部分なのだと思います。また、衣装や実際のおもちゃなど、実物に触れるということも、重さ、素材感、音など五感を通して学ぶことで記憶に刻みこまれたようです。

## 誇りという言葉

「誇り」という言葉が何度か出てきました。子どもにとっては、「誇り」という言葉そのものが捉えにくかったようです。自分にとっての「誇り」というものが何か子どもたちの中に少しでも芽生えるといいなと思いました。けれども、残念ながらワークショップでは、どこか、自然と共存していない、都会暮らしの自分たちは駄目だと言われているような気がしました。比較する時に、もう少し自分たちが暮らす日本のいいところを探しができるような質問があってもよいのかなと思います。日本に生まれて、日本に暮らして、オユンティユちゃんに自慢できる場所は何か？という質問でもよいと思います。

多様性や価値観を知るというのは、国レベルでなくても、例えばクラスの中にある価値観の違いを友だちを認め合うということと同じ。基本的には自分のよいところ、相手のよいところを探し、認め合うということです。

他の国の文化を知ることで、自分たちは駄目だと思わず、もっと自分の国が好きになる→もっと自分の国の文化を知りたくなる→誇りを持って、恥じないように行動する、と展開していければ理想です。

## 大人の用意した答え

トリップ1、トリップ2のワークショップの中で、気になったのは、子どもたちが、大人の用意した答えを探してしまわないか、という点です。現地の子どもたちが、都会の生活をした方がよいかどうか、という質問は、大人の望む答えを誘導してし

まうような気がしました。なぜなら、息子は事後のアンケートのこの質問項目で、ククル君に関しては、「都会に出て、もっと清潔な生活をした方がいい」と言いました。その答えを聞いた姉は「バカだね」と即座に言ったからです。状況を読める子どもは、どうしても、大人がどう答えてほしいのかを察してしまいます。

興味深かったのは、その後に息子が「でも、日本の甲子園球場がドームになるのは、今までの伝統がなくなるから嫌だなあ」と、ふと自分のことに置き換えて言ったのです。私は、直感的に、ワークショップで導いてほしいのは、こういうことなんじゃないかなと思いました。ワークショップが、大人が用意したよい子の答えを引き出すものではなく、自分の中に生まれたモヤモヤとした気持ちに正直に向き合える雰囲気や仕掛けをつくるのが大切なのだと思います。

## 理解しがたい感情

ワークショップでは、オユンティユちゃんにしても、ククル君にしても、自然と向き合い生きている子どもとして紹介されていました。ただ、本当にそこに住んでいる全ての子どもがそんな風に感じて生きているのかな？とか、例えば、かわいがっている動物を食料として殺してしまうとき、どんな気持ちなのかな？など、本音の知りたいと思いました。

日本人であれば、子どもに限らず、スーパーでパックに入ったお肉は美味しそうと思うけれども、目の前で牛を殺しているところを見ると食欲が失せてしまいます。ましてや自分が可愛がっている動物を食べるといのは、相当理解しづらい感情です。子どもの頃見た、アルプスの少女ハイジの中で、可愛がっている子ヤギが、お乳が出ないと食用にされてしまうという時に、泣きながら「嫌だ」とおじいさんに訴えるシーンがありました。これは子どもながらも理解しがたいものでした。「糧を自然から得る」という人間が生きる基本を何となく理解すると同時に、この理解しがたい感情を、正直にもう少し丁寧に話せる時間が欲しかったと思います。

## 研究者との出会い

今回のワークショップは、基本的には教室でスライドをみながら、子どもたちに考えさせるという形式のものでした。実際にその国に行くわけでもなく、実際にその国の人に会うわけでもなく、実際に何かをつくってみるという体験をするわけでもない中で、テレビやインターネットから得る情報との違いは何かと考えました。リアルな部分は何なのかと考えた時、それは、そこで話してくれている研究者の存在だと思いました。実際に現地に行き、そういった研究をしている人が、その場で話すということが何よりも子どもにとっては刺激になっていました。もしも、これがプログラム化され、他の人が同じ手順で行っても恐らく何も響いてこないのではないかと思います。多様性を知る以前に、そのような研究をしている人がいるということを知るといったことが、子どもたちに少なからず影響を与えていると感じました。

そういう意味では、紹介してくれるスライドにもう少し研究者の姿が入っていた方がよかったですかもしれません。

## 学びの深化

今回のワークショップは、何か効果がすぐに現れる即効性のあるものではありませんが、小さな

意識が子どもの中に芽生えたのは確かです。

ただワークショップの本質として、次の段階としては、その場で何かを生み出してほしいと思いました。主催者が伝えたいメッセージの理解の程度を図るものではなく、主催者が驚くような何かがある場所で生まれなければなりません。子どもの力を信じて、「自分たちだったら、どうする？」というアクションを研究者の人と同じ視点にたって考える機会があれば、子どもの中に芽生えた小さな意識が深化し、発展していくにちがいないからです。

\* \* \*

ワークショップデザインに関して、今後の発展のため忌憚なく意見を述べさせて頂きましたが、子どもの反応、その後の私たち親子の関わり方を見ても、今回のワークショップが大変有意義であったことは間違いありません。このような貴重な子どもの経験の場をいただいたことを本当に感謝しております。また、このような機会ができるだけ多くの子どもや親子に広がっていくことを今後も期待しています。



## 第2部

# 地域理解による 次世代教育の 可能性

# 子ども世界の可能性

山田 勇 京都大学名誉教授

私は全部のトリップに参加したのですが、たいへんなことをされたなという気がいたします。それぞれの発表者が何年もかけて調査された地域について、子どもにわかりやすいように一所懸命に努力して説明されたことがありありと見えて、あらためて感動しています。

## 子どもたちの心の癒やし場——スイバ

先ほど岩井さんから、子どものころは山ばかり入っていたという話がありましたが、私も岩井さんとは3歳ほどの差です。当時の京都では子どもの言葉で「スイバ」というものがありました。「スイバに行こう」という言葉は、我々の日常生活のなかでもっとも大事な言葉の一つでした。学校から帰ると鞆を捨てて、パツと山に走って行く毎日が続きました。

そのとき行く場所は、私の場合だと、金閣寺、千束を越えて行くと八丁峠という坂があって沢池へ至るのですが、そこまでは行かずにその手前の山裾の谷川です。そこにいるサワガニを獲ったり、または大文字の山を越えて水晶をとりに行ったり、そのような日常を毎日すごしていました。

どうしてそこに行くかといふのと、「行けば必ずむくわれる」、「心の癒やし場」という満足感を感じたものでした。ものはどうでもいいのです。獲れたら獲れたでいいのですが、べつに獲れなくてもなにか満足する。しかもごく少数の仲間のみが知る秘密の場、秘密の基地であるわけです。3人か4人しか知らない。それはぜったいに他人には見せないという喜びもあり、私は少年時代をそういったところで過ごしました。

図1は私の「スイバ」の地図です。現在でもありありとよく憶えています。私は金閣寺周辺に住んでいました。スイバはその周辺約10キロメートル四方ぐらいにあって、端のほうですが中川もそのルートの一つに入っています。沢池へ行って、菩提滝を経て、菩提滝から中川に出て帰ってくるという1日コースです。その

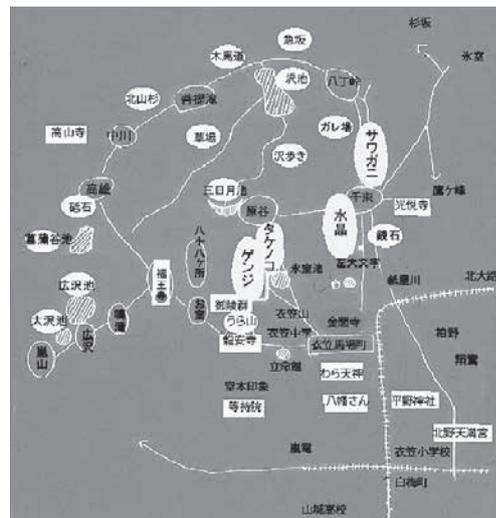


図1 スイバ

途中でいろいろなところに寄って、いろいろなものを集めてくるという体験をずっとしていました。

このような体験で小さいときを過ごしたので、ほとんど町との接触はありませんでした。町に行く必要もなく、十分に満足できた生活を送ることができたというのが私の大事な思い出になっています。

## カミ世界と先住民の世界、子どもの世界

その後はあちこち海外に出ることが多くて、南から北までいろいろなところを見ました。その結果、現在ではこのようなことを考えています(図2)。人間世界というのは下のほうにあって、カミ世界は上にある。木村さんがおっしゃった標高5,000メートルぐらいのところというのは、シャングリラを越えてまさにカミ世界に近いようなところなんです。人間はどこかでカミの世界に近づきたいと、年齢とともに思うようになると考えています。

逆にマイナス方向としては下に地獄があって、悪いことをすると地獄に落ちるといふことです。地獄に落ちないために、「真」、「善」、「美」という世界を作る。そのために衣や舞い、楽器、香り、祈りなどを通じて、で



図2 カミ世界と現代世界の図

きるだけカミの世界に近づきたいと人間は思っているのではないかと私は考えています。

ヨーロッパの大聖堂やミャンマーのパゴダ、日本の宮の森、チベットのゴンパなど、それらはすべてカミの世界に通じるものとして、人間世界がなるべくカミの世界に入りやすいように作る装置であるという位置づけをする。「巡礼」というのは、人間世界からカミ世界への道筋にあたることを、ごく限られた人が行くということになっているわけです。

先住民の世界というのは大事です。先住民というのは、現代社会に生きる人間よりもずっとカミの世界に近い人びとが多いと私は理解しています。それに続いてもう一つ大事なのが老人の世界です。老人も年を重ねるとだんだんカミの世界に近くなっていくと思っています(図3)。

そしてもっと大事なのは子どもの世界です。子どもは生まれながらにしてカミの世界に近いところにいる。それが段々と年をとるにつれて下がってきて、地獄に近い人間の世界に近づいて、悪いことをいろいろするようになる。これが人間の宿命のようなもので、そうであるがゆえに子どもの世界は大事なのです。

### 分け隔てのない、わかりあう世界としての森

すなわち、大事なことは、結局、現在の世界というのはたいへん問題が多い。それを少しでもできるだけよくしたいとみんなが考えている。特に子どもの世界と老人の世界とが分かれな、分断されない世界というのが大事で、先住民の世界がまさにそれであると私は理解しています。そこではあまり分け隔てがない。わかちあい、わかりあう世界です。素朴な世界ですが、だいたいなものがある。そういう世界こそが、今の現代世界では失われているものではないかと思っています。

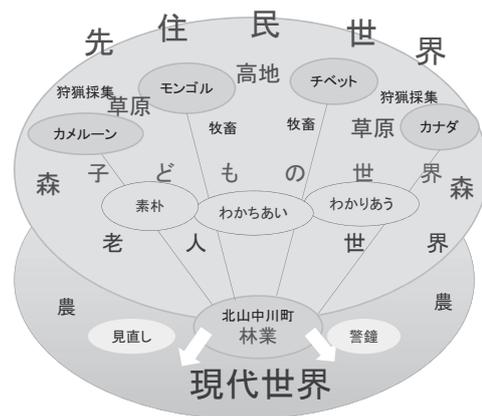


図3 先住民世界と現代世界の図

私の現役時代に、東南研の外国人客員が、日本人研究者と別扱いはやめて欲しいと訴えたことがあります。知らないうちに我々は分断することによって自分の立場を護るといふか、楽になりたいという気持ちが働くようです。しかし現実にはさまざまなものが混じり合っていて、それを無視して分断すると問題が起こっているのではないのでしょうか。

森がなぜ大事かと言いますと、森は分断が無く、すべてがつながっている世界です。森と農とはすこし違います。私は農はやはり現代世界のもので、森は先住民世界に近いものであるという理解です。中川町はちょうどそのあいだのようなどころにあって、大事な位置づけにあるわけです。先住民の世界や森の世界の生活は、いますこし行き詰まっている現代世界に対して見直しを図ったり、あるいは警鐘を鳴らす役目があるのではないかと思います。

### 子どもの期待に応え、いまに活かす

一言で言いますと、「分断から融合へ」という感じで私はこのワークショップを受け止めています。環境とか子ども、大人、老人世界などが、現在の我々の世界では分断されている。都市と森、子どもと大人、あるいは老人はまったく別のものだという分断された社会が、ぐあいの悪い方向に行っている。これらをできるだけ融合する。その最もいい例が先住民の世界だと私は理解しています。

そこでどのような生活が見られるかという、「素朴域」と言いますか、ようするにみんながごく普通につながっている場です。そのつながりの場の地に即した生活の重要性を、これからもっと大事にしていく必要があるのではないかと。そこに子どもが入るわけです。

最初に飯塚さんがいみじくもおっしゃってしまし

たが、子どもを育てるときに子どもの自由度を尊重する——「尊重域」とでも呼ぶべき、その幅をできるだけ広げることが必要ではないかと私は思っています。「実際に母親や父親になるとそうは言ってられません」という声が聞こえてきそうですが、本来の母親の立場とか父親の役割というのは、チマチマしたことで子どもを叱ったり、閉じ込めたりするのではなくて、もっと広い意味で子どもの可能性を信じて、周りの環境をゆるやかにつくっていくことではないかと思えます。

環境問題が1960年代ぐらいからずっと日本では大きな問題になってきています。現在はもっと進んで、「環境教育をどうするか」ということになっています。その見直しへのステップとして、このワークショップはたいへん意味があるのではないかと考えております。

問題点は、子どもには未知なる世界への期待があるわけですが、それにいかに応えられるか。そしてもう一つが、子どもがいま生きている世界にどう活かせるか。この二つがポイントではないかと思えます。子どもがイキイキと自分を生かせる場をつくり出すことが今日ほど求められている時は無いと思えます。

今日発表された5人の意見を聞くと、まだはっきりとこの結果が明確なたちで出るとは思いません。しかし、どこかでこのような視点に立って、時間はかかるでしょうが、なんらかの貢献ができるのではないかと、私はたいへん期待してこのワークショップを見えています。

## 不幸な子ども時代をすごした親が生む負の連鎖

私は職業柄、世界のアチコチを、しかもあまり普通の人が行かないような奥地を歩いています。そこに住む人々は皆、貧しい暮らしをして、一生懸命働いて毎日をやりくりしています。日本の昔話に出てくるような、おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に、というような世界です。そんなところへ見知らぬ私のような人間が行くと、いつも優しく「茶を飲んでいかんか」とか、「飯でも食って泊っていけ」と言ってくれます。めったに口にすることのないトリをしめてご馳走してくれ、酒で歓待してくれます。そして翌日には子どもを背負い一日中畑仕事をし、夜暗くなってから疲れて帰ってきます。そんなしんどい中で最も大事なものは子どもの存在です。たとえ今は貧しくとも懸命に働いて子どもにはいい教育を受けさせたいというのが、全世界共通の親の願いです。

中国の山の中でもそうでした。東南アジアの離島の

親もそうでした。アマゾンの森では小さな小屋のようところで、子どもが勉強に励んでいました。

日本もかつてはそうでした。戦後のすべてを失った時期には、今のような豊かな生活は想像もできず、皆より良き未来を求めて力いっぱい生きてきたのです。そして次の世代の子どもたちの成長をみるのが何よりも働く人の心の支えになっていたのです。

しかし今日は、ちょっとおかしな方向に向いています。競争社会に入り、金銭主義に至り、業績主義となり、人の心は荒れてきました。バブルの時期、私は海外から帰ってくると、日本人の顔がこんなに悪くなっているのかといつも驚いたものでした。人のことを思いやらず、出世や金のみを追い続ける時代が続きました。その子どもたちに対しても塾通いが始まり、子どもの心もすさんでいきました。そんな反省から「ゆとり教育」が始まりましたが、すぐに成績が悪くなったため、方向転換させられるという、子どもや親にとってはどう対処していいかわからない状況が続いています。昔には考えられなかったような事件も起こり、世間を震撼させています。

これらの出来事はいわば、子どもの悲鳴だと私は受け取っています。今の社会が子どもには対処できない過重な重荷を負わせている結果がこうなるのです。

先住民の人々の家族はいつも一緒です。私は畑でも山でも海でも、子どもたちが親について歩いて、まさに実地に山のケモノやトリ、海の魚などを覚えていく過程が最もいい教育だと思っています。

そういう意味で、今ある教育はいわば全て間接教育です。子どもが遠足や修学旅行を好むのは、直接に自分が体験できる面白みがあるからです。子どもは正直です。自分の感情に響くものはもろに受け入れますが、そうでないものはナカナカ身につけません。それを無理やりやらせているのが今の教育なのでしょう。

子どもの可能性は無限です。それを狭い世界に閉じ込めてしまうのは我々の責任です。我々に課せられた責任は極めて重いと言わざるをえません。

今、子どもへの虐待が問題になっています。子どもを虐待する親や大人の背景を調べたわけではありませんが、おそらく、この人々は子どもの時に子どもらしい扱いをされなかったのではないのでしょうか。大変不幸なことですが、そういう意味で、やはりここにもつながりがあるのです。しかも悪い方の負の連鎖が綿々と続いているのです。

子どもの時の体験は一生、ついてまわります。いいことではあれば良し、しかし、その反対の悪いことで

あれば、これほど子どもにとって過酷なことはありません。子どもの可能性を生かすも殺すも、子ども以外の世代の責任なのです。

## 子どもの世界を豊かにすれば未来は変わる

私は、子ども世界だけでなく、今の世界は、すべからず、先住民社会を見直すべきだと考えています。

先住民社会は、決して原始的ではなく、人間が生きるための最も根源的な原初的社會です。物理学でいうならば、ニュートンの力学の基本定理を学ぶ最も大事な基礎を固める世界です。先住民の人々と一緒にいると、えも言われぬ安心感の中にいることを感じます。することなすこと、皆地に足がついていて、決して浮ついたことを言わないし、行動は慎重です。足を一歩出すにも全神経がそこに集中しているような重みが全身にみなぎっているのです。そこについていく子どもたちも雰囲気です。そしてひとつずつ、鳥やケモノの声、足跡などを学んでいくのです。

日本の伝統芸能の世界でも、3歳から稽古を始めます。親が子に、親と同じようにやることを教えて、少しずつ、難しい芸を覚えていきます。ピアノやバイオリンの世界でも同じことで、小さい時から始めることによって、頭で覚えるのではなく、身体にしみこませていくのです。

自分の子どもの頃を思い出しても、勉強したという記憶は全くなく、友達と山へ行ったり川で泳いだり、トンボつりをしたり、走り回ったりという、身体で感じたことばかりが残っていて、それが今も自分の仕事につながっている気がします。一応机らしきものはあったのですが、座って勉強した覚えは全く無く、野や山や川の様子だけは今でもありありと覚えているのです。学校から帰ったあとは全時間、遊んでいたという、今では考えられない豊かな子どもの遊びの時間というのが普通にあったのです。そんなことを思い出すと、今の子ども世界は画一的で規制が強く、子どもの自由度を縛ることばかりやっているような気がします。とりわけ、日本や韓国などは受験地獄と呼ばれるほどひどい状況にあり、その地獄への道を小さい時から進まざるを得ない状況を我々大人がつくってしまっているのです。

森の世界では常に次の世代を考えていかなければ、継続は難しくなります。親を見ていい木材を育てようと林業家は日々努力します。伐った後に植林していくことは、自分の利益にはなりません、次世代を潤す

ことになります。ちょうど赤子を育てるように、森の人は、小さな苗木を大事に育てます。気の入れ方が強いほど、木はすくすくと立派に育つのです。

今の世界には、こういった毎日の日常生活の大事さがどこかでないがしろにされ、人を驚かすようなことのみがもてはやされるようなところがあります。しかし、いつの時代にも毎日の生活を着実に歩み続けることが、次の明るい世界を生んでいくのです。子どもの世界をいかに実り豊かにしていくかによって、その家族、民族、地域、そして人類の未来は変わってきます。

## 子どもとすごし、「時間をためる」必要性

かつてとは比べものにならないスピードで変わっていく現代世界の中で、時間は常に浪費され続けていきます。「早い者勝ち」という浅薄な意識がまかり通り、じっくりと地に足のついた仕事はないがしろにされがちです。こんな時にこそしっかりと足どりを前を見据えて歩いていく姿勢が大事になってきます。

木は同じところに立って何十年、何百年、そして何千年と生き続けていきます。しかも同じ場所に立って動くことなく、泰然と世界を見下ろしているのです。木は時間をためています。戦争も干害も暴風雨もすべて呑み込んで、ひたすら年輪にため込んで、生長していきます。

今われわれ人類にもっとも必要とされるのは、この「時間をためる」という作業ではないでしょうか。われわれはあまりに多くのことに時間を浪費しすぎました。自分の過去を振り返っても、悔むことが多いのは、やはりもったいない時間の使い方をした時のことです。もっとじっくりとやっていたら悔やむのは誰しも思うことでしょう。

このあたりで時々足をとめて、越し方行く末を眺めて、深呼吸をし直して出直す時間が必要なのではないのでしょうか。

その時に一番いいのが、子どもと一緒に時間を過ごすことです。子どもは無邪気でおそらく時間のことなど何も考えずに笑い泣き眠るでしょう。そこには自然に逆らわない最も原初的な生き方の原点があります。世間の波にもまれ続ける人間の世界から脱出して、子どもの世界の根源性を見直すことが今一番求められているような気がします。

# 政策的観点から見た異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育

新川 達郎 同志社大学大学院総合政策科学研究科教授

## 1 本研究と政策科学

「本研究の目的は、現代の都市住民や子どもたちが、地域研究の知見に基づく多様な「土地に根ざす暮らし」を知ることにより、あるいは自らの都市生活を相対化することにより、見いだし得る新たな視座や知見を明らかにすること」とされている。研究目的からすれば、直接的には異文化理解という教育手法(=政策)による人々の変化を、教育の効果として達成しようとする実践であり、その実践の有効性を検証することである。政策科学的に言えば、教育政策の成果が上がっているかどうかを分析すること、そしてその結果に基づいて、より大きな成果の上がる方法を考えるということになる。

成果という観点から見ると、基本的にこの教育が何を目的としているのか、という視準をもって考えることが出発点になる。教育目的からは、そもそも目的が達成されているのかどうか問われる。現代日本の「都市住民やその子どもたち」が異文化理解をすること、そして自己の生活を相対化することが目的とされていることから、それが達成されているかどうかは第一に問われなければならない。一般的に学習の到達度を測ることは、知識や技術の蓄積を基準にする限りはそれほど難しくはない。しかしながら、自己の生活や価値観を相対化する理解やその応用を求めるとすれば、いわば運用能力の獲得を目指すのであり、その成果の到達点を設定し、また測定することは難しい。こうした意味での教育成果を評定することは難しいのである。

目的が達成されているかどうかは、教育目的に沿った教育方法が用意されていたかどうか依存することになる。異文化に学ぶという方法が、目的達成に最適な方法であったかどうか、代替的な手段との比較も含めて検討がされていなければならない。加えて、実際に教育活動を実践することによって、教育方法の良否は決定されるのであるが、あらかじめ準備された

方法がその意図の通り実践されているかどうか問題になる。仮に異文化理解が進まない場合があるとすれば、人的資源、財源資金、施設設備、物的社会的環境などの条件によって、教育方法の良否が左右されるということもあろう。せつかくの教育目的と教育方法が、実施の段階で様々な障害に直面することがあるともいえる。

## 2 本研究の社会的意義

政策的な観点からは、本研究の社会的意義が問われているともいえる。政策科学が志向するのは、基本的には良き社会に向けての価値選択と実践の方法の提示である。そうした観点から、本研究、異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育が、政策的に意味があるという場合には、その社会的な意義が認められなければならない。

そこで想定されるのは、一つには、地球環境問題を始めとして広く関心をもたれている環境教育について、その進展に貢献できているかどうかという観点である。

二つには、異文化地域理解や文化多様性の学びが、その社会的な意義を発揮するものになっているかどうかである。それは翻って、こうした分野の研究、すなわち地域研究それ自体の社会的意義を問うことでもある。

三つには、社会的意義という場合に、どのようになればそれが認められるかという観点である。それには直接的な成果と間接的な成果とが区分されるように思われる。

直接的な成果としては、人々の生活や身の回りへの視点が変化をし、価値観が多様化あるいは変化し、意識や行動が変わり、その暮らし方が変容していくことがあげられよう。これは別の言い方をすれば、異文化地域理解が、自ら暮らしている地域への理解を変え、新たな視点で地域を見つめる、いわゆる地元学の発想と重なることになる。そして、文化多様性に学ぶこと

で自らの地域の在り方を変えようとする事は、内外のネットワークを広げ、地域の資源を再発見し活用する「まちづくり」に取り組んでいることになる。

次に、間接的な成果という観点を取り上げてみるなら、こうした社会的意義が一般的抽象的に広がっていく様相があるとすれば、とりわけ本研究のように実験的な観点から社会に働きかけるときその意義を測る基準の一つは、新たな知見や方法を社会に提供し、実際に社会変革を起こすことができているかどうかという論点である。別の言い方をすれば、本研究が扱う新たな環境教育の目的と手法が「ソーシャルイノベーション」として成り立っているかどうか、問われるのである。

以下では、これらの論点を今少し詳しく掘り下げてみよう。

### 3 環境教育の目的は達成されているのか

環境教育は、一般的に言えば、環境問題の解決に資することを旨とした教育であり、問題に取り組む態度や素養を育むことをまず習得目標としている。そのためには、知識を獲得する座学だけではなく、フィールドにあって現地・現場から学ぶことが重視されてきている。従来から、自然観察など野外学習が取り入れられてきている分野でもある。

さて、本研究の目的は、こうした環境教育の方向にそって組み立てられているはずであり、それに沿った方法がとられていて、より有効な教育方法が実現されているはずである。ところが、本研究における第一の疑問は、この点にある。すなわち、異文化地域理解や文化多様性の学びが、環境問題への意識を育み、問題解決に資することになっているのかどうかである。実は、目的と手段の置き換えがあって、環境教育といいながら、異文化地域理解教育あるいは文化多様性教育になっているのではないかと疑問が提起されるのである。もちろん、直接的な効果はなくとも、間接的な効果を重ねることで、目的を達成することがあることからすれば、一概に教育内容の良否を速断することには慎重でなければならない。

こうした疑問に的確に答えるためには、異文化地域理解が、学習者自らの環境問題への視点をどのように培っていくのかを、教育方法として明らかにしていく必要がある。例えば、子どもたちの学びという観点からすれば、異文化地域や文化多様性を理解し実感する

ことから、自らの地域の現状を振り返り、それに対する自覚や省察を促す方法や、自己の暮らしを相対化する機会が提供される必要がある。

### 4 周辺諸学と地域社会——まちづくり及び地元学にかかわる政策の観点をめぐって

もちろん、異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育は、環境教育にのみ限定的な意義を持つものである必要はない。その環境教育を通じて、様々な学問的な貢献や社会的インパクトが期待できるのである。何よりも、地域研究に関して言えば、おそらく当該研究分野にとって新たな社会的接点作りをしていることになり、それを通じて地域研究それ自体も刷新され、あるいはまた新たな可能性を開くことになるのではないかと。これは、環境科学やその関連分野についても同様であるし、教育学へのインパクトもあると考えられる。

様々な貢献が考えられるが、前述のように、その社会的意義や研究上の価値は、異文化理解を通じて自らの地域への理解を深め、新たな視点を得ていくという、生活者視点の転換であり、その地域へのまなざしの変化である。この分野は実践的には「まちづくり」として知られているし、その方法論として地元学という分野が提唱されてもいるが、そこで強調されるのは、従来の地域観の刷新であり、地域の再発見であり、それらを通じた地域の抜本的な見直しと、それを活用した地域の自主的自発的な運動である。その見直しや活動を触発するものとして、異文化理解や文化多様性への気づきが重要なきっかけとなるし、そのためのネットワークや、いわば外部の知恵が重要となるのである。

こうしたまちづくりや地元学の観点は、本研究にも一つ重要な課題を突き付けている。すなわちこれまでは研究や紹介の対象であったそれぞれの地域へのまなざしを、どのように組み立て直せるのかという点である。別の言い方をすれば、研究対象から研究成果を収奪するだけではなく、研究対象を豊かにする、そうした貢献ができるのかどうか問われているのである。研究やそれを通じて達成される環境教育が、当該の地元にもどのように還元されるのか、問われているのである。これまで、それは一方向でバランスを欠くものであったが、互酬性を持った関係をどのように構築していくのか、研究面でも実践面でも問われているのである。

## 5 プログラムの特徴 ——文化多様性を学ぶワークショップ

本研究の特徴はすでにふれたとおりであるが、その教育手法という点でも工夫が凝らされている。すなわち、地域研究の様々な成果を活用したこと、能動的学習(アクティブ・ラーニング)を用いたワークショップを進めたことである。

本研究における異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育のために、日本国内において、次の5つの実践を行っている。「1. 大草原!羊と旅する女の子——モンゴル遊牧民の暮らしを知るワークショップ実践」、「2. わたしの家は雲の上——チベット族の暮らしを知るワークショップ実践」、「3. 森でゴリラに会ったら、どうする?——バカ・ピグミー族の暮らしを知るワークショップ実践」、「4. ボクはオオカミ族——北米先住民クリンギット族・カスカ族の暮らしを知るワークショップ実践」、「5. 京都の森へ行ってみよう!——中川北山町で子どもたちのフィールドトリップ」である。

これらは、ち密に構成されたシナリオに基づいて、日本に居ながらにして異文化地域理解を得るためのプログラムとして構成されている。そのプログラムでは、映像や音声、飲食物、生活用品、衣類など、実物に触れながら学習を進める。さらにその理解を深めるために、ワークショップ形式をとって、相互に気づきを交換し合いながら、能動的に学び取ってもらう方法を試みている。その成果は、参加者へのアンケートの結果として取りまとめられ、様々な親子の気づきが記録されている。

もちろんこのプログラムによって、本研究が目指しているところがどこまで実現できたかは、何年もの時間軸の中で長期的にみておく必要があるし、他の要因とも併せて、総合的に検証していく必要があることは言うまでもない。加えて、残念ながらこのプログラム単体で引き出せる直接的な成果は、部分的なものにとどまるかもしれないし、本研究の全体像からすれば、一部を実験しただけにとどまるかもしれないのである。

## 6 ソーシャルイノベーションの観点

以上のように、本研究とその実践、すなわち異文化地域理解あるいは文化多様性に学ぶ環境教育は、それ自体として、従来とは異なった視点と、異なった方法をもった、環境教育のイノベーションというべきものである。

そのイノベーションは、一つには、地域研究を環境

教育と積極的に結び付ける努力をしたことにある。従来からも地域研究の成果の一部は環境教育にも活用されてきていたが、地域研究と環境教育研究とが、理論と実践の双方向で貢献しあうことを目指すことは少なかったといえよう。

二つには、フィールドワークの重要性を言いながら、フィールドに行かないでも文化多様性を学ぶべく、それに代わる手法を提案した点である。それは異文化への理解を深めるために、視聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感に訴える学修方法であり、ワークショップによる能動的学習(アクティブ・ラーニング)を用いることにより、現地に行くことができない場合にも、より実体験に近づけるとともに、より深く異文化を実感してもらおうというものである。

三つには、文化多様性を体感してもらうために、複数の文化からの学びをプログラム化したことである。これによって、単なる異文化理解ではなく文化多様性に目覚めることが容易になる。

四つには、本研究の趣旨からしても当然ではあるが、一般的に知られている多数派の民俗ではなく、先住民あるいは少数民族と呼ばれる人々とその文化の紹介に努めたことである。少なくとも新たな発見を学習者に提供したことになる。

五つには、本研究では、日本の事例との比較を試みている点である。その学習プログラムの中に、日本の事例を入れ、しかもそれは大都市の近郊にあつてなお森と共に暮らす少数派の暮らし方を紹介するものである。これによって比較可能性が高まるとともに、より深い気づきもたらされるものと思われる。

最後に指摘しておきたいことは、こうしたいくつかのイノベーションは、総体として、環境教育や子どもたちの学びの在り方、そして地域研究や多文化理解、そして何よりも近代文明がもたらす都市生活とそれによって作りあげられた価値体系を、根底から見直させようとする実践でもある。すなわち、あらゆる努力が社会をよりよく変革していこうとする意味を持っているべきであつて、本研究の試みへのコミットメントこそ、社会的に意味ある事業として従来の枠組みを刷新するソーシャルイノベーションと位置づけることができる。

## 7 もう一つの教育のために ——政策論的な含意

ソーシャルイノベーションの基本には、教育があることは大方の合意が得られるであろう。学びがなけれ

ばイノベーションは生まれにくい、社会的な広がりもない。もちろんこの意味での教育は、学校教育とか社会教育といった枠組みを超えて、教育の本質に近いところの意味があるし、社会発展のための政策の基本という意味でも重要である。もちろん、この教育自体も、従来の教育の刷新に向けてイノベーションしていかなければ、より良い教育を追求することにはならない。教育政策を語ることはその刷新を語ることでもある。かくして、教育によるソーシャルイノベーションと、教育それ自体のソーシャルイノベーションが、共に求められているのである。その時、本研究が目指しているソーシャルイノベーションは、おそらく従来の教育の在り方を根本から変えること、そしてそれによって社会それ自体の変革を目指したものであることができるはずである。

教育というのは、人が人として生きていくために必要な学びであり、そこには共通したものがある。そして、そのなかで培われる人としての感覚は類的なものとしてあるはずである。ところが、その一方では、そうした共通の知識技術の学びや共通感覚の習得については、それらがきちんと学びとられていない、あるいはそのような教育になっていないといった批判が、本プログラムの背景にある大きなモチーフだと思われる。

現在のわれわれの教育システム自体は、残念ながら批判を受けているそのような教育をせざるをえないものとなっている。この100年間で近代化という文明教育をする社会を作り上げ、その社会を託す次世代の子どもたちを訓練するために、そして子どもたちをいずれはこの社会に組み込んでいくため教育を行ってきた。我々の社会の維持と発展のためにはこれまでのような教育政策をとらざるをえないのであり、いたしかたのない側面はある。しかしながら、その一方では、この「いたしかたなさ」に対して、なにがそこでさらに必要なのか、あるいはそれと同時にもう一つ別の何かが必要なのではないか、つまりは政策代替案ということをあらためて考えようというのが、本研究の背景にある動機である。

ただし、主流に対してこのようなもう一つの教育、オルタナティブな教育をどう考えるのかは、実は必ずしも単純ではない。今回の研究においては、自然や環境ということにウエイトをかけた教育プログラムが用意されているが、それに限らずさまざまなオルタナティブがありそうであるし、逆に、今日の生物多様性あるいは文化多様性の問題などを思い浮かべると、そ

こにある生業や経済、社会、政策や制度、そして思想にどうふれるのかということ、そしてそのオルタナティブな教育がどのような位置づけになるのか、的確に論じていくのは極めて難しいと思われる。

その一方では、実際問題として、このようなオルタナティブ教育をいま必要としているということについて共有された感覚はあるとあってよいであろう。ある意味では、そのような感覚をどう磨くことができるのか。そのような教育の機会をどう作っていいのか。それが教育や研究に関わっている者の役割かもしれない。人々の将来を少しでも考えようという人たちにとっては、これは大きな課題であり、要するに持続可能な未来の選択肢を豊かにすることにすべて関わってくるという意味での課題である。

そのように教育について考えたときに、その根幹を成す研究はどのようなあり方になるのか。多少ものわかりがよくても、難解なものは素通りしてしまうような教育では困るという指摘がある。同じような意味になると思われるが、逆に難しいことやわかりにくいこと、厳しい訓練を経ないと理解できないようなことをきちんと教える、学ぶということがなければ、教育ということも成り立たない。そのためにこそ研究をする。わかりにくいことや不思議なことを徹底的に究明していく。そしてその難しい道筋を理解してもらうことがなければ研究の意味もないし、研究を通じての学びもなくなってくる。

ある意味では、単に学問研究を道具的に使うのではなく、研究の本質に関わる議論をどう学びのなかに活かしていけるかということが重要であり、それらがあらためて本研究における一連の環境教育の趣旨に問われているように思われる。ある意味では「学び方を学ぶ」、「教え方を学ぶ」ことであり、そのなかに逆に学問研究の本来の姿をどう活かしていけるのかが問われている。

実はこの点は、本研究の背景になった地域研究のみならず、教育にかかわる研究を進めるすべての学問分野に共通の課題でもある。そして、オルタナティブな教育のみならず、教育研究に関わる全ての人々に共通の課題でもある。本研究はそうした課題に対する小さいかもしれないが重要な一歩と思われるし、この試みがさらに大きく発展していくことが期待される。

# 10万年後の人類の姿を考えてみよう キッズの想像力と創造力

縄田 浩志 秋田大学国際資源学部教授 / 総合地球環境学研究所客員教授

京都市にある総合地球環境学研究所(以下、地球研)において、2010年8月23日(月)13:30~16:00、「第一回地球研キッズセミナー」を開催した。私は、企画と講演に携わる好機を得た。その際「10万年後の人類はどのような姿になっているのだろうか?」と問いかけるシートを配布して、子どもたちにイラストや文章で表現してもらった。その試みの結果を紹介したい。

## 地球研の子ども向け企画

主に小学生(8~12才)とその保護者を対象として、地球研近隣の学校を中心に案内したところ、定員100名をはるかに上回る応募をいただいた。実際当日も、夏休み後半の平日にもかかわらず、非常に多くの方々に参加いただき、大盛況であった。それまで地球研を会場として、子ども向けのセミナーや催しを開催したことはなく、また近隣住民を主な対象として地球研の研究活動を紹介したことがなかった。初めての試みだった。そのため、この企画に携わった研究部と管理部からなるスタッフ一同、大いにはりきった(図1)。

地球研の特色として、1) 地球環境問題解決に向けた多分野共同の基礎研究、2) 主に海外を舞台にしたプロジェクトによるフィールド調査、3) 未来を考えていく設計科学を目指している、といったことが挙げられる。そこで、これらの活動について知ってもらい、身近に感じてもらうために、1) テレビや雑誌などを通じて子どもがすでに知っている知名度のある講師、また地球研所属の講師という違った分野の複数の専門家から直に話を聞いたり実際に対話する場を設けることにより、共同研究のだいご味を感じてもらい(第一部)、2) 普段の生活では体験することがない海外の自然や文化、そこでの調査活動について紹介し(第一部、第二部)、かつ最新の実験設備で面白い体験をしてもらうことにより(第二部)、3) 今現在、決して正解など存在しない「地球環境」の「未来」について共に考えていくことを目指した。



図1 地球研キッズセミナーのチラシ

第一部セミナーでは、「恐竜はいきている! カエルは人間のご先祖さま?」と題してゲストの富田京一講師(肉食爬虫類研究所代表)がまず話題を提供した。1) 子どもたちの大好きな恐竜は絶滅したと思っているだろうが、小鳥に姿を変えて現在にも生きていることを知ってもらう(低学年向け)。2) そのことを軸として、恐竜の絶滅の原因・背景、生物の進化や多様性、両生類・爬虫類・哺乳類の違いや成り立ちに関する最近の学術的成果について理解してもらうと同時に(高学年向け)、3) その話の核心の一つとなる、爬虫類・哺乳類の違いや成り立ちを科学的に体感してもらうために、恐竜の卵の実物を顕微鏡で観察してもらった(第二部へのつながり)。

ゲストの話を受けて、縄田浩志(地球研准教授、当時)により、生物としての人類が自然環境に応じてどのように多様な適応をしているか、その延長としてどのように異なった社会を構成し面白い文化を育てているか、海外のフィールドワークの状況を紹介した。具体的には、沙漠のイスラーム文化圏での用の足し方を実

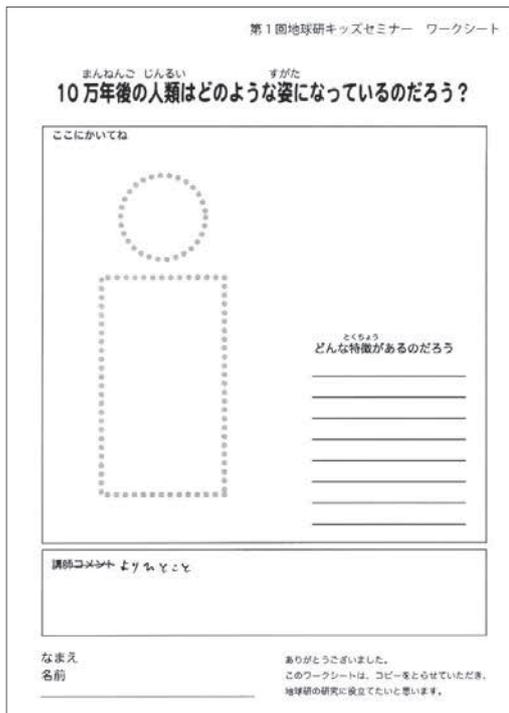


図2 ワークシート「10万年後の人類はどのような姿になっているのだろうか？」



図3 20代女性による表現作品

演してみた。その上で、村に長く住み込んでいる時に体験した、人間の糞を介してフンコロガシと人間の間に生まれる循環について解説した。さらに、古代エジプト人は糞玉を転がし運ぶフンコロガシの姿を天空を横断して太陽を運ぶ太陽神と結びつけ、来世での復活の守り神として護符にしたことを紹介した。最後には、白ナイル上流に暮らす少年たちは風土病マラリアの予防として燃やすウシの糞を乾燥させるために素手でばらける仕事をしている様子についても話した。

第二部セミナーでは、「体験しよう！地球研一きみも未来の研究者」と題して、顕微鏡室、冷凍保管室で実験室を見学してもらうと同時に、班に分かれてもらい、地球研の3つの研究プロジェクト研究室を訪問してもらった。

### 子どもとともに想像・創造する楽しさ

「キッズセミナー」プログラムでの大枠をこのような流れの中で行い、第一部の富田と縄田の講演が終了後に、参加者の小学生と保護者を対象として、あるお願いをした。それは「10万年後の人類はどのような姿になっているのだろうか？」と問いかけるシートを配布して、イラストや文章で表現してもらったのである。(図2)

「例えば…」と言って、2つの例を示した。20代女性と40代男性の2人の地球研プロジェクト研究員があらかじめ答えたものである。20代女性は「目がでかくなる。鼻はほそくなる。口は小さくなる。手足は筋肉がなくなるとほそい。胸はみじかい。足は変に長い。足が小さい。ほとんど歩けない」として、近未来的な雰囲気があるスマートな女性の姿を描いた(図3)。一方40代男性は「毛が増える。右手が長く、左は退化。足は退化。胃袋能力が強くなる。耳を使わなくなる(言語コミュニケーションなし)。口先が発達、食料事情がゆるくなるから」として、ちょっと怪しい雰囲気があるおじさんの姿を示した(図4)。2人が言うには、実際にこのような作業をしてみると、童心に帰って「楽しい！」と久しぶりに思えたということであった。

お願いする時に、小学生だけでなく、保護者も一緒に取り組んでもらうようにうながした。その理由は、「10万年後の人類」を「あなたの子どもたちの子孫」と受けとめてもらった上で、この作業を通じて普段とは異なる親子の交流が生まれることを意図したからである。つまり、教え込む親ではなく、共に真剣に考えるパートナーとして子どもに接して、一緒に想像・創造する機会になれば、と考えたのである。

提出してもらうと、それら一枚一枚について、その場で、富田と縄田の両講師が直筆で「ひとこと」を書い



図4 40代男性による表現作品

た。実際にやってみると、実にわくわくした。教え込む講師ではなく、共に想像・創造することを楽しめた。双方の学びの場でもあった。その様子を、興味深げに覗き込む子どもたちもいた。「ひとこと」に何を書いてくれるのか待ち遠しい、待ちきれないといった感じであった(図5)。

ある女の子は「頭の上のものはラジオの電波をキャッチして、ラジオを聞くことができる。せなかにははねがはえていてどこまでもとべる。足はタイヤになっていてあるかざにころがっていどうできる」として、頭のアンテナと背中の中が印象的でチャーミングな女の子のイラストを描いてくれた。講師は「ラジオはAM? FM? テレビの音もきけるのかなあ〜?」、「足がタイヤおもしろい!!」と、ひとことを寄せた(図6)。

ある男の子は「火星にいじゅうしているため、きん肉がちいさくなり、ほねはもろくなる。自分では歩けないため、いすにのり、リモコンでそうじゅうする。(手や足がたい化する)」と記した。絵は、異次元空間にいる雰囲気が漂うなかなかの力作であった。「リモコンでそうじゅうするメカが見たいな〜! どんなのかな?」、「そうだね、火星にいるかもね」と講師がコメントを加えた(図7)。

そして帰る時には、子どもたちの表現作品について講師のコメントが入った用紙を「おみやげ」として



図5 子供たちの表現作品に対して講師が「ひとこと」を書いていく——双方の学びの場として

持って帰っていただいた。様々なロゴ入りグッズも良いだろうが、実際に話を聞いた生身の人からの直筆のひとことの方が、温かみがあるだろうと思ったからである。またあわよくば、子どもたちの将来への何かのきっかけになることを期待してのことでもあった。

## 人類の形態変化と絶滅の可能性を意識する

それでは、なぜ、「10万年後の人類はどのような姿になっているのだろうか?」という問いを選んだのか?

セミナーの講演では、生物としての人類が自然環境に応じてどのように多様な適応をしているか、その延長としてどのように異なった社会を構成し面白い文化を育んでいるか、海外のフィールドワークの状況を紹介することにより、「身近な日本社会だけが人類社会ではない」ことを感じ取ってもらえたと考える。

その上で、「種の絶滅」と「個体の死」の違い、種としての人類への進化の道り、未来における人類の形態変化と絶滅の可能性について、考えるきっかけを提供したかったので、この問いをつくったのである。10万年後とした理由は、現生人類はおよそ20万から15万年前にアフリカで誕生し、10万年前以降に世界に展開していったことを念頭に置いているからである。これまでの現生人類の10万年をもとに、これからの現生人



# 育みとしての地域研究 フィールドの成果を次世代に架ける試みにむけて

王 柳蘭 京都大学地域研究統合情報センター／京都大学白眉センター特定准教授

アジア・アフリカなどの諸地域において人類学や地域研究が積み上げてきた知的遺産をどのように次世代に身近なものとして理解してもらい、さらに豊かなイメージのもとに育んでもらうことができるだろうか。

地域研究の手法のなかでも、とくに現地での生活体験に限りなく密接したフィールドワークを重視する人類学者にとっては、自身が経験した異文化世界は、もはや客観的な知識として整理、分析するための対象にとどまらない。フィールドの中での調査者は、臭覚、味覚、触覚などの身体的アンテナを総動員し、異文化と一体化するような感覚をもつことも珍しくない。例えば、フィールドで出会う植物や食べ物に対してもっている知識は系統的、分析的、科学的な知識のみではない。その植物や食べ物が現地でどのような生態的環境のもとにあり、人々がどのように触れ、食べて、全体文化のなかに位置づけながら暮らしているのかについて、人類学者はそれを身体的、経験的に感じとり、自らの体の中に染み込ませているのである。それは、図鑑でみたり読んだりするレベルにとどまらず、現地の香りと人々の顔やその対象にまつわるローカルな歴史や風景が結びついて喚起されるのである。こうした認識的かつ身体的な知の豊かさは、科学的な手法によって整理された論文のなかではなかなか表現しにくいものである。あのおい、あの人と食べ物の関わり、人々の賑わいと風景をどのように文字で表現することができるのだろうか。エッセイならともかく、学術的目的と先行研究の批判から構成される科学的論文においては、その枠組みを容易に逸脱してしまうのである。

こうした身体的またはヴィジュアルな要素をよりリアリティに近い形で再現する手法に近年盛んな映像人類学がある。その手法から学ぶことは多く、研究者にとっては知の表象、知をめぐるコミュニケーションについて新たな学問的問題提起につながっている。しかしいまひとつ残念なことは、子ども向けに理解し

やすい形で世界各地の自然や文化が編集されているケースはまだそれほど多くない点である。私は3歳、6歳と10歳の子どもの手持ちのさまざまな地域の映像作品を見せることがあるが、子ども向けにその地域について理解を深めたり、楽しんでもらうための言葉やイメージの工夫がされていない場合、子どもたちはすぐに飽きてしまうのである。

こうした身近な子どもの反応をみながら考えたことは、幼児や学童向けに異文化を理解してもらうには、現場のリアリティを持ち込むことができればそれにこしたことはないが、それが不可能な場合、科学的手法で重視されている因果関係やその現象を説明するといった論文形式の知の伝達方法は効果を発揮しないという点である。また、ドキュメンタリーなどリアリティに迫った映像であっても、それが子ども向けに編集されていないかぎり、その映像は子どもにとっては難解であり、異文化を伝えるには限界があるのは否めない。

そうした点をかんがみると、幼児から学童期における異文化理解をサポートするうえでは、科学性や厳密性だけに執着せず、あえて異文化に対して持ちうるイメージの世界をどれだけ豊かにできるのか、といった点も見逃してはならない大事な視点ではないだろうか。試みに「中国」といった言葉から、現代の日本社会に生きる子どもたちはどのようなイメージをもつのだろうかと考えてみてほしい。また、国を限定せず、「アジア」といった言葉から、子どもたちはどのような広がりをもった豊かな世界を想像するだろうか。

私はこうした問いをもって、大学生向けの授業の中でアンケートを行ったことがある。しかし、そこで得られた学生のアジアへのイメージは、概して、貧弱なものであった。日本がアジアの一部であることを自覚している学生はまだいいが、日本はアジアではないと断言する学生がいたことには驚いた。こうした考えをもつ学生にさらにアジアについてのイメージを問うと、「貧しい」、「汚い」、「暑そう」、「ジャングル」といっ

た言葉が並んだ。これらの言葉を分析することも面白いと思うが、ここで重要なのは、なんらかの具体的な経験を日本以外のアジア諸国ともったことがない場合、学生たちは新聞やテレビなどといったマスコミが報道する一面的なイメージをそのまま維持し、あるいは改良を加えないまま頭のなかで温存している点である。海外旅行や調査にでかける機会がまだそれほど多いとはいえない大学生がもつ異文化についてのイメージはどこから、どのようにして蓄積されてきたのか、そうした課題を私自身突きつけられたのと同時に、異文化理解や接触は大学レベルでは遅すぎるのではないかという疑問を持つようになったのである。

それでは、異文化のイメージを豊かにする技法はほかに何があるのだろうか。ひとつには現地に子どもたちを連れ出して五感を通して教育する on site education がある。大学や大学院において実習科目として取り入れられている人類学的フィールドワークはその典型である。現場に身を置き、包括的な社会・文化理解を重視するフィールドワークの方法論は、異なる文化や地域との接触を通じて、自己のみならず、自己を含めた他者をめぐる環境との関わりや人としての生き方を再認識させる方法として、いまでは大学のみならず高校レベルでも用いられている<sup>1)</sup>。しかしながら、人類学的フィールドワークを実践している研究者が、次世代の子どもに向けた教育的実践者としてどれほど訓練されているのかは疑問に残る。研究者として科学的な知識とその方法論を学びはするが、教育的実践者としての経験は大学における講義以外にほとんどないのが実情ではないだろうか。

これに対して、子どもへの教育的実践という点において、人類学や地域研究は隣接する環境教育の経験から学ぶべき点が多い。環境教育では、フィールドワークの真髄とも重なりあう活動として、Place Based Education (地域に根ざした教育) が重視されている。PBEは知識詰め込み型、知識伝達型教育といった既存の制度化された学校教育への批判的反省によって生み出されてきた点において、人類学的実践にも通じる思想的土壌がある。PBEは実体験と参加型コミュニケーションを通じて特定の地域や場に身をおきつつ、その地域や場にある社会、経済、自然環境などを包括的に学び、持続可能で包摂的な社会の実現にむけた社会作りにおいて、その教育効果があることが指摘さ

れている(高野編著 2014、御代川・関 2008)。こうしたPBEの視点は学校教育では掬い取れないそれぞれの地域がもつ生態的・文化的世界観を、実体験を通して育む機会となり、その重要性は今後もますます高まるであろう。

しかし、PBEでなされてきたオータナティブな子どもの教育の場をめぐる議論において、現地に行くことで得られる経験に勝るものはないという一点ばかりでは、実際に現地に行けない(病気などによる)身体的状況にある子どもや、現地に行くことが難しい地域やいまだ広く知られていない少数の民族文化についての教育的創意工夫がなされにくいという問題がある。私は子どもをつれてフィールドワークを経験した親として、海外で異文化を体験することの教育的価値とその優位性は十分に認めているが、実際問題としてさまざまな教育的試行錯誤の余地があることを痛感するのである。次のようなケースをPBEはどのように対応するのだろうか。例えば、先天性疾患のため病院で苦しむ子どもたちやその看病に身を削っている親にどのように現地や異文化の香りを届けることができるのだろうか。あるいはまた、日本に住む子どもたちにとってはいまだ容易にアクセスしがたいアフリカについて、どのように豊かな生物・文化多様性の世界を体験してもらうことができるのだろうか。

そこで異文化研究に従事している人類学や地域研究の学徒はこうした子どもの教育をめぐる現代的課題にどのような役割を担い、向き合うことができるのかについて考えてみたい。すなわち、環境教育と地域研究あるいは人類学による協働作業の可能性についてである。昨今、研究者によるアウトリーチ活動の重要性が声高に指摘されており、例えば博物館や科学館における展示企画は、学術を広く社会に還元する一環として重要な活動である。しかし、しばしば巨額な予算を確保することによってのみ実現されるこうした博物館型企画とそのアウトリーチの方法は、多くの個人研究者には手の届かない活動である。したがって、個々の異文化研究者が、世界のさまざまな現場で培ってきた「文化遺産」を次世代の子どもたちに伝えるには、現実的な制約や課題を視野にいれつつ、学校の外か内かといった場の議論に収斂させず、また、博物館といった既存のハコモノに極度に依存せず、異なった知的コミュニケーションの方法論の開拓にむけて研

1) 京都の高校では海外でのフィールドワークが教育カリキュラムに加えられているケースがある。筆者は西京高校の学生にむけてフィールドワークについて講演を依頼された。

究分野を横断しつつ連携する必要があるといえる<sup>2)</sup>。

また加えて重要なのは、世界のさまざまな地域で観察し、収集してきた科学的資料を身近な空間を使って、子どもたち向けにアレンジしなおす教育学的工夫である。そこで求められるのは、学校教育がめざしてきた知識伝達型のパッケージ化された学習コンテンツではなく、むしろ異文化や地域についてより豊かなイメージを喚起させ、子どもたちの想像力を育ませるような、ストーリー性をもつコンテンツの開発ではないだろうか。児童文学の泰斗である松岡享子氏が指摘しているように、子どもの世界にはすでに絵本という語りの世界がある。松岡は、子どもをめぐる「文化遺産」には①絵と言葉の両方で伝える絵本、②言葉と身体で伝えるわらべ歌、③言葉と表情で伝える語り、という3つの要素があると指摘している。これらの3つの「文化遺産」を織り交ぜることによって、子どもたちはさまざまな世界のイメージを取り入れ、時には主人公と同一化しつつ物語を体験し、冒険することができるという。とくに、重要なのは、絵本や歌や語りから取り入れられたイメージは、その後の子どもの意識的行動にも影響を与え、イメージは留まるのみならず、さらに変化し、成長し、子どもの精神世界、内的世界において血肉化されるという点である(松岡 2000: 19-20, 25-32)。すなわち、絵本やわらべ歌、語りによって、ストーリー性のある世界を身近に引きつけるのみならず、そこで出会った世界とつながりの感覚を育み、多様な人と多様な場所を自らにつなげていけるイメージの力を養うのである。

世界各地をまたにかけて研究領域を広げている人類学や地域研究者が次世代に残していく「文化遺産」は科学的知識だけではあるまい。未来を担っていく子どもたちに向けた多様性と豊饒性に満ちたストーリーを削ぎ落とさず、むしろ積極的に工夫を凝らしたコミュニケーション型の成果物(コンテンツ)を創出することによって、あらたな知の継承が可能になるのではないだろうか。そうした点において、イメージの世界とフィールド世界との架け橋となるような——育みとしての地域研究の可能性が開かれているのであ

る。研究者が因果関係にもとづいて諸世界の現象を科学的に説明し伝達することは、当然の責務であるが、その一方で、グローバル化しより多様な世界との接触が増えていく現代世界とその次を担う子どもたちには、多様な場と多様な人をつなげていくイメージ力が必要であることも同時に伝えていくことが重要である。グローバル化していく現代世界のなかで、人類学や地域研究者ができるオータナティブな知の伝達方法について創意工夫をするのみならず、子どもたちに向けた多様な知の伝達の場と機会をさらに開拓していくことが求められているのである<sup>3)</sup>。

### 参考文献

- 高野孝子編著(2014)『地域に根ざした教育——持続可能な社会づくりへの試み』海象社。
- 松岡享子(2000)「子どもと絵本」松澤貝子編『子どもの成長と環境——遊びから学ぶ』講座 人間と環境(7)、昭和堂、p.16-35。
- 御代川貴久夫・関啓子(2009)『環境教育を学ぶ人のために』世界思想社。

2) 民族植物学を研究する落合雪野らによって実践されたトラベリング・ミュージアム、すなわち現地資料と企画メンバーが場所を変えながら展示していく手法は、フィールドと日本を往還しつつ開かれた形で研究者が社会に学術成果を還元する点において注目に値する(実施期間: 大阪2007年10月4日~12月18日、台湾・台東2008年5月20日~8月31日、ラオス・ルアンパバーン2007年3月30日~4月2日、ラオス・ヴィエンチャン2007年4月4日~7日)。また、人類学者の縄田浩志が企画に関わった国立科学博物館「砂漠を生き抜く——人間・動物・植物の知恵」は現地に生きる民の声を反映させるためのさまざまな工夫がとられた点で、科学至上主義を超えたあらたな展示への挑戦であるといえよう。

3) 筆者は2014年度京都大学学術情報メディアセンター、コンテンツ作成共同研究「異文化と地域研究の『知』を子供に伝えるマルチ・コンテンツ作成」(代表・王柳蘭)において、環境教育、地域研究、子ども研究者とともにあらたな異文化教育コンテンツ作りにむけてのネットワークを構築しつつある。

## JCAS 次世代ワークショップ 「文化多様性に学ぶ環境教育」プロジェクト概要

### ■ 主催機関

- NPO法人平和環境もやいネット
- 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ
- 京都市左京区朝カフェ「自然と文化を大事にするグループ」
- 京都府地域力再生支援事業(『京都の森へ出かけよう!地球たんけんたい2』助成)

### ■ スケジュール

- 2013年9月24日(水)  
プレワークショップ実施(京都大学稲盛財団記念館)  
『文化多様性に学ぶ環境教育  
—実践・理論構築に向けたブレインストーミング』
- 10月~12月 プログラム構築、参加者一般募集
- 11月30日(土)  
『京都で世界を旅しよう!地球たんけんたい2』  
実施(京都大学稲盛財団記念館)  
①大草原!羊と旅する女の子(モンゴル遊牧民WS)  
②わたしの家は雲の上(ヒマラヤ・チベット族WS)
- 12月7日(土)  
③森でゴリラに会ったら、どうする?(カメルーン、  
バカピグミー族WS)  
④ボクはオオカミ族(北米先住民WS)
- 12月14日(土)  
『京都の森へ出かけよう!地球たんけんたい2』  
実施(京都市北区中川北山町)
- 2014年2月6日(木)  
最終ワークショップ実施(京都大学稲盛財団記念館)  
『生物文化多様性に学ぶ環境教育  
—エコソフィーに学ぶ意義と可能性を考える』

### ■ プロジェクトメンバーおよび役割分担

#### ● 企画・協働実践者

飯塚 宜子 企画責任・運営  
NPO法人平和環境もやいネット事務局長/  
同志社大学総合政策科学研究科博士(後期)課程

王 柳蘭 企画運営・アドバイザー  
京都大学地域研究統合情報センター/京都大学白眉センター特定准教授

山田 勇 プログラム総合監修、アドバイザー  
京都大学名誉教授

木村 友美 WSプログラム構築・協働実践  
京都大学東南アジア研究所連携助教

大石 高典 WSプログラム構築・協働実践  
京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員

山口 未花子 WSプログラム構築・協働実践  
北九州市立大学地域共生教育センター特任講師

岩井 吉彌 フィールドトリッププログラム協働実践  
中川自治振興協議会景観保全委員会委員長、元京都大学農学部教授

石岡 廣一 フィールドトリッププログラム協働実践  
中川自治振興協議会会長

岩水 俊一 フィールドトリッププログラム協働実践  
中川自治振興協議会副会長

中川北山町のみなさま フィールドトリッププログラム協働実践

#### ● プロジェクトメンバー

阿部 健一 総合地球環境学研究所教授/  
NPO法人平和環境もやいネット副理事長

生方 史数 岡山大学環境管理理工科准教授

大久保実香 琵琶湖博物館学芸員

小林 舞 京都大学地球環境学舎博士課程2年

高野 孝子 ECOプラス代表/早稲田大学留学センター教授

津田 祥代 京都市左京区役所地域力推進室

内藤 大輔 総合地球環境学研究所特任助教

仲上 美和 同志社大学総合政策科学研究科修士課程1年

中野 民夫 同志社大学総合政策科学研究科教授/  
ワークショップ企画プロデューサー

縄田 浩志 総合地球環境学研究所准教授

新川 達郎 同志社大学総合政策科学研究科教授

西村 仁志 広島修道大学准教授

振本ありさ 同志社小学校英語科(国際理解)教諭

McGreevy, Steven 総合地球環境学研究所特任助教

三宅 由莉 trois mason 代表

森田 芳文 京都府文化環境部環境・エネルギー局副局長

山本 博之 京都大学地域研究統合情報センター准教授

吉永 一休 京都府府民力推進課

#### ● デザイン協力(チラシ/ワークショップシート/旅のしおり)

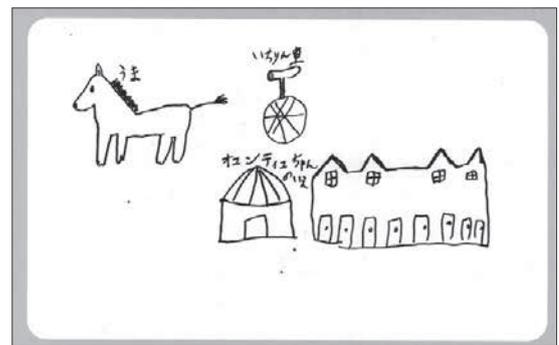
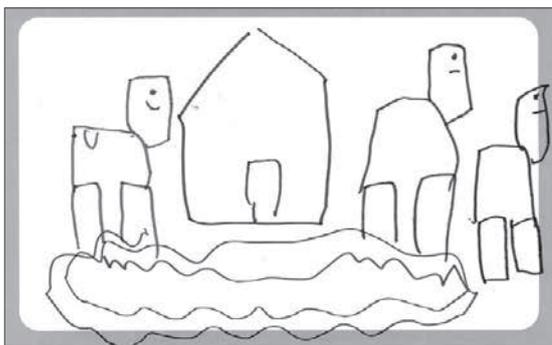
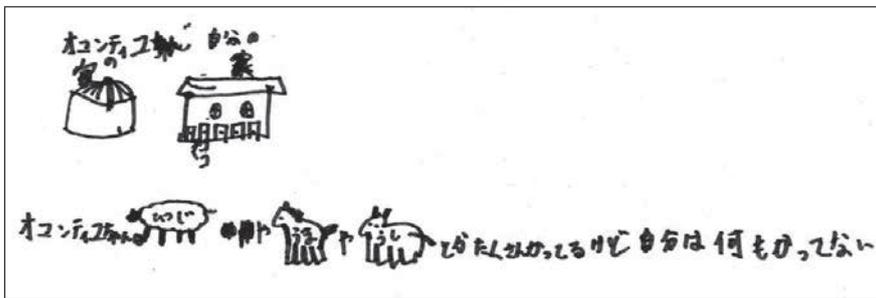
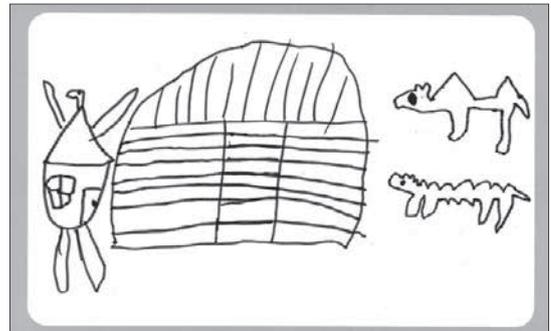
菊地 薫

※所属・役職はプロジェクトを開始した2013年当時のもの

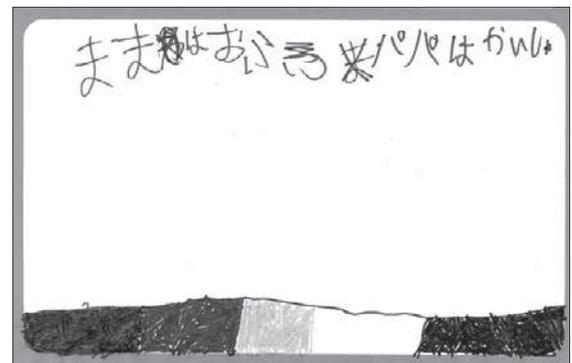
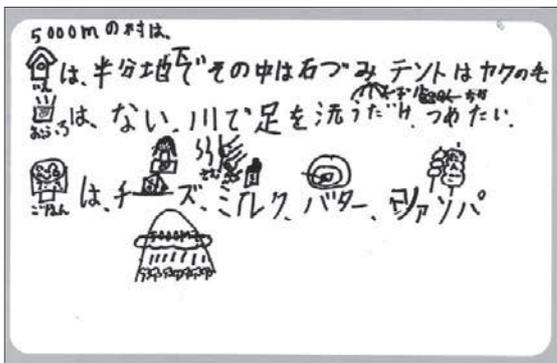


子どもたちのワークシートから

トリップ1



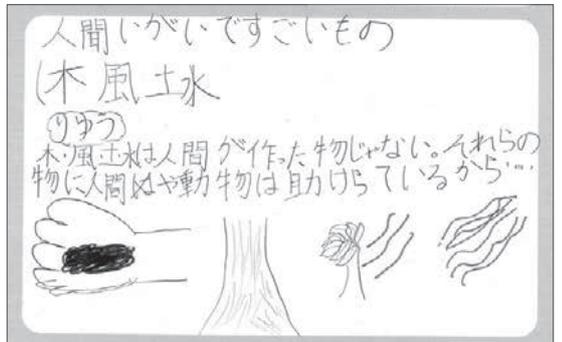
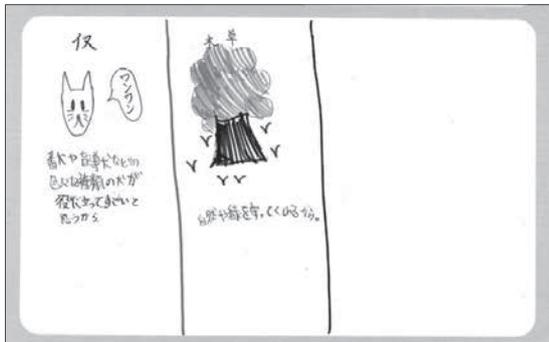
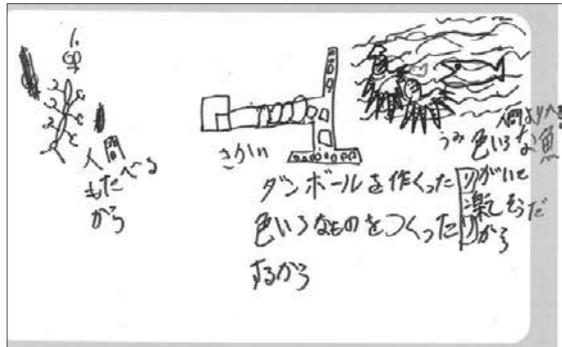
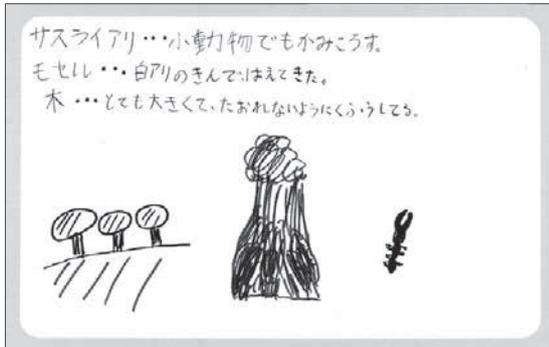
トリップ2



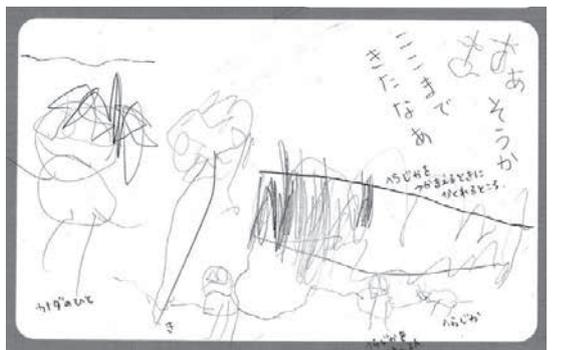
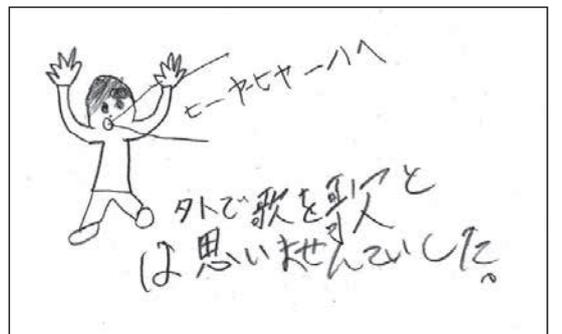
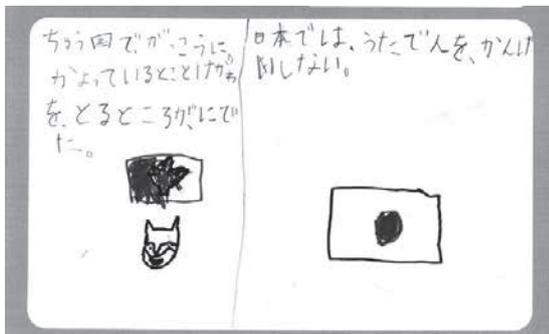
# 資料

## 子どもたちのワークシートから

### トリップ3



### トリップ4



## あとがき

夫の転勤に伴い移り住んだ大阪で、小学校のPTAで出会った友人が、国立民族学博物館地域研究企画交流センター(現・京都大学地域研究統合情報センター)でのアルバイトを紹介してくれた。世界各地域から帰国した先生たちが、臨場感満載の話とともに写真を見せて下さったり、お土産を下さったりする。一見不可思議に思える習慣なども、それぞれが、かけがえのない生活世界であり、それぞれの自然環境を守るものであり、カミガミと共存する場なのだと気づくのにあまり時間はかからなかった。

それは大変大事な気づきだと思えた。この時自分が感じた不思議さを、子どもたちにも届けたいという思いは今も変わらない。そして国際シンポジウムを年間3本以上担当する仕事をさせて頂く中で、「生物文化多様性」、「ポリティカル・エコロジー」、「コモンズ」などの単語にも親しんでいった。転職先の総合地球環境学研究所では本務の傍ら、子ども向けの環境教育ワークショップを担当する機会に恵まれた。高等学校講師の経験で一方向的に「教える」手法に疑問を持っていた私は、その新しい学びの方法に目を開かされた。その後雇用年限満了に伴い地球研を退職し、子育てへの違和感を大きな動機とし、同志社大学総合政策科学研究科ソーシャルイノベーション研究コースに入学した。そこには多様な問題意識や経験を持った社会人院生、若い仲間、多くの実践や学術経験を積んだ先生がおられ、私の「もやもや」をカタチやウゴキにすることを教えて下さった。

本プロジェクトが実施できたのは、山田勇先生、王柳蘭先生、阿部健一先生、稲村哲也先生、山本博之先生、小長谷有紀先生を始め、多くの方々のおかげである。広報チラシ作成は菊地薫氏(当時地球研)に依頼し、京都新聞に告知記事を書いて頂いた。同志社小学校、京都府府民力推進課や、京都市左京区の行政の方々、他の方々にも広報協力を頂いた。JCAS事務局、京都大学地域研究統合情報センター事務室の方々に大変お世話になった。スタッフとして京都大学、同志社大学、主催機関であるNPO平和環境もやいネット、友人、知人の暖かい協力を得た。トリップ5は中川自治振興協議会の多くの方々の全面的なサポートを得て実施した。そしてお申し込みを頂き、本実践を体験して頂いた子どもたちや参加者の皆様のおかげで、本プロジェクトは実施することができた。受け入れの都合で参加お申し込みをお断りせざるをえなかった方々には深くお詫びしたい。本冊子をまとめるにあたり、新川達郎先生、柳澤雅之先生、大石高典氏には、特に多くのご指摘を頂いた。最後に、京都大学地域研究統合情報センター、地域研究コンソーシアムの皆様に深く感謝申し上げたい。

本プロジェクトの続編、「京都で世界を旅しよう2015地球たんけんたい③」は、京都府受託事業として、2015年1月末時点、実践中である。本報告書に掲載した4つのトリップのプログラムを大きく改良し、春のトリップ5も控え、のべ250名以上の方にお申し込み・ご参加を頂いている。同志社小中学校、ノートルダム小学校、京都教育大付属小中学校、文教中学高等学校と、多くの学校に趣旨をご理解頂き、チラシの個別配布を頂くことができた。京都大学東南アジア研究所、総合地球環境学研究所「小規模経済と長期的持続可能性」プロジェクト、そして地域研究コンソーシアムの協力を頂いたこと、また枠組みづくりや実践に力強く参画して下さる方、広報協力して下さる方、お声をかけて下さる方、また学術的視点のヒントを与えて下さる方など、多くの方々との関わりが広がっていくことが、なにより嬉しい。さらにわくわくするような研究報告ができるよう、皆様の思いや視点を寄せて下さること、またご指導やご協力を心より願うことで、あとがきとさせて頂きたいと思う。

飯塚 宜子

飯塚宜子・王柳蘭 編

JCAS Collaboration Series 9

**子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか**  
感じ方の育みと総合的理解の視点

---

発行 2015年3月

発行者 地域研究コンソーシアム(JCAS)  
京都大学地域研究統合情報センター  
NPO法人平和環境もやいネット